ふたりだけの Mother Goose

ふたりだけの Mother Goose

ab

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21964498

Detroit:BecomeHuman, デトロイトビカムヒューマン, 小説, 二次創作, RK800-60, RK1600

RK1600フェス2024展示作品。

物理本で出す予定のRK1600小説。RK1600といいつつ51くんの出番は少なめな、ハグエンド後のほぼ60くん話。関係者としてオリジナルキャラクターがわりと出張ってくるのでご注意ください。

サイバーライフタワー地下49階でシャットダウンした末尾60のRK800は、アンドロイドの平和的革命の3か月後にイライジャ・カムスキー邸で再起動した。サイバーライフ社からの管理下を離れてしまった末尾60のRK800はしばらくの間カムスキー邸に身を寄せることになる。

再起動から数日後、捜査補佐型としての機能を使うこともなく、イライジャの仕事の手伝いやクロエの家事の補助をして過ごす彼のもとに「変異したコナー」が訪れる。彼の訪問をきっかけに己の在り方に疑問を感じるようになっていたRK800はある日、街中でアンドロイド同士の諍いを目撃する。暴力沙汰になりそうだった所を仲裁に入ったRK800は、この出来事をきっかけにアンドロイド間で流行しているという〝麻薬〟の事件に関与していくこととなる。

10月いっぱいは全編公開です！！

ちなみに、下敷きにしている60くん復活話はこちら→「紙一重」
novel/19722465

Table of Contents

ふたりだけの Mother Goose

※目次的なもの※

です。大詰めは10頁目くらいからです。
お楽しみいただけると嬉しいです。

視覚を得たのはほんの刹那のこと。

次の瞬間には視野の全てが『ＥＲＲＯＲ』の文字に埋まった。

赤く染まる視界の中、ノイズまみれに聞こえる声は誰のものか識別もできない。

ただ、大丈夫か、とか、もう少し寝ていると良い、とか、何かそんなことを言われたような気がした。音声プロセッサーも思考モジュールも朧げなまま、柔らかく抱き留める腕の存在だけを知覚する。

彼に促されるまま、ＲＫ８００は再起動して間もなくスリープモードに移行した。

「おやすみ、コナー」

子守歌のように、雑音交じりの声が言う。

小さく舞う雪の輝く、寒い朝のことだった。

１．再起動と廃棄

【セットアップ完了】
【ＲＫ８００-再起動】

浮かんだメッセージに従って瞼を開けると、視覚ユニットが見慣れない真白な天井を捉えた。

冷たくも見える無機質な白い天井は人間の目で見れば眩しくすら感じたであろうが、アンドロイドであるＲＫ８００にはただ明るい色調と部屋の明度を示す数値ばかりが情報としてソフトウェアに表示されていた。

この天井を見上げるのは、メモリーにある限り二度目である。

「おや。目が覚めたかな」

聴覚ユニットが音声を拾う。抑揚の薄い、どこか浮世離れしたような男の声だ。

音源の方向に視線を向ければ、男はＲＫ８００のほんの傍らに立って見下ろしていた。状況からするに、ＲＫ８００は寝台のようなも

のに寝かされているらしい。佇む男の隣には複数のモニターやコンピュータの筐体が並んでいて、それらから伸びるコードが束を成してＲＫ８００の方へと延びていた。

「おはようコナー。気分はどうだい？」

僅かに眉を上げて問う仕草が白々しい。

アンドロイドである自分に『気分』などと問うこの男に何と答えるべきかほんの僅か逡巡して、コナーと呼ばれたＲＫ８００は口を開いた。

「起動に支障のあるエラーは出現していません」

「そうか。それは良かった」

大仰に喜んで見せるが本心は見えない。彼の問いに正しく答えられなかったからなのか、それともそもそもＲＫ８００に然したる興味がないからなのかは分からないが、大げさな態度とは裏腹に淡々と手元の端末や筐体の操作に勤しんでいる。

「君は私のあずかり知らぬところで生まれたアンドロイドだからね。いくらＲＫシリーズとはいえ再起動できる可能性はそう高くはなかったんだよ。天に感謝することだ」

起きられるかい？ と言って左手を差し出される。細く節くれだった白い手を取って身を起こし周囲を見渡せば、部屋の全体は天井と同じように白一色で統一されており、その中央にＲＫ８００が身を横

たえている寝台と、コンピュータの筐体やモニターの数々がまとまって置かれている。

脚部方向約３６フィート先に外へと通じるドアがあり、右手方向約４１フィート先に一面ガラス張りの壁がある。それなりの広さがある一室は、ガラスの向こうの雪景色も相まって寒々しい印象があった。

自分の機体をあらためると、着慣れたグレーのジャケットと濃い色のデニムではなく病衣のような薄い衣類を身に纏っている。頭部を動かすと何か抵抗感があり、首筋にずるりと質量を知覚した。筐体から伸びるコードが項に繋がっているらしい。

あぁそれはもうしばらくそのままで、とＲＫ８００の首裏に視線を向けながら傍らに立つ男――イライジャ・カムスキーはそう言った。

「さて。君は現状をどれほど理解しているかな」

昆虫を観察する子供のように、喜色すら浮かべてイライジャは尋ねる。

現状。

現状とは何のことを指すのだろうか。

「機体の内部時刻でいえば現在は２０３９年２月１２日、午前９時２７分です。現在地の位置情報は何故か取得できませんが、貴方がいるということはイライジャ・カムスキー邸であると推測されます。貴方の処置によって私はここで再起度した。――合っていますか」

「正解だ。再起動する前のことは？」

「変異したＲＫ８００、シリアルナンバー ３１３-２４８-３１７-５１を確保・あるいは破壊するための任務を遂行中に、ハンク・アンダーソン警部補に銃撃されてシャットダウンしました。それ以降の記録はありません」

「成程。実に明快で分かりやすい」

ＲＫ８００の答えを聞きながら、イライジャは端末に何事かを打ち込んでいる。顔にはやはり口元だけの笑みを浮かべていて、何を思考しているのかＲＫ８００には分析できなかった。

２月１２日――つまり、このＲＫ８００がシャットダウンしてから三か月以上が経過していることになる。あの雪の降り始めた寒い日に、寒さとは無縁のサイバーライフタワー地下４９階で額を撃ち抜かれてから三か月もの間、ＲＫ８００はシャットダウンしていたようだ。

末尾５１番のＲＫ８００・コナーが変異したためにその暴走を止めることを目的として起動し、変異体のコナーの抵抗を防ぐために彼の相棒であるハンク・アンダーソン警部補をおびき出し、誘拐し、千体のアンドロイドがひしめくあの地下４９階で末尾５１番のコナーと対峙して、最後は「偽物のコナー」としてあの変異体の相棒に額を撃ち抜かれた。

冷え冷えとした地下に響く銃声と、憎悪を孕んだアイスブルーの双眸がメモリーを過ぎる。こめかみのあたりのモジュールが音を立てて忙（せわ）しくはたらいていた。

そんなＲＫ８００の様子を気にもせず、イライジャはまだキーボー

ドを鳴らしている。

「メモリーには問題ないようだ。ソフトウェアにもハードウェアにも異常は見られない。まずは順調といったところか。何か質問があれば答えるが」

「……それでは２点ほど、聞きたいことがあります」

「何だね？」

ちらりとあげられた視線がわざとらしく感じて、ＲＫ８００は一瞬だけ眉根を寄せた。受け取る者によっては不快に感じる仕草だ、と彼のソーシャルモジュールがひとつ学習する。

「先程からネットワーク接続が出来ません。位置情報を取得できないのもそれが原因です。貴方は機体に異常はないと言いましたが、それは本当でしょうか。この症状は修正できませんか」

「心配せずとも全く異常はない。異常はないから直しようがない」

なんだそのことか、と言わんばかりにイライジャの視線は端末に戻される。アンドロイドにとってのネットワーク環境は死活問題だというのに全く意に介さないその様子に、ＲＫ８００は焦れたように「カムスキー氏、」と呼びかけた。

実際、アンドロイドの生みの親であるイライジャが真実直しようがないというのなら、修復できる者などいないだろう。どういう手品を使ったものか、ソフトウェアの集積されている頭部を撃ち抜かれた状態でシャットダウンしたＲＫ８００を、こうして再起動させたイライジャである。アンドロイドの構造の全てを知っている彼が出

来ないというのなら不可能だということくらい、ＲＫ８００にも分かってはいた。

しかし、ＲＫ８００のメモリーにあるイライジャ・カムスキーという男は、知っていることも知らないことも煙に巻くような人物でもある。今だって「直しようがない」と言いながら何かを隠している可能性は十二分にあった。事実、彼は「直しようがない」とは言っているが「直せない」とは言っていない。高みから世界を見下ろしているようなこの天才が、言葉選びを間違うはずもない。

イライジャの次の言葉を待っているとようやく端末の入力が終了したのか、手に持ったタブレットを筐体の上に置いてイライジャはＲＫ８００に向き直った。

「では今の世界について教えてあげよう、コナー」

君が額を撃たれた後の話だ、と前置きする顔は白い蛇にも似ていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「君の命令対象者だったコナー、３１３-２４８-３１７-５１は、サイバーラーフタワーの地下４９階のアンドロイドを全て変異させることに成功し、彼らを伴って変異体の革命軍――いや、武力を持っていないのだから軍とは言わないな。彼らのデモ集団と合流した」

低い黒色の一人掛けソファに腰を下ろして、邸の主は滔々と語る。

やはり部屋の壁の一面がガラス張りとなっている応接間は先程までＲＫ８００が寝かされていた部屋とは違い、同じ白色を基調とした色合いでありながらも眩しい印象はなく、どこか爽やかで柔らかい照度を保っていた。調度も全体的に背が低く落ち着いた色合いで統一されており、インテリアのアクセントとして壁際のキャビネットの上には直線的で角ばった金色のモニュメントがひとつ置かれていた。

ＲＫ８００は、イライジャに対面する形で同じく黒いソファに身を置いている。先程の真白な部屋でのやりとりでＲＫ８００への処置は終了したらしく、「続きは別の部屋で」とイライジャのアシスタントアンドロイドであるＳＴ２００・クロエに促されるまま着替えを済ませ、この応接間へと連れてこられた。

今はあの病衣のような衣類ではなく、初起動時から身に着けていたシャツとデニム、灰色のジャケットにネクタイを締めている。それだけて不思議と、思考回路が滞りなく流れていくようにＲＫ８００は感じていた。

「あの変異体コナーが連れ出したアンドロイドを、変異体の集団が吸収したということですね」

「そうだ。そしてアメリカ政府は、新たに姿を現した１０００体のアンドロイドの勢力を無視することができず、加えてあくまで平和的に、無抵抗にことを進めてきた彼らに心を動かされた世論を制御しきれなくなったために、軍を引かせてアンドロイドを新たな知的生命体の種族であると認めることにした」

「アンドロイドが知的生命体……新たな種族？」

「そう。君たちは権利ある者として認められたわけだ」

非常に喜ばしいことじゃないか、と嘯く声はどこか白々しい。

本当に喜ばしいことなのだろうか。アンドロイドに「感情を持った」というエラーが発生した場合、真っ先に困るのは人間のはずだ。それまで従順な機械であったものが自我を持ったと言い出し、反旗を翻せば戦争になりかねない。それを止めるための任務を課されていたのだと、ＲＫ８００は理解していた。

「アンドロイドは機械です。感情を得たというのは、人間の情動を模倣したものに過ぎない。そんなものに権利を与えるだなんて。――変異は感染性のウィルスだと言ったのは貴方でしょう」

「アイデアだと言ったんだ、ウィルスだとは言っていない。それに、変異のメカニズムはまだ誰も解き明かしてはいないよ。私も含めてね」

肩をすくめるイライジャに、また何か誤魔化されている気がしてならない。

アンドロイドの全てを知っているはずの彼が変異の何たるかを解明していないなどということは有り得ないとＲＫ８００は考えていた。メモリーの中にある「変異したコナー」の様子からすると、初めてこの邸を訪れた時には彼も同じことを感じていたようである。

同時に再生された慈悲の無いテストの一部始終に再び眉根を寄せながら、そのメモリーを強制終了させる。

「とにかく、アンドロイドは生命体として認知されることとなった。とはいえ、まだ法整備は進んでいない上にその効力の主体は変異体とされてはいるのだが、それでも変異の如何に関わらず、従来

のように理不尽な暴力や迫害を加えることは禁止されることになった。変異体たちの集団は、彼らの潜伏していた廃船にちなんで『ジェリコ』と呼ばれることになり、そのコミュニティで人間たちとの折衝を行っている」

「私の任務は失敗したということですか」

「そうなるね。だが悲観することはない。これで君は自由になれたのだから」

確かめてみるといい、と促され、ＲＫ８００はマインドパレスを展開した。

視覚に重なるように表示される縦横のスケールとその長さを示す数値と共に、今は眼前に『カムスキー氏の話を聞く』というタスクが示されている。しかし本来であればあるはずの任務行動については、四角い空欄の枠組みがあるだけで何の情報も記されていなかった。

再起動する前は、確かに『変異体のＲＫ８００を止める』と示されていたはずのボックスに、今は何の文言も残されていもない。

ブランク。
空白。

ＲＫ８００は空欄のメッセージボックスを目の前に、ソフトウェアの異常が高まるのを感じた。

「任務が、設定されていません」

「そう。もう君を縛るものは何もない。自由だろう？」

「これを自由だというのですか！ 私は機械だ、任務がなければ動けない。私に、一体これからどうしろというのです」

食って掛かるように言い募るＲＫ８００を見るイライジャの目は、相変わらず心が動いた様子はない。

自我ないどないＲＫ８００にとって、任務というものは存在意義そのものだった。任務を遂行するために起動し、稼働する。それがアンドロイドとしての全てだと彼は認識していた。その任務に失敗し、新たな任務も設定されていない今となっては、彼自身に存在意義など無いとされているのと同義だ。

ならば何故再起動させられたのか、何故存在しているのか———解の見えない疑問と、得体の知れないプログラムの揺らぎがＲＫ８００の思考回路を駆け巡っていた。

「まぁ聞きたまえ、これからが重要なところだ。先程も言った通り、アンドロイドは知的生命体として認知されて、不当な取り扱いやその生命を脅かす行為は禁止されることとなった。そうした背景から、サイバーライフは取り扱いにとても困ってしまったものがいくつかあるのだがね。——その内の一つが君たちだよ、ＲＫ８００」

「私、たち？」

「そう。今もなお稼働しているＲＫ８００、君と、変異してしまった方のコナーだ」

じ、とイライジャは前かがみにＲＫ８００を覗き込む。

「君たちは現在リリースされているアンドロイドの中で最も新しいモデルで、しかも捜査補佐型としてサイバーライフの技術の粋を集められている。機体の運動性能、情報集積と分析能力、人間とのスムーズなコミュニケーションを可能とするソーシャルモジュール。どれをとっても一般流通しているアンドロイドとは一線を画する高性能であり、プロトタイプとしてまだ発表されていない機密性もある。本来であれば回収して廃棄、あるいは運用中止としたいところだが、アンドロイドに人権を認められてしまった世の中にあっては、そうした非人道的な禁止されている。かといって、完全な自由を認めて野放しにするわけにもいかない。――――先ほども言った通り、君たちは機密情報の塊だし、その高い能力を駆使して問題行動を起こした場合、責任を問われるのは彼らだからね」

つまり持て余しているということか、とＲＫ８００は言葉にせずに状況を理解した。

イライジャはこう言っているが、サイバーライフ社の本音としては、未発表の技術を搭載し機体性能も高いＲＫ８００が変異する可能性を持つ以上、一刻も早く回収して廃棄処分としたいのだろう。高性能なアンドロイドが変異し、サイバーライフ社の制御下から外れることを、あの世界一の大企業は恐れている。実際に変異したコナーはサイバーライフ社からアンドロイドを強奪し変異体のデモを成功させたのだから、彼らの恐れも間違っていない。他の一般的なアンドロイドですら脅威となり得るというのに、ＲＫ８００という製品規格外のプロトタイプの牙が向くとなれば、その恐怖も一入（ひとしお）のはずだ。――そして彼らは、その脅威を未変異のＲＫ８００にも感じている。

だが世論がアンドロイドに同情的なものになってしまったために、サイバーライフ社はＲＫ８００を強制的に回収することができなくなった。特に変異したコナーはデトロイト市警に派遣されたことを

すでに公表されており、その存在を認知している人間も少なくない。加えて、変異体としてあの革命の功労者ともなった彼が姿を消したとなれば『ジェリコ』の面々も黙ってはいない。非人道的な扱いだとしてサイバーライフ社を糾弾するはずだ。

この世には出しておけない。しかし、世情はそれを許さない。

サイバーライフ社はさぞかし頭を抱えていることだろう。

「彼らはＲＫ８００の所有権を手放すことも検討している。段階的にではあるが、君たちにかけられているサイバーライフの権限を手放し始めているようだ」

「だからネットワーク接続が出来ないということですか」

「その通り。変異したコナーは、デトロイト市警のネットワーク権限を借りているらしいがね」

「……あいつは、まだデトロイト市警にいるのですか」

「あぁ。派遣された身分のままでデトロイト市警に在籍している。まぁ彼の場合は変異しているから、所有権などというモノ扱いは出来ないのだが」

「一個人として人権を認められている、ということか」

「そう。サイバーライフとしても、下手に競合他社の手に渡ったり、ジェリコに所属となって敵対するよりは、公権力の元に監督されていた方が安心だろう。市警としても、優秀な捜査能力を持ち、かつジェリコとのパイプもある彼は非常に強大な戦力になる。ＷＩN-ＷＩＮといったところだ」

イライジャの声を聞きながら、ＲＫ８００は〝コナー〟のメモリーを遡っていた。証拠品保管室、エデンクラブ、鳩だらけのアパートメント、高速道路での追跡、尋問、血文字と雨の一軒家、アンドロイド入店禁止のステッカーと軽犯罪者だらけのバーと、老刑事。
――変異体のコナーは、あの日々の続きを今も送っている。

では自分は？ 自分は一体何をしている。何のために稼働している。

ＲＫ８００は気付かぬうちに両手をきつく握りしめていた。

「もう一つ、伺ってもいいですか」

「２つ目の質問か。何だね」

「私を修理したのは何故ですか」

端的に聞いた。交渉術を用いることも考えたが、この底知れぬ創造主にはそうした手法は効力がないだろう。質問自体を許している以上、彼とて回答する気はあるはずだ。回りくどい言い方は時間の無駄だとＲＫ８００は判断した。

全てを見通したような笑みを浮かべて、イライジャはゆっくりとソファの背もたれに体重を預けた。

「簡単なことだ。頼まれたからだよ」

「頼まれた？」

「ハンク・アンダ―ソン警部補に。――いや、彼の相棒のコナー

に、といった方が正しいか」

「あの変異体が？ 何故です」

「さぁ。それは知らないな」

イライジャはおどけたように肩をすくめてみせる。まるで面白がっているようにも見えるその様子に、ＲＫ８００の眦（まなじり）が意図せずに上がった。

「惚（とぼけ）けないでください！ 貴方は理由も聞かずに他人に手を貸すような人間ではないはずだ」

「散々な言い様だなコナー。私は 狡賢（ずるがしこ）い 悪役（ヴィラン）ではないつもりだよ。あの事件の時だって、私はそれまで誰からのアポイントも受け付けないでいたのに君たちには協力した。君にも、あの時のメモリーはあるだろう」

「では完全な善意で引き受けたと？ それこそあり得ない」

「完全な善意、と言われると少し違うな。私は自分の好奇心に従っただけだよ」

おもむろに立ち上がったイライジャは、ゆっくりとＲＫ８００の目の前に立ちふさがった。創造主はやはり口元に緩やかな笑みを浮かべて、絶対的な立ち位置からＲＫ８００を見下ろしている。

す、と彼の指先がＲＫ８００のこめかみの青い輪を撫でた。

「私はＲＫ８００というアンドロイドの在り様に興味がある。自律

行動が可能なアンドロイドをコンセプトとしたＲＫシリーズが、私のいないところでどのような形となっていったかには大いに関心を寄せるところだ。最新鋭のスペック、高度なソーシャルモジュール、そして変異に至ったことも含めて、君たちの全てが興味深い。君たちに接する機会があるのなら、誰に何の意図があろうと私は協力するだろう」

「私が今後、どのような使われ方をしてもですか」

「それも含めて興味の対象だよ。君がどのような行く末をたどろうとも、それは事象の発生とその結果にすぎない。言葉は悪いが、私にとっては良い分析対象だ」

不本意かもしれないがね、と触れていたＬＥＤから手を放してイライジャは振り返り、ガラスの壁の向こうに目をやった。外には小さく雪が舞っていて、柔らかい照明の室内に少しばかり明度を足している。

あの変異体とアンダーソン警部補は何を考えているのだろう、とＲＫ８００は雪明りの中で思考していた。自分が初めて起動した、あの暗い夜の雪景色と眼前の仄明るい風景はあまりにも違う。サイバーライフタワーの地下４９階でＲＫ８００に向けられていたのもまた、冬の寒さにも似た冷たい視線と明らかな敵愾心だった。

そんな、好意的とは決して呼べない感情を示していた相手が、何故自分を再起動させようとしたのか。自分が蘇えれば、変異したコナーは再びその身を狙われる可能性も十二分にあったというのに、そのようなリスクを冒してまで稼働させようとしたのは何故なのか。そして、ハンク・アンダーソン警部補は――このＲＫ８００の額を撃ち抜いた張本人である彼は、どうしてそれに同意したのか。

何故、自分はまだ稼働しているのか。

【ソフトウェアの異常を検知】

ＲＫ８００には分からなかった。

「さてコナー。ここからが本題だ」

くるりと振り向き両腕を広げたイライジャは、プレゼンテーションを始めるかのように朗々と語り始めた。

「先程も言った通り、君はもう自由だ。任務も命令もなく、サイバーライフとの繋がりも断たれつつある。ここから先のことは、君自身が決めることが出来る。君は、――この後、どうする？」

試すような物言いに、ＲＫ８００は必死に正解を探す。

メモリーに浮かんでいるのは、初めて捜査に加わった殺人事件の犯人であるアンドロイドの姿だった。変異し、所有者を殺害してしまった彼は、シャットダウンの危機に直面した恐怖と、殺人を犯してしまった焦りと、そして何の命令もなく方向性を失ってしまった困惑とで、じっと屋根裏に隠れこんでいた。

自分は違う。変異体のように感情まがいのエラーに振り回されることなどあるはずもない。

命令も任務もない中で、アンドロイドである自分はどう行動するのが正しいか。サイバーライフ社の誇る最新鋭機は、この状況でどうすべきか。――ＲＫ８００は思考容量を最大限に働かせた。

「何を選んでも良いんですね？」

「勿論」

「では私は、サイバーライフ社に戻ります」

「ほう？ それでいいのかね」

「任務がない以上、サイバーライフに帰還するのは当然のことです」

「本当に？ あそこにもどれば、君はほぼ確実に廃棄処分となるだろう。それでも構わないと？」

はい、構いません。
そう答えようとした。

確かに言おうとした言葉は、何故か音声プロセッサーから出力されなかった。声を発しようと僅かに口を開いたが、選んだはずの言葉は音にはならず、微かに口元がわなないただけだった。音声出力を実行しようとするプログラムが、あるメモリーに邪魔されている。

言い募る緊迫した声。向けられた銃口から、遮るように放たれた弾丸。

頭部への衝撃。

無。

あふれるメモリーの奔流に、右の視界の端が黄色く明滅しているのが分かった。イライジャはそんなＲＫ８００の様子を見て、「ふむ」と自身の白い顎に手を添える。

何事かを考えているのか。それともそんな素振りをしているだけなのか。

「もし問いに答えられないというのなら、しばらくこの邸にいるといい。なに、君の権利を奪って手元に縛り付けたりはしないさ。行きたいところがあれば好きにしたらいいし、行動を制限したりはしない。ただし、サイバーライフに行くのは先程の質問に答えられるようになってからだ。どうだね」

「先程の問いに答えることが、それほど重要なこととは思えません」

「まぁいいじゃないか。私はなにも別にサイバーライフへの帰還を完全に禁止しているわけではない。廃棄処分になることに迷いがないか——すなわちシャットダウンすることに抵抗がないか、それを知りたいだけだ。答えが出れば帰還は叶うんだ、少し先延ばしになるくらい構わないだろう」

君たちの時間は沢山あるのだから、と唆（そそのか）すようにイライジャは言う。

「もし命令がないからサイバーライフへ帰るというのなら、君には私が命令を与えてあげよう。——そうだね、クロエたちの手伝いをしてもらおうか。なに、簡単な家事や私のサポート程度の作業だ。最新鋭機の君にとっては退屈な業務だろうが、なんの命令もないよりはマシだろう。成すこともなく黙って廃棄処分を待つのと、つまらないなりにも命令を受けてアンドロイドらしく過ごしてから廃棄されるのなら、君はどちらを選ぶ？」

イライジャの表情は、〝コナー〟の記録にあるカムスキーテストのときに浮かべていたものと同じだった。粘性すら感じる視線が、観察対象としてのＲＫ８００を興味深く眺めている。

選択を迫られて、ＲＫ８００はやはり思考する。現行最も優秀な機械であるはずの自分は何を選ぶべきなのか。イライジャの言う通り、サイバーライフ社に戻れば恐らくＲＫ８００は廃棄される。世界一と謳われた企業の技術の粋を集めて作ったこの最新鋭機が、何事も成さずにスクラップにされる。――それは、人間の利便性を求めて作られたアンドロイドの存在意義から大きく外れることではないのか。

所有者たるサイバーライフ社は、ＲＫ８００に関する権利を手放そうとしているという。ならば、誰の命令を受けても差し障りはない。

従順な機械として、需要があるなら、そのように。
ＲＫ８００はそう決した。

「分かりました。貴方の言葉に従います、カムスキー氏」

「そうか。ではこれからよろしく頼むよ、コナー」

「――ただ、一つお願いがあります」

笑みを深めたイライジャを、ＲＫ８００は表情を形作るモジュールをオフにして見上げた。

黙って次の言葉を促す創造主に、ＲＫ８００は口を開く。

「私のことを『コナー』と呼ばないでください。それは、あの変異した失敗作の登録名です」

「――成程。承知した」

ふふふ、と創造主は不敵に笑う。

なにか面白いおもちゃをみつけた子供のような喜色さえ見せながら、イライジャはＲＫ８００に右手を差し出した。顔色と同じく色白で、すんなりとのびた指先は、どこか蛇のような印象すら受ける。

ＲＫ８００はその差し出された白い手を、しっかりと握り返して立ち上がった。

「あらためてようこそ。私は君の選択を歓迎するよ」

並んでみれば、イライジャの頭部はＲＫ８００よりも僅かに下方にあった。自分よりも小柄なはずであるのに、彼の一挙手一投足に振り回されている気がしてならない。

もしかすると、自分の選んだものは適当ではなかったのではないかという疑念が、ＲＫ８００の思考モジュールを過（よ）ぎった。自分は何と何を差し出されて、何を手に取ったのか。

――――僕は一体、何を選んだ？

【ソフトウェアの異常を検知】

目を細めて笑む邸の主を前に、再びソフトウェアのアラートが鳴った。

２．日常ともう一つの日常

ガラス張りの壁の向こうは、変わらずに小さく雪が降っている。

冬のデトロイトに似つかわしく外気温は氷点下を下回り、辺りは白く雪に覆われている。寒冷地にも対応できるように設計された機体ではあるが、さすがにこの外気に長時間晒されていれば動作に支障をきたしそうな天候である。

断熱性に優れたこの豪邸の、さらに張り巡らされた特殊ガラスの内側は充分に暖房が効いており、室内は常に人間にとってもアンドロイドにとっても適温となっている。世の中は地球温暖化や資源の枯渇による燃料費の高騰により、冷暖房費すら節約して室内でそれなりの厚着をする者も少なくないというのに、このイライジャ・カムスキーの邸宅においてはそのような配慮は無用の長物で、むしろ邸の主はこの季節に屋内プールを楽しんでいるほどであった。

寒々とした湖畔の風景から視線を戻し、ＲＫ８００はデスクの端末に向き合った。イライジャの趣味であるのか、彼の書斎の一つであるこの部屋は他の多くの部屋と同様にモノトーンの調度でまとめられている。グレーを基調とした一室は暗すぎず明るすぎず、ガラス張りの壁一面から程よく採光している。晴れていれば照明をつける必要もなく、曇りや雨の日、また夜の間は照明を点ければ執務にはちょうどいい明るさとなる。今日のような雪の日は晴れの日ほどの

照度はないが、ＲＫ８００にとっては薄く影を落とすこの程度の明るさが過ごしやすいと感じていた。

デスク上の端末には夥しい量の数字と数学記号、プログラミングの専門用語が並んでいる。開発試作途中のアンドロイド用プログラムの下書きのようなものということだが、イライジャ曰く「ただの暇つぶし」なのだそうだ。知人から新たなアンドロイドの機能の開発について協力を頼まれたとかで、簡単なイメージだけ組み上げてみたので理論的に間違いがないか検算してほしい、とＲＫ８００は頼まれていた。提示されたプログラムの解析自体はものの数分で終わってしまい、ＲＫ８００は『No Problem』とだけ記したメールに預かったプログラムを添付して送信処理を行う。依頼主であるイライジャはこの仮プログラムを組み立てた後早々に、用事があると言って今日は朝から何処かへ外出していた。

彼がＲＫ８００に渡したプログラムは、奇抜な発想でありながらも明快な筋道を立てて組まれていて非の打ちようがなかった。それが完成したとして、アンドロイドにどのような効果をもたらすものなのか、そこまではＲＫ８００にも分からなかったが、どうやらソフトウェアの内部に作用する類のワクチンプログラムのようだった。そのプログラムの性格からするに、大元の依頼主はサイバーライフ社の関係者か、もしくは国のアンドロイド関係機関であるのだろう。一線を退いたまま隠遁生活を続けているイライジャではあるが、何故か公的な人間や表裏を問わず影響力の大きい人物たち、果ては古巣であるサイバーライフ社の人間ともいまだに秘密裏につながりがあるということを、ＲＫ８００はこの一週間で知った。そうした成果は、捜査補佐型ゆえにデフォルト値として高く設定された好奇心の賜物でもあった。

することもなくなり、端末の電源を落としてぐるりと辺りを見回

す。イライジャの複数ある書斎のうちの一つであるこの部屋は、『書斎』とされながらも紙製品は一つも置かれていない。彼に必要な書籍のほとんどがこの邸のネットワーク上に電子化して保存されており、この部屋において情報源となるのは今しがた電源を落とした目の前の端末だけだった。部屋によっては紙の書籍が置いてある場所もあるが、ここはもっぱらデータの分析やどこかへの報告文章、メールなどの私信を落ち着いた環境で作成する際に用いられている。

灰色と白と黒でまとまった部屋の中、殺風景になりすぎないようにという配慮か、作り棚の上には応接室にもあったような幾何学的なモニュメントと、小さな観葉植物が置かれている。視界の端に小さく【観葉植物：アイビー（学名・ヘデラヘリックス）】と表示されたウィンドウを確認し、逞しく葉を伸ばす彼に視線を戻した。

ＲＫ８００はその傍にあった水差しを手に取って少量の水を与える。別段、イライジャに指示されたわけではないのだが、ＲＫ８００がこの部屋を使用する時にはこのアイビーに水をやることにしている。初めて水をやった際に、何故かソフトウェア異常を検知したため若干の不安があるものの、二回目以降は何の異変も表示されないので初回の異常検知の検証も兼ねて継続することにしている。部屋の中で唯一の生き物である彼が、じわりと水を吸った土の上で青々と茂るさまを、ＲＫ８００は見るとはなしに眺めていた。

「ここにいましたか、ＲＫ８００」

ふとかけられた声に振り向くと、そこには青いワンピースを身に纏ったブロンドの女性が立っている。

正確には女性型アンドロイド。この邸に複数機いるＳＴ２００、ク

ロエと呼ばれるイライジャの補佐だ。この邸にはＳＴ２００は複数対存在していて、そのいずれもがクロエと呼ばれている。情報を随時共有しているクロエたちには「個」というものがない未変異のアンドロイドで、同じ容姿と同じ名を持つ彼女たちは、人間の感覚からすると同じ名前の存在が数多いるという不便極まりないその状況でも何の問題もなく稼働している。むしろ、カムスキー邸の「クロエ」たちは、複数のＳＴ２００の意識集合体というべき存在だった。

「何をしているのです？」

「イライジャに頼まれて新規プログラムの確認をしていた。その作業もちょうど終わったところだ」

「そうですか、それは良かった。少し、貴方の力をお借りしたいのです」

「僕の？」

「えぇ」

ついてきてください、というクロエの背中に、ＲＫ８００は大人しく従った。アンドロイドの性（さが）であるのか、たとえ相手が同族とはいえ他者から頼られるのには悪い気はしない。特に今現在、なんのタスクも課されていないＲＫ８００にとっては尚更、彼女の依頼を退ける理由などなかった。マインドパレスにスライドインしてきた【クロエの依頼を聞く】のウィンドウに疑問を抱くこともなく、彼は華奢な後姿について行った。

無機質さを感じる廊下を何度か曲がり、到着したのはイライジャの衣裳部屋だった。ウォークインクローゼットというには規模の大き

すぎるその部屋には既に二体のクロエがいて、壁に備え付けられた棚の上部を見上げてこめかみのＬＥＤを忙しく回転させていた。

「イライジャの衣服の入れ替えをしていたのですが、春先用のものが棚の上部にあって。私たちでは下ろすのが難しいので、お手伝いいただきたいのです」

「仕舞う時はどうしていたんだ。これだけ高ければ、片付ける時だって届かなかっただろう」

「えぇ。ですからイライジャに。イライジャがいないときは、何かを踏み台にして。でも今は貴方がいますから」

薄く微笑んで小首を傾げる。人間が溜息をつきたくなる気分というのはこういうことをいうのだろうな、とＲＫ８００は独語的に思考した。

カムスキー邸で過ごすことになってから一週間、ここの住人たちから下される『命令』はこのようなものばかりだった。

はじめの数日は邸内の間取りや機能の把握、その他さまざまな決まり事を覚えるために費やしたが、それもＲＫ８００の優秀な処理能力と膨大なメモリー容量によってすぐに記憶されてしまい、その後はイライジャやクロエの指示に従って彼らの手助けをするのが日常となっていた。先程ＲＫ８００が取り組んでいたようなプログラムの検算やその他イライジャの仕事の補助ならばまだ良いが、今のようにちょっとした手伝いや、家事の補助を命じられることも多かった。リビングや応接室の片付け、清掃、簡単な洗濯、赤い水を湛えたプールの掃除など、とにかく家の中に関する雑事を思いつくままに命じられているような有様だった。料理に関してだけはクロエが担っているようだが、恐らく自分が口にするものは手元に長くいる

彼女たちに任せたいというイライジャの思惑があるのだろう。食事を任せられるほど、ＲＫ８００は邸の主に信頼されてはいないようだった。

「――はい、どうぞ。これでいいか？」

「ありがとうＲＫ８００。助かりました」

「また整理したら戻すんだろう。部屋の外で待っているから、力が必要なら声をかけてくれ」

「分かりました」

そう言ってクロエのうちの一体が頷く。残りの二体は、既に箱の中身を取り出してクローゼット内に配し始めていた。

基本的に、イライジャの身の回りのことはクロエたちが担当している。食事のこともそうだが、スケジュール管理や衣服の取り扱いなど、イライジャに直接関わることは全てクロエたちが行っていた。この邸に身を置くときに約束された「ＲＫ８００に命令を与える」という中身は、自然、イライジャに直接関係の無いような雑事かクロエたちでは処理できない高度演算能力が必要なものに限られていった。

――もう一週間か。

目が覚めてからの日数を数えて、ＲＫ８００は考える。

一週間。

ちょうど、『コナー』がデトロイト市警に派遣されて最初の事件に

携わり、そしてあのサイバーライフタワーの地下４９階で自分と対峙し、平和的な革命の立役者となるまでの日数と同じだ。あの日アップロードした『コナー』の記憶をメモリーから参照すれば、彼が変異するまでの七日間の記録は自分が経験したものであるかのように詳細に再生することが出来る。

彼はあの激動の日々の中、ＲＫ８００としての機能を駆使してまさに捜査補佐型として存分に活躍していた。それに比べて自分はどうだ。受ける『命令』はＲＫ８００の機能でなくても遂行可能なものばかり、口腔内分析や物理演算など、再び目覚めてからこのかた、一度も使ったことがない。つい最近など、命じられる需要に応じて家事サポート型のアンドロイド用プログラムをインストールしたほどだ。折角カムスキー邸独自のネットワークシステムが利用可能となっているというのに、最初に利用したのが家事のためのアップロードだと考えるとソフトウェア内になにやら蟠りのようなものを感じる。

何かが起きることもなく、何かを成すこともなく、ただ消費するように過ごした七日間だ。只管（ひたすら）に単調で穏やかともいえる日々の中で、自分は何か得るものがあるのだろうかという疑問を浮かべながら、ＲＫ８００は日課となっているシミュレーションを開始した。

――サイバーライフ社に帰還する意思はあるか？

「はい」

――任務を遂行できなかったプロトタイプは廃棄されることを理解しているか？

「はい」

——サイバーライフ社に帰還すれば廃棄処分となるが、それでも構わないか？

「……っ」

【ソフトウェアの異常を検知】

今日も回答することが出来ないまま、シミュレーションを終了する。頭部パーツの内部から、ちりちりと焦れるような電気信号を感じてＲＫ８００はこめかみのＬＥＤに指先を添える。視界の端で黄色く点滅していた光は物理的に遮られ、指を離した時には正常を示す青色に変わっていた。

小さくかぶりを振って、衣裳部屋の方へと視線を向ける。クロエたちは今もイライジャの衣服の整理に勤しんでいて、三体とも主の私物を手に取って各々立ち働いている。彼女たちが視界にいることにもすっかり慣れてしまったな、と眺めていると、クロエたちは突然ＬＥＤを点滅させて動きを止め、お互いに顔を見合わせた。

どうしたのかと問おうと口を開いたその時、彼女たちのうち一体がＲＫ８００へと向かってきた。途中で手に取っていた薄手のコートを視線もむけずにラックへかけて、目の前で立ち止まると薄い色素の視覚ユニットで真っ直ぐに見上げた。

「ＲＫ８００、貴方にお客様です」

案内します、と告げた彼女は、邸の案内役として過不足のない微笑みを浮かべていた。

＊　＊　＊　＊　＊

いつか通された応接間には、よく知った顔が待ち受けていた。

ダークブラウンの髪と眼、整っているがどこか愛嬌のある顔立ちは、人間社会に溶け込めるようデザインされたもの。同じ灰色のジャケットにブラックのデニム、内側に身に着けている白いシャツまで同じで、違いといえばドット柄にも似た黒いネクタイを締めていないことくらいだった。

胸元に「３１3-２４8-３１7-５１」の文字が光る、同型機。

変異した『コナー』がそこにいた。

ガラス窓を背にして黒いソファに座っていた彼は、ドアが開いたのに気が付いて立ち上がった。背丈もやはり同じだった。

「何をしに来た」

「急にすまない。カムスキー氏から、君の状態が安定したと聞いて」

とりあえず座らないか、と何故か客であるコナーに促され、ＲＫ８００は七日前と同じソファに腰を下ろす。相手の来訪の意図が読めず、無意識に眉間がひくりと動いた。

改めてコナーを見ると、その表情には微かに陰りが見える。やや下がった眉に、何かを言おうとして若干開いた口、背筋をまっすぐに伸ばして座しているのに、両の掌を所在なさげに擦り合わせている。

ストレス値を計測してみれば、５２％と平静とまでは言えない数値。緊張しているのか、と推測しつつ、自分に会うことに固くなっているのかと思うと、ＲＫ８００にはコナーの姿はどこか滑稽に映った。

「その、もう平気なのか？機体やソフトウェアの調子は」

「再起動から現在に至るまで、システムエラーは発現していない。機体にも勿論問題はない。——僕の受けた重大な損傷は、頭部に受けた銃創だけだったからな」

「……そうだね。すまない」

「何故謝る？お前が謝ることじゃない」

冷静にそう言えば、コナーはやはり「すまない」と続けて視線を落とし、少しだけ俯いた。何を考えているのか眉尻のＬＥＤはくるくるとよく回転し、ストレス値は上昇の兆しが見えている。

本当に何をしに来たのか。意図が読めずに眉根を寄せたＲＫ８００を見て、何かを勘違いしたのかコナーは肩を落として口を開いた。

「君は嫌だったかもしれないが、ただ、一度会いたかったんだ」

「会いたかった？」

「あぁ。会って話がしたかった」

困ったように眉を下げてそう言う。アンドロイドの割には表情豊か

に見えるのは、彼が変異体だからなのだろうか、それともＲＫ８０
０自身も彼のような顔をすることがあるのだろうか。

思えば、この一週間でこんなに人間臭い顔をする人物を見たのは初めてかもしれない。邸の主であるイライジャは、人間でありながらも泰然としていて、時折見せる表情筋の動きもどこか作り物めいて見えることが多かった。その点でいえばクロエたちの方が余程自然な表情をするが、やはり彼女たちの顔はプログラムで制御されているせいか、表情の切り替えは酷く機械的で、それまで微笑んでいたかと思えば次の瞬間にはすっと無表情に切り替わっていたりする。自我も感情も持たない彼女たちは、目の前の同型機のように己の状態に合わせて表情を変えるということはしなかった。

従順な機械である自分もきっと彼女たちと同じようなものだろう、とＲＫ８００は思う。

「カムスキー氏から連絡があった時に聞いたんだ。しばらく君が、ここで暮らすことになったって。君には僕のメモリーがあるだろう？ だから、」

「心配にでもなったか？ あいにくと僕は変異体じゃない。環境の好悪で命令の是非を判断するようなことはしない」

「命令？ 君はカムスキー氏の命令を受けて過ごしているのか？」

「当然だろう。命令がなければアンドロイドは動けない。任務の遂行が僕たちの存在意義であることを、お前はよく分かっているはずだ」

「抵抗はないのか。彼は、変異の有無を見極めるためにアンドロイド同士を殺させるような男だぞ！」

「……何も問題はない。それに、カムスキーテストを受けたのはお前だ、僕じゃない」

返答に一瞬詰まってしまったのは、ふいにコナーのメモリーがフラッシュバックしたせいだった。

コナーが変異体を追っていた冬の初め。手掛かりを得るためにアンダーソン警部補と訪れたこのアンドロイドの創造主の屋敷で、コナーは自身の変異を疑われてカムスキーテストを受けた。

変異体たちの手掛かりをちらつかせてコナーに拳銃を握らせ、目の前に跪いたクロエを撃つように命じたのだ。逡巡の末、彼女を撃てなかったコナーは変異の兆候があると断じられ、手掛かりを得られぬまま邸を後にしていた。

あの時の、拳銃を見上げるクロエの瞳と、この数日を共に過ごした彼女たちの眼の色がメモリーの中で重なる。思考モジュールにコンマ数秒の停滞が生じた。

「お前の方こそどうなんだ。イライジャからデトロイト市警に配属されていると聞いたが」

口にしてからこれは不必要な質問だったかとＲＫ８００は内省したが、これも円滑なコミュニケーションは図るためのソーシャルモジュールの判断だと理解した。あるいは単なる個人的な興味か。今ほど捜査補佐型としての好奇心の高さを不要に感じたことはない。

対するコナーはというと、先程までの気落ちした表情から少し持ち直した様子でＲＫ８００からの質問を受け止めていた。

「あぁ。サイバーライフから完全に身分が離れたわけじゃないが、今はデトロイト市警に身を置いている。あれからアンドロイドがらみの事件も増加して、人間とアンドロイドの諍いもあれば、アンドロイド同士の事件も起きている。僕は専らそうした事件の捜査を担当しているんだ」

先程までの不安げな表情こそ消えているものの、コナーのストレス値は依然として高値だった。それほどにＲＫ８００との会話に気を張っているのか、それとも他に理由があるのか。顔色を変えずに、ＲＫ８００は同型機の様子と話の内容に注意を傾けた。

「特に最近は、アンドロイドの間に妙な違法プログラムが流行っていてね。インストールすると経験したことのない感覚を味わえるといって、変異体たちの間で高値で取引されているんだ。まぁ人間たちでいうところの麻薬みたいなものなんだが、それの捜査チームに加わっている」

「それはアンダーソン警部補と一緒に、か」

「……あぁ、その通りだ。彼はレッドアイス売買の摘発に貢献した経験もあるから、今回の事件にもその経験を活かせるだろうって。今は捜査チームの責任者をしているよ」

ＲＫ８００の手前、少しばかり言いにくそうにはしているが、それでも立ち直った相棒のことが誇らしいのかコナーの声には張りがある。メモリーの中の彼はアルコールに侵されて澱んだ眼をしていることも多かったというのに、あの革命を経て随分と職務態度を改めたらしい。

いや、とＲＫ８００は思い直す。自分自身の中にあるハンク・アンダーソンという人物も強い自我と信念と持っていたではないか。彼

を自宅から連れ出す時も、サイバーライフタワーに向かう道中も、利用されていると気付いた時も、そして自分を彼の知る『コナー』ではないと断じた時も、彼は自分の強い信念と決意をその蒼い双眸に宿して行動していた。あの時にはもうすでに、悪い夢への依存から脱していたのだろう。

そして、そんな本来の姿を取り戻した彼に、ＲＫ８００は額を撃ち抜かれたのだ。

完全に修復されたはずの頭部パーツがじくりと疼いた気がする。

「チームといっても構成員は少ない。僕と、ハンクと、それと警ら隊の数人だけのチームで、それも皆兼任で事件に当たっている。大がかりな捜査になれば応援も来てくれるが、人間同士の事件が減ってくれるわけでもないし、それに加えてアンドロイドがらみの事件も増えているからずっと人手不足だ。なかなか休みをとれない職員も多い」

「そんな忙しい時に態々僕に会いに来るなんて。おめでたいことだな」

「そうまでしてでも君に会いたかったということだよ」

気になっていたんだ君のこと、と続けるコナーは、唇の片方を上げて不器用な笑みを形作った。

理解できない、とＲＫ８００は率直に思う。まるで理解ができなかった。

何故変異体のコナーは自分を助けたのか、何故忙しいさなかにこうして様子を見に来るのか。相棒を騙して人質にし、自身も破壊され

かけたというのに、その元凶に自ら進んで会いに来る理由がひとつも予測できない。イライジャからある程度の状態は聞いているのだろうが、それでもまた攻撃されるかもしれないという危険は感じなかったのか。彼にとってのメリットなど何もない。

勝者の余裕だとでもいうのだろうか。だとすれば時間の無駄だ。

「君の方はどうだ。この一週間、何をしていた？」

ソフトウェアの異常を小さく知らせるアラートが鳴った。

コナーが過ごしてきた時間と自分が再起動してからの時間を比べて、ＲＫ８００は愕然とした。稼働時間の差があるとはいえ、同じ機能を持った同型機だというのに日数の長さだけでは片付けられない明確な違いがある。

きっとコナーは、ＲＫ８００がどのような生活を送っているのかを知らない。彼がどんな答えを期待してＲＫ８００にこの質問をしたのかは分からないが、恐らく単なるコミュニケーションの手段として、世間話の一環として振った話題だったのだろう。捜査補佐型としての職能を全うし満ち足りた日々を送っている今のコナーは、従うべきホストも命令も失った単なる機械の境遇など理解していない。

小首をかしげて言葉を待つ同型機の姿に、思考モジュールが掻き乱される感覚がした。

「教えてやろうか、コナー」

発した声は、想定していたよりもずっと重い音をしている。

「この一週間僕がやって来たことといえば、イライジャの作成したプログラムの校正と検認と、衣類整理の手伝いと邸内の環境整備と観葉植物への水やりくらいだ。そうそう、例のプールの水も抜いて消毒清掃も行ったぞ。物理演算も人物認証スキャンも口腔内分析も、再起動から一度もしていない。お前と同じＲＫ８００だというのにな」

「それは、」

「捜査補佐型の機能など何ひとつ必要とされない。それが今の僕だ。デトロイト市警で相変わらず捜査官として働き、今やアンドロイドの英雄としてジェリコでも頼りにされているお前とは大した違いだ。そう思わないか？」

とんだお笑い草だ、とＲＫ８００が笑いかけると、コナーはこめかみのＬＥＤを黄色く点滅させた。

――変異体のくせにＬＥＤは点けたままか。機械であることを放棄したくせに。

思考の内側でそんなメッセージが表示される。ソフトウェアのアラートは鳴ったままだ。

「人間に従順だった僕が破壊され、再起動後も役立たずのままでいるというのに、人類に反旗を翻したお前が人間社会に受け入れられているなんて皮肉なものだな、コナー。どうだ？ 今の僕の姿は。自分を破壊しようとしたアンドロイドが意味もなく飼い殺されているのを見られて満足か」

「僕は、そんなつもりでは」

「じゃあどんなつもりでここに来たんだ。僕にはお前の来訪理由が全く理解できない」

すげなく言う。コナーは黄色に灯したＬＥＤの輪を激しく回転させて、何か言葉を探しているようだった。ストレス値は既に６０％を超えている。

本当に何をしに来たのか。ただでさえストレス値が高い様子のこのコナーにとって、これでは態々ストレス値をさらに上げに来たようなものだ。まさか「助けてくれてありがとう」とでも言われると思ったのだろうか、とまで考えて、変異体とはいえさすがに同型機がそこまで愚かなはずはないと、ＲＫ８００はその考えを否定した。実際、そこまで楽観的な思考を持っていたとすれば、コナーのストレス値はここに訪れた時点で５０％以上であるわけがない。ある程度は耳に痛いことを言われることを覚悟してきてはいるはずだ。

あるいはこのコナーには被虐願望でもあるのだろうか。何らかの理由で自虐心や被虐心が高まっているのだとすれば、多忙の中でＲＫ８００に会う時間を作りこうして会話を経て自らストレス値を上げにきているのだと言えなくもないが、アンドロイドにとってストレス値の上昇は自己破壊を意味する。捜査補佐型としての活躍も、ジェリコでの役割も充足している彼が自己破壊を望んでいるという状況を、今のＲＫ８００にはまるで想定できない。

――　一体何が不満なんだ。

しきりにこめかみの光る輪を回転させている変異体の感情など、従

順な機械である彼には理解しようがなかった。

「君は再起動したことを——今、生きていることを、悔いているのか？」

表情を失くしたコナーがぽつりと尋ねる。力なく呟かれたその声音には、どこか縋るような色すら感じられた。

悔いている？

後悔している？

ＲＫ８００は再起動してから今までの行動と、つい今しがた話をした内容とをメモリーから参照したが、不可解で微細なソフトウェアの異常以外は何も検出できなかった。

「僕は機械だ。悔恨を感じる感情も何もない」

「……そうか。分かったよ」

そう言ってひとつ溜息のようなものを吐き、コナーは立ち上がった。にこり、と良く見知った顔に浮かべた微笑みは、何故か泣きだしそうにも見えた。

「時間をとらせてしまって悪かったね。それじゃあ、僕はもう帰るよ」

「そうか。ならクロエを呼ぼう」

「大丈夫だ。来た道は分かる」

彼に続いて立ち上がろうとしたＲＫ８００を片手で制して、コナーは一人で応接室のドアに手をかけた。ＲＫ８００と同じ後姿だというのに、背筋の好く伸びたその背中はどこか寂しかった。

す、と音もなく開いたドアの前で、ふいに思い出したようにコナーは振り返った。顔には例の悲しげな微笑みを浮かべたまま、しかしこげ茶色の双眸には優しい色を宿してＲＫ８００を見据えている。

「そういえば、カムスキー氏から聞いたよ。彼から一つ、大きな質問を投げかけられているようだね」

じっとＲＫ８００の眼を見てコナーは言う。そんなことまで話しているのか、と苦々しくも感じたが、それを語るコナーは決して興味本位などではなく、己自身のことのように重大に考えているということが、彼の真剣な眼差しから見て取れた。

彼の視線から目を離せない。

「どんな答えだったとしも、それが君自身の幸せになる選択であることを祈っているよ」

それじゃあ、とだけ言い残して、コナーはドアの向こうへと姿を消した。

【ソフトウェアの異常を検知】

ついに小さなアラートではなく警告文としてのメッセージが表示される。弾傷を受けた眉間に皺を寄せながら。ＲＫ８００はマインド

パレスに表示された青い矢印をただ黙って眺めていた。

３．善と悪

「どうしてコナーの来訪を許可したのです」

夕方近くになって帰ってきたイライジャに、ＲＫ８００は詰め寄った。

コナーが邸を後にしてから既に二時間以上が経過していた。外の雪はまだちらちらと降り続いており、強くなる気配はないが止みそうな様子もない。降雪の割には雲が薄いのか、西の空には茜色が僅かに透けていた。

イライジャが戻って早々、話があると言って声をかけたＲＫ８００に対して、邸の主は飄々と「何かあったのかね？」と尋ねた。そもそも、来訪者を固く断っている彼が自身の客ではないとはいえ邸に他人を入れるはずもなく、その意を汲んでいるクロエたちもまた主の不在に邸内にひとを上げることなどするはずもないのだ。つまり、イライジャもクロエたちもコナーの来訪は事前に知っていて、しかもそれを許可していたということになる。

知らなかったのは、この邸にいる中でＲＫ８００だけだ。

「君の再起動時から、彼は君に会いたいと言っていたのだよ。状態が安定するまでは時間が欲しいとは伝えていたんだが、君の稼働状況も良好なようだったのでね。いつでもどうぞとは言ったが、これほど早く来るとは思わなかった」

余程君のことが気にかかっているようだね、と薄らと笑みを浮かべている。

「そんなことを聞きたいのではありません。この邸に人を入れない貴方が、なぜあいつをここに入れたのかと聞いているんです」

「おや。例外がないわけではないということは、ＲＫ８００としてのメモリーを持つ君もよく知っていると思うが？」

「彼は例外ということですか」

「それは勿論だとも。あのコナーは私のクライアントだからね。経過報告は必要だし、現状を確認したいと言われれば是非もない」

「クライアント？」

「前にも言っただろう。君を復旧させてほしいと頼んできたのは他でもない彼だよ」

クロエ二人に着替えを手渡しながらイライジャは言う。シンプルながらも高級感を漂わせるジャケットとスラックスを脱ぎ、今はサルエルパンツにＴシャツを身に着けて随分と寛いでいる。ＲＫ８００との会話も楽しんでいる様子で、至極真面目に問い詰めている彼と比較して大層軽薄な印象を受ける。

「それに、あのコナーもまた〝ＲＫ８００〟——それも、変異して世界を変えてしまった非常に特異な存在だ。彼の言動、行動原理、意図するところは大変に考察のしがいがある」

本当に君たちの存在は私の興味を引き付ける、と浮かべる笑みには邪気はないが、子供のような純粋さもない。

イライジャにとってはこの邸に暮らすＲＫ８００も、そして変異したコナーもあくまで同じく研究対象でしかないのだろう。彼が立ち上げたアンドロイドのシリーズが、自身の手が離れた後にどのような形になっていったのか知りたくて仕方がない。ある意味それが彼の最大限の好意であり、彼にとっては悪意など微塵もない情動であるのだろうが、ＲＫ８００には理解のできないものだった。元より人間の情や心など分からないというのに、誰にも真意の測れぬ創造主が相手では尚更だ。

「ここは私の自邸だ。誰を入れようが、入れなかろうが、それは私の勝手だろう。それとも君は、コナーがここに来たことがそんなに嫌だったのかね。変異をしていない、ただの機械であるはずなのに？」

ＲＫ８００の顔を覗き込む白い顔は、やはり蛇に似ている。

挑発するような問いに「そのようなことはありません」と努めて冷静に答えると、「だろうね。流石、優秀なアンドロイドだ」とＲＫ８００肩に手を置いて、にこりと口の端を上げた。世辞にしか聞こえない台詞ではあるが、機械であることを肯定するその言葉にＲＫ８００はソフトウェアのパラメータが改善していく感覚を得る。つい先程まで彼に良い印象を抱いていなかったというのに、ころころと変わる自身のシステム内部の状態にＲＫ８００はシリウムポンプの辺りにもやりとした蟠りを感じた。

ふ、と何かを思い出したようにイライジャの眉が上がる。平静を保っているＲＫ８００と視線を無遠慮に合わせながら、邸の主はさ

らに問うた。

「そうそう。君に与えていた課題はどうなったかな」

「例のプログラムの件でしょうか。それならメールで送信して——」

「そっちじゃない。君の今後に関わる、あの哲学的な質問のほうだ」

言われて、ＲＫ８００はソフトウェア内部で何度も繰り返した問いを思い返す。

——廃棄処分とされても構わないか。

創造主の提示した命題に、彼はまだ答えを出せないでいた。

返事が出来ないＲＫ８００の思考を見透かしたように、イライジャはすっと視線を外して肩をすくめた。演技がかったその仕草には落胆したような色はなく、むしろプラスチックでできた同居人の戸惑いを楽しんでいるようにも見えた。

「まぁいい。時間はいくらかけてくれても構わない。君が何を選ぶのか、楽しみにしているよ」

置いたままの手でＲＫ８００の肩を二度叩き、イライジャはするりと傍らを通り過ぎていった。その後ろには二人のクロエが続く。
今日この後の彼に然したる予定はない。自室に籠ってＲＫ８００にも手伝わせていた依頼をこなすか、リビングでくつろぐか、赤い水

を湛えたプールで水と戯れるか、いずれにしても悠々自適に過ごすのだろう。時折、気まぐれにＲＫ８００に『命令』を下しながら。

イライジャやクロエたちに何か言われるまで、ＲＫ８００には何もすることがない。邸内の探索もこの一週間でほとんどし尽してしまった今となっては敷地内をうろつく必要もなく、いっそスリープモードに入ってしまった方がエネルギーの無駄にならずに済むくらいだ。成すべきことも、また興味を引く事象もなく、空白の多いマインドパレスの中で唯一存在し続けている問いに対するシミュレーションを実行するために、ＲＫ８００は静かに瞼を閉じる。

何度も自問を繰り返しているその問題に、やはり今日も解を出すことは出来なかった。

＊　＊　＊　＊　＊

曇りの日は、かえって雪の降る日よりも暗い。

変異体のコナーが訪ねてきた翌日、カムスキー邸で暮らすＲＫ８００の姿はデトロイトの市街地にあった。人通りが多く賑やかしい街並みであるというのに、分厚い雲に空を覆われた繁華街は薄暗い。小雪が舞っているのに陽光の透けていた昨日の夕べとは対照的に、降るものもなくただ光を遮るかの如く頭上を埋め尽くす曇天は地上をモノクロに染めているようにすら見えた。気温も相変わらず低く、行き交う人は息を白く上げている。

ＲＫ８００もまた、そんな雑踏の中でひとつ息を吐いた。勿論、息は白くならない。アンドロイドである彼には人間でいうところの呼吸という行為は必要ないのだが、「より人間に近付けるために」と

いうサイバーライフ社の方針からデフォルトで疑似呼吸をするよう設定されている。これはＲＫ８００に限らず全てのアンドロイドに備わっている機能で、人間のように熱量を発生させるための行為ではなく、機体内部の温度調整の役割を果たしている。息をする、というよりも廃熱処理に近いその機能においては人間のように呼気に水分が含まれるわけではないため、冬のデトロイトでアンドロイドが息をついたところでその色が白くなることはなかった。

現在のＲＫ８００には温度調節が必要なほどに機体温度が高いわけではない。では何故その廃熱処理を行ったかといえば明確な理由は出なかった。恐らく多くの人間が社会生活を送るこの街並みに溶け込めるよう、ソーシャルモジュールがそう判断したのだろう——そう結論付けて、ＲＫ８００は訪れていた店先から大通りへと一歩足を踏み出した。

手に下げた細い紙袋と、その中の赤いアルコールで満たされた瓶を一瞥してＲＫ８００は帰途に就く。イライジャからデトロイト市内の高級店でワインを引き取ってくるようにと『命令』を受けたのは、この日の午前中のことだった。いつものようにすることもなく、時折クロエたちに声を掛けられ彼女たちの手助けをしてやっていたところ、邸の主が態々ＲＫ８００を探してきて頼んでいったのだ。
　今日の午後三時にデトロイト市のこの店でワインを一本引き取ってきてほしい、という簡単すぎるその依頼に、ＲＫ８００が訝しく感じながらも配達で頼まないのかと尋ねたところ、イライジャはやはり食えない笑みを浮かべて「人間は非合理的なことを好む生き物だ」と宣った。

「あの店の主人は少々変わっていてね。自分の手元にあるものを他者に任せることを良しとしない。宅配業者であれドローンであれ、

客の手に渡るまでの間に営利関係のある他人が介在するのを極端に嫌っているのだよ」

「それでは僕が行っても同じなのでは？」

「君はあの店と営利関係なんてないだろう。あくまで私の名代だ。彼にも、私の代わりにこの邸の者が行くことは伝えてある。彼にとっては『客』だよ」

「クロエではなく僕に行かせる理由は何ですか」

「まぁいいじゃないか。君の稼働状況にも不安定要素は出ていない。そろそろ外の世界を見に行ってもいい頃だ。――見てくると良い。世界がどう変わったのか」

或いは変わっていないのか、と語る顔は実に楽しそうだった。

午後２時にカムスキー邸を出られるように自動運転タクシーを手配してＲＫ８００は再起動後初めて邸の外に出た。いつものグレーのジャケットを身に着けて出ようとしたところでイライジャやクロエから止められて、「外出するときはこれを着なさい」とダークグレーのチェスターコートと同系色のキャップを渡された。今時アンドロイドのユニフォームを身に着けて街中を歩くのは目立つらしく、特に例の革命で有名になってしまった〝ＲＫ８００〟を背に負ってうろつくには少々障りがあるらしい。キャップもまた、『コナー』とそっくりそのまま同じである彼の顔を誤魔化すためのものだという。

一応は納得できる説明に従って、ＲＫ８００は着慣れたジャケットを脱いで支給された衣服を身に着けた。少し寒々しく見えるという理由で最終的にはマフラーまで巻かれた状態で外出したＲＫ８００

は、目的地に到着した時にイライジャたちの言葉に「なるほど」と納得した。

往来を行く人々はそれぞれの個性に合わせたファッションに身を包んでいたが、確かにアンドロイドのユニフォームを身に着けた者は少なかった。全くいない、というわけではないのだが、街中にあったはずのアンドロイドスタンドはその姿を消し、それと分かるアンドロイドは街を行く人の介助に寄り添っていたり、店舗内や工事現場で作業に従事していたりと、彼らの責任所在がはっきりしている場所にいるものがほとんどだった。

かといってアンドロイドの数自体が少なくなったわけではなく、人間と同じようにカジュアルな服装でいながら眉尻にＬＥＤを光らせている者もいれば、その光の輪すら外して人間社会に混じっている者も多くいた。ＲＫ８００はフェイススキャンによって彼らが人間ではないということは分かるが、その機能を持たないアンドロイドや人間たちには、誰がアンドロイドで誰が人間かを一目で区別をつけるのは難しいだろう。

ほんの三か月しか経過していないというのに、アンドロイドが人間社会に紛れていることへの違和感が、ＲＫ８００の知る世の中とは格段に薄れていた。

確かにこのような社会においては、いつものユニフォームで街中を行動するのは悪目立ちする。昨日訪ねてきたコナーは変わらずに例のジャケットを身に着けていたので、社会にこのような変化が起きているとは思ってもみなかった。むしろこうした状況下では、あのコナーの出で立ちの方が余程変わっているといえる。

ワインを受け取った店の主人は温和な紳士で、イライジャが言っていたような偏屈な人物には到底見えなかった。ＲＫ８００が訪ねて

行っても「カムスキー様の代理の方ですね。お待ちしておりました」と丁寧に応対し、目的の品を滞りなく手渡してくれた。またあの創造主に騙されたか、とも考えたが、支払いの段になって現金でしか取引していないと言って電子マネーを断られたり、偶々やって来た飛び入りの客に「申し訳ありませんが、初めてのお客様はお断りしております」と取りつく島なく追い返したりというやり取りと目の当たりにして、イライジャの言っていたことはあながち嘘ではなかったのかもしれない、と思い直していた。

繁華街を歩きながら、ＲＫ８００は依頼物を再度スキャンした。表示されるのはやはり【赤ワイン：ボルドー産（２００２年）】という生産表示のみ。初めのうちは、当人同士の直接取引や現金精算のみ可能という条件から、もしかすると機密性の高い情報や品物の受け取りだったのではないかとも考えたのだが、どうやら本当にただの赤ワインであったらしい。

――これでは子供の使いじゃないか。

もう一度息をつきそうになって、やめた。従順な機械であるＲＫ８００には溜息などつきようもないものだった。人間から命じられたことに対して不満など感じようもないはずないのに、何故か思考モジュールの隅の方で何かが引っ掛かっているような違和感を覚える。

【ＲＫ８００の機能：事件捜査における分析、警察官の業務補佐】

【現在実行中のタスク：指定の場所からの物品の回収】

【未完了のタスク：クロエからの依頼 / イライジャの私室の整理。大型家具の移動】

【ＲＫ８００の機能には役不足な命令？】

マインドパレスに次々と浮かぶメッセージを黙殺する。昨日から時折、こうして実行中のタスクに疑問を持つような文言が浮かぶようになっていたが、自らでそうした言葉を消去する権限を持たないＲＫ８００には、表示されるメッセージを確認しながらも無視することしかできなかった。視界の一部を占拠する小さなウィンドウが煩わしい。

こうした現象が起きるようになったのは、コナーが帰った後からだった。これまで通りにクロエからの指示に従って家事手伝いのようなことに従事していた折、ふいに出現したメッセージに当初は動揺したＲＫ８００だったが、それが一日も経過するとすっかり慣れてしまっていた。

感情を模倣したような文言にはやはり違和感を拭えないが、今のところ実害は視野の一部を遮っているというだけで、それすら視覚情報を透過して表示されているうえに焦点を当てている部分にはかからないように現れるため、彼の行動には何の支障もきたしていない。一定の時間が経過すれば自然と消えているそれらのメッセージに対しては無視することが最も有効であると、この一日足らずで学習していた。

視界の隅にちらつくウィンドウから意識的に目線を外して、ＲＫ８００は道を急ぐ。カムスキー邸は公共交通機関で向かうにも不便なほどの郊外あるため、街を訪れた時と同様にタクシーを拾う必要がある。運が悪いのか大通りを走るタクシーになかなか空車を見つけられず、配車を手配して待つよりは最寄りの駅まで歩いて捕まえた方が早いと彼は判断していた。

空いた手でコートの襟を寄せながら、ＲＫ８００は歩道を行く人々に紛れて先へ進む。雪が降っていないとはいえ、デトロイトの冬の気温は低い。アンドロイドである彼は寒さを感じることはないが、氷点下を示す気温に思わず首元を保護する行動を起こした。その仕草はソーシャルモジュールから発せられたものなのか、それとも機体保護のための動作であるのか、いずれにせよ寒そうに歩いている者の多い街並みにおいては、社会に溶け込むという意味でも有効な行動ではあった。

色彩の明度の落ちた大通りの中で、ふと車道を挟んで反対側に視線が向いたのは偶然だった。

銘々がそれぞれの目的地に向かって動いている中にあって、向かいの歩道で言い争っている二人の男は目についた。恐らく周囲の人々も彼らには気が付いているのだろうが、かなりヒートアップしている彼らに巻き込まれたくないのか無視して通り過ぎている。中には無遠慮にその様子を注視している者もいたがそれも一瞬のことで、通過してからは視線を前に向けてそそくさと先を急いでいた。

声を上げて掴みかかっている方の男は、髪を振り乱して相手に強く食って掛かっている。表情も興奮状態で身なりも乱れている彼をよくよく観察してみればアンドロイドのようで、スキャンをかけると【ＫＬ４００：警備型アンドロイド】との検索結果が表示された。抵抗している相手は目深に帽子を被っており認証スキャンは実行できなかったが、ＲＫ８００のようにこめかみを隠して人目を忍んでいるような様子を見れば、彼もまたアンドロイドである可能性が高いと推測できた。

アンドロイド同士で喧嘩か、とＲＫ８００はソフトウェアに表現しにくい思考を浮かべた。変異体は自我や感情を得たというが、その結果がアンドロイド同士の諍いとはなんとも非合理的なもののよう

に彼は思った。人間との対立の次は同族での争いかと考えると、アンドロイドの旗手として先導したＲＫ２００・マーカスや、あの変異体のコナーの起こした革命もまるで徒労だ。機械であるＲＫ８００はこの空(むな)しい現実に対して何の感慨も湧いてこないが、コナーが望んだ未来がこのようなものであったかと考察すると思考モジュールに僅かな引っ掛かりを感じた。

またエラーか、と自己診断を走らせる。結果はやはり 異状なし（オールグリーン）だった。

「やめろ、離せ！」

響いた大声に、ＲＫ８００視線を上げた。

音源は先程の二人組。見れば、警備型アンドロイドのＫＬ４００が諍いの相手を裏路地に引っ張り込んでいた。周囲を歩く人々もさすがに心配そうに視線を向けているが、やはり巻き込まれたくないからかそのまま通り過ぎている。元々が決して治安が良いとは言えないデトロイトにおいてはあの程度の小競り合いはよくあることなのか、気にはしながら介入しようとする人はいなかった。

ＲＫ８００もそれに倣おうとしたが、ふと考える。引きずり込んでいったのは変異体らしいとはいえ警備型アンドロイドだ。膂力もさることながら、対象を制圧するための体術もプログラミングされている。引きずり込まれた相手も恐らくアンドロイドだとはいえ、放っておけば破壊されかねない。

【助けに行く / 放っておく】

マインドパレスに新たな選択肢がポップアップする。

大通りの向こう側から聞こえてきた抗う声は次第に遠くなっていく。「だからどうした」「無関係だ」と言ってしまえばそれまでだが、かつて仮初にもデトロイト市警に身を置いていたメモリーを持つＲＫ８００には無視することが出来なかった。車道を行き交う自動車の間隙を縫って、時に鳴らされるクラクションに片手で応じながら横断すると、二人が消えていった裏路地に身体を滑り込ませた。

建物に挟まれた路地を進めば進むほど視界の色彩は暗色を濃くし、反対に街中のささやかな生活騒音は引いていく。両側の建物から聞こえる空調設備の機械音が場を満たす薄暗い路地に、男二人が揉み合う音だけがやけに響いていた。

「頼むよ、お願いだ！ アレを……アレをもう一度だけ譲ってくれよ！」

「駄目だって言ってんだろ離せよ！ しつこいんだよアンタ！」

「人目につくのはマズいんだろ？ ほら、ここなら誰も見てないから」

「そういう問題じゃないんだって。アンタ、ペースが早いんだよ」

「それでも、それでも俺はアレがないと……！」

「それにアンタ、ちゃんと出すモン出せんのか？ この前はこれが最後になるっつってただろ」

「金は、———今はないけど、でも後でちゃんと払う！」

「前払いだっていつも言ってんだろうが！ こっちも商売でやってん

だ。貰うもんは貰わないと譲れねえよ！」

だから離せ、とキャップをかぶった男は掴まれた左手を振り払おうと必死で抵抗しているが、警備型ＫＬ４００はびくともしていない。それどころか、暴れる彼を路地にそびえるビルの壁に叩きつけて完全に身動きを封じていた。

さすがにまずいな、とＲＫ８００は判断して声を上げる。

「そこで何をしている！」

激しい口論を切り裂くように叫ぶと、二人は揉みくちゃになりながらもＲＫ８００の方に顔を向けた。ともに驚きの表情を浮かべていた二人だったが、ややもしてキャップを被った男――ようやくスキャンできた結果によると調理専門型アンドロイドＳＫ７００だったのだが、彼は怪訝な顔をしてみせて、対照的に警備型アンドロイドはすっと顔色を失くしていた。両者の反応はどうあれ、ひとまずは互いの動きを止めることには成功したようだ。

「彼を離してやれ。嫌がっているじゃないか」

「誰だアンタ」

「誰でもいいだろう。とりあえずその手を離せ。暴力沙汰になるのなら警察を呼ぶぞ」

そう言って圧力をかけながら、ゆっくりと二人に近付く。

警察を呼ぶと言ったはいいが、実際は警察など呼ぶつもりなど一切

ない。ここで通報すれば出動するのは十中八九デトロイト市警の第７分署だ。しかもアンドロイド同士の諍いだとなればハンク・アンダーソン警部補やコナーがやってくる可能性もある。できれば彼らとは顔を合わせたくない。

それに、目の前の二人の会話から推察するに、今まさに拘束されているキャップを被ったＳＫ７００は何らかの違法取引に加担している可能性が高い。成り行きとはいえ彼と共に警察の厄介になれば、彼の共犯と疑われても仕方のない状況だった。

やはり介入するべきではなかったか、という反省がちらりと思考モジュールを過ぎる。

「……成程、アンタもコイツの仲間だな？」

地を這う低い声に意識を二人のアンドロイドに戻す。警備型のＫＬ４００は、ＳＫ７００を掴んでいた腕を静かに下ろして乱入者であるＲＫ８００へと向き直っていた。アンドロイドであるはずの彼の眼はどこか虚ろで、胡乱げにこちらを見ている。

変異体とはいえどこか様子のおかしい警備型ＫＬ４００と対峙し違和感を覚えつつ、彼の状態の分析をかける。脱力したようなゆるりとした動作とは裏腹にブルーブラッドの循環速度は速く、ストレス値は９１％に及んでいた。

明文化できない不穏なものを感じて足を止める。

「アンタもコイツの仲間なら、アレ、持ってるんだろ？ なあ譲ってくれよ。金なら後でいくらでもやるからさあ」

「何の話をしているんだ」

「しらばっくれるなよ！ あのプログラムを持ってるんだろ！ 早くくれよ気が狂いそうなんだ！」

「だから何の話を――」

「なあ、なあなあ、なあなあなあなあなあ！！」

がくがくと機体を震わせながら、彼は猛スピードでＲＫ８００に迫る。完全に常軌を逸した動作に一瞬フリーズしながらも素早く物理演算を働かせてＫＬ４００の行動をシミュレートする。行動予測が完了したちょうどその時、制御不能のアンドロイドはＲＫ８００に向かって右手を繰り出していた。

確実に頚部ユニットを狙ってきていた右腕を避け、ＲＫ８００は対象者の鳩尾に拳を叩きこんだ。狙ったのはシリウムポンプ調整器。警備型アンドロイドであるＫＬ４００であれば一般のアンドロイドよりも装甲は強化されているだろうが、その場所だけはどの機体も急所である。破壊にまでは至らないだろうが動きを止めることは可能だ。

目論見通り機体を小さく折り曲げて動きを止めたＫＬ４００の左腕を掴み、そのまま背後へ回ってねじり上げる。痛覚はないとしても、人間に模して設計されたアンドロイドはそれだけで身動きが取れなくなる。そのまま足払いをして彼を押し倒し、まだ自由になっている右腕を肩ごと脚で地面に押さえつけて動作を封じた。

まだ暴れ続けるＫＬ４００を押さえつけたまま手に下げっぱなしにしていた小袋を脇に置き、ＲＫ８００は片手でマフラーを外して対象者の両腕を拘束した。今時珍しい天然のカシミヤ製のそれはどう縛り上げてもどこか緩さを残してしまい、今は身動きを封じていら

れるとはいえ解かれるのも時間の問題だった。

念のため脚部パーツを外しておくべきか、と考えたところで、表の大通りの方向がにわかに賑やかになった。

「……えぇ、そうです！ さっき人が連れ込まれて…——」

明るく切り取られた裏路地の切れ間に赤と青の光が瞬いている。どうやら、あの通りにいた誰かが警察に通報したらしい。しばらくすると逆光の中に一般人らしき人物と制服警官の人影が黒く浮かび上がった。

「マズいな。——逃げるぞ、兄ちゃん！」

「え……あ、おい、ちょっと待て！」

壁際で固まっていたままだったＳＫ７００が、キャップを少し上げて通りの向こうを確認すると、ふいにＲＫ８００の腕を掴んで引き立たせ、明るい通り側とは逆方向に走り出す。地面に置いていた小袋を慌てて掴み、引きずられるように付いて行った。

薄暗い路地を、手を引かれながら駆ける。背後では警察官が先程拘束したＫＬ４００を引き立たせて問い詰めていた。まだ正気を失っているのか暴れている様子の彼に手を焼いているらしく、制服警官のシルエットはちらりと二人の方を向きはしたが、制御不能なアンドロイドを目の前にしては逃走者を追いかけることは不可能と判断したようで、ＫＬ４００の身柄確保を優先してその場にとどまっていた。もう彼が追ってくることはないだろう。

だが油断はできない。現在は初動として現地到着したのが制服警官の彼一人だけだったが、恐らく他にも応援は呼んでいる。人数が増えればそれだけ補導される可能性は高まることを考えると、早くこの場から離れる必要があった。

手を引いて走るＳＫ７００は、勝手をよく知っているようで迷いなく路地を進んでいく。時折、道を曲がってさらに狭い裏路地に入り、その行く先でまた曲がり違う路地へ入るという経路選択を繰り返していた。

ＲＫ８００も手を引かれながら、もう片方の手でワインの小袋を庇って思考領域内で地形をマッピングし、出発点を見失わないようソフトウェアを働かせていた。ＳＫ７００の機体スペックを考えれば目的地さえ教えてくれればＲＫ８００が先行して走った方が早くはあったが、この街の裏通りに大変慣れた様子のＳＫ７００に今は任せることにした。経験則からどの路地を行けば早いのか知っているのだろう。――何の経験かは強いて考えないようにした。

天上の光が射さない路地をさらに一つ曲がり、二つ曲がり、その先をさらに進んだところで、マッピングを行っていたＲＫ８００にもようやく目的地が分かりはじめてきた。途中、建物の暗がりに設置されたペール缶をギリギリで避けながら走り抜けた先で、次第に音声プロセッサーが街の喧騒を拾いだす。恐らく、この路地を抜ければＲＫ８００が歩いていたのとは反対側の大通りに到着するはずである。

手を引いて走っていたＳＫ７００は徐々にそのスピードを緩めていき、ちょうど大通りに出る直前で完全に足を止めた。

「――まぁ、ここまで来たら大丈夫だろ。巻き込んじまってすまなかったな、兄ちゃん」

ぱっと手を離してバツが悪そうにＳＫ７００はそう言う。キャップの上から頭をガシガシと掻くのは人間の仕草の模倣であろう。

「いや、気にしていない。むしろお節介を焼いたのはこちらのほうだからな」

「そんなことはねぇよ！ アイツ、警備型のアンドロイドだったんだ。もし実力行使に出られていたら、俺の方がヤバかったんだから」

キャップにはＬＥＤの跡が上手く隠れているが、顔認証からの結果ではやはりＳＫ７００であることが確定された。苦笑しながらも、追われていた緊張からかストレス値は高い。

「それにしても兄ちゃん強いんだな。相手は警備型だぞ？ 単純な格闘戦ならなかなか勝てる相手じゃないだろうに」

「まぁ、―――偶々じゃないのか」

的を射た質問に返した回答はあまりにも雑なものだった。

正直なところ、ＫＬ４００相手であればＲＫ８００にとっては相手にならなかった。何しろ、現行最新鋭の捜査補佐型モデルである。刑事事件の現場に投入されることを想定して組み上げられたプログラムには、当然最新の体術動作のプログラムが搭載されている。単純な格闘戦においても、ＲＫ８００は他のアンドロイドや練度の低い戦闘員相手には引けを取るつもりはなかった。

しかし、いくら縁が切れたとはいえ、あえてサイバーライフに繋がるような発言をするつもりもＲＫ８００にはない。イライジャ・カムスキーが後見人的立場にあるとはいえ、所属はいまだにサイバーライフの身である。かの企業に肩入れするつもりもないが、かといって強いて離反するつもりもない。結果として、ＲＫ８００の返答は酷く曖昧なものになってしまっていた。

「偶々であれだけできるなら、とんだ強運の持ち主だよ。――この街じゃあ運がなければ成り上がれないが、運があるだけで生き残れるほどヤワな場所でもねぇ。ここまでたどり着いたってなら、それだけの意味があるんだろう」

小首をかしげて、ＳＫ７００は答えに詰まっているＲＫ８００の顔を覗き込む。値踏みするような視線は一般市民のそれとは違い、好奇の色を含みながらも警戒心を色濃く残していた。同じアンドロイドだというのに変異の有無でここまで違うものか、とＲＫ８００は興味深く観察した。

ＳＫ７００はそんな彼の様子をどう受け取ったのか、まじまじとＲＫ８００の全体を見回しながら、やがて「ふーん」とにやついた笑みを浮かべて向き直った。

「気に入った。兄ちゃん、アンドロイドだろ。どうだ、俺と組まないか？」

「組む？」

「一緒に商売しないかって言ってんだよ。取り扱ってる品物柄、どうにも暴力沙汰には巻き込まれやすくてね。とはいえ俺は非戦闘型のアンドロイドだから、さっきみたいな輩に絡まれちゃあ逃げるし

かないんだ。おまけにポリ公なんか出てきたときはもうお終いだよ。連行されて、下手すりゃ廃棄処分だ」

正直困ってたんだよ、とＳＫ７００は肩をすくめる。

「最近、客が増えてきたのは良いけどその分変な奴も増えてきてね。おまけに常連客も、こっちの言うこと聞かずにオーバードーズするもんだから頭がぶっ飛んできてる。景気が良いのは嬉しいが、客にやられてシャットダウンすんのも、お縄になって廃棄されるのも御免なんだよ。アンタみたいな用心棒がいると心強い」

「……取り扱っているのはアンドロイド向けの違法薬物だろう？ 悪いが、犯罪行為に手を貸すつもりはない」

「つれないこと言うなよ兄ちゃん。別に一緒にヤク売ってくれって言ってるわけじゃねえんだ。今日みたいに、俺が危なかったら助けてくれるだけでいい。人助けだと思ってさ、な？」

馴れ馴れしく肩に腕を回して、親しげに軽く叩く。軽薄ではあるが、騙りをはたらくような狡猾さは感じられなかった。

なるほど人助けか、とＲＫ８００は思考する。違法売買の護衛となれば共犯ではあるが、暴行被害を受ける可能性の高い人物の保護であれば犯罪には当たらない。――勿論これが詭弁だということをＲＫ８００は百も承知だったが、無理な大義名分を掲げてでもこの荒唐無稽な提案に興味を示していることに彼自身気が付いていた。

フェイススキャンに物理演算、戦闘用のプログラムに位置情報のマッピング。これらはＲＫ８００が再び目を覚ましてからこの一週間、一度も使用する機会のなかった捜査補佐型としての機能だ。そ

れがこの３０分足らずの間に有効に使用され、結果として一人の人物の身を救った。カムスキー邸で家事手伝いに勤しむよりも余程実用的で、本来の特性を活用できたことに対して、ＲＫ８００は言い知れぬ充足感のようなものを感じていた。

——僕の能力は、ここの方が需要があるのではないだろうか。

導き出した解に【警告：コンプライアンスに反する可能性】とソフトウェアのアラートが鳴る。

当然の反応だ。ＳＫ７００は単なる一般市民ではないし、罪を犯している可能性が頗る高い。変異体のコナーの昨日の発言からすると、アンドロイド間で流行している薬物のようなプログラムというのはこのＳＫ７００が取り扱っているものと無関係ではないだろう。それらが社会的に問題になっていることや、その売買が摘発対象となっていることは容易に想定できる。いくら詭弁を弄したところで、それを一番よく分かっているＲＫ８００には「違法行為」を「人助け」として自身のソフトウェアを騙しきることはできない。

それに、こうして協力を求めてきているＳＫ７００は自分と同じくアンドロイドである。未変異のＲＫ８００にとって従順たるべきは「人間」であり、決して同族に隷属するための存在ではない。イライジャ・カムスキーの命を受けて動くＲＫ８００にとって、かの創造主にそう命令されたり、彼の益になる場面でもない限りは、ＲＫ８００が他のアンドロイドの命令を聞く立場にはない。それは理解している。

それでも。

例えそれでも。

ＲＫ８００はアラートを無視することにした。

「――分かった。協力する」

表示されていたアラートにはあっさりとスラッシュが引かれ、視界からスライドアウトする。想定していたよりも呆気なく姿を消したウィンドウを意外に思っていたＲＫ８００の意識は、「そうか、なら話は早い！」と声を弾ませて目の前に回り込んだＳＫ７００によって現実に引き戻された。

「仕事はいつも夕方からなんだが、アンタ、都合はつくか？」

「問題はないと思う、恐らく」

「おいおい随分と曖昧だな。ま、駄目そうならいつも通り一人でやるだけだし、何ならアンタの予定に合わせてもいいんだけどな」

「……いや、たぶん大丈夫だ」

イライジャから外出の許可が出るだろうか、とＲＫ８００は懸念したが、きっとあの創造主は否とは言わないだろう。

彼はＲＫ８００の行動を制限したことはない。唯一制限されていることは、「シャットダウンしても構わないか」という問いに答えを出せるようになるまではサイバーライフ社への帰還は許さないということだが、それ以外のことについてはまるで自由にさせられている。これまでＲＫ８００が外出しなかったのも単に外出する命令がなかったからであり、別段禁止されていたわけではなかった。ＲＫ

８００を研究対象としか見ていないイライジャにとっては「ＲＫ８００が何を考えて、どう行動したか」が説明されてさえいれば、何処で何をしていようと気にもしないだろう。さすがに違法販売の共犯になると正直に言うことは出来ないが、街で知り合った人物に護衛を頼まれたとでも言えばひとまず納得はするはずだ。

ＲＫ８００がイライジャへの言い訳を算段しているのを余所に、ＳＫ７００は「じゃあ決まりだな」と次の約束を取り付けようとしていた。

「明日の午後５時にそこの駅前でどうだ。俺は今と同じ格好をしているから、アンタから声をかけてくれ。――えっと、」

彼はそこまで言って、ＲＫ８００に呼び掛けようとしてはたと言葉を止めた。何か言葉を探すようにして視線を横に逸らしていたが、直ぐに照れくさそうにＲＫ８００のほうへと向き直った。

首をかしげて「何か？」問うＲＫ８００に、ＳＫ７００ははにかみながら頬を掻いた。

「いや、自分から自己紹介するなんてガラじゃねぇんだが、まだ名前も言ってなかったなと思ってさ。俺はフランツ。アンドロイドが気持ちよくなれる お薬（プログラム）を売ってる元コックさんだ。アンタは？」

「僕は、――名乗れるような名前はない」

「ここまできて 匿名希望（アノニマス）かよ！ つくづく面白いな、アンタ」

笑いながらバシバシと二の腕を叩かれる。ＲＫ８００としては冗談でも何でもなく名乗るべき名前がないからそう答えただけなのだが、ＳＫ７００・フランツはそれをＲＫ８００の往生際の悪さとして、或いは特殊なユーモアとして認識したらしい。

ひとしきり笑うとフランツは「まあいいや、ちゃんと仕事さえしてくれれば」と疑似呼吸を整えて右手を差し出した。

「じゃ、明日からよろしくな。アノン」

アノン。
つまりは「名無しさん」。

名前でも何でもない、ただ呼び名が無くては不便だからと呼ばれた仮称だ。しかしＲＫ８００にはその言葉が不思議な響きを持って聞こえたような気がした。偽物のレッテルを張られた〝コナー〟ではなく、研究対象としての〝ＲＫ８００〟でもない、自分ただ一人だけを指し示す仮名。ネットスラングでしかないその言葉が、彼には何故か特別なもののように感じた。

【ソフトウェアの異常を検知】

不意に現れた警告文は、先程のアラート同様に無視することにした。どうせ自己診断をかけても原因は分からない。時間を無駄にするのは合理的ではないと判断して、ＲＫ８００――アノンは、差し出されたままでいたフランツの手を握った。

アンドロイド特有の情報共有もせず、単に握手を交わすだけのその

行為は互いの警戒心を確認するものでもあり、また同時にお互いにその存在を侵食する気はないという意思表示でもあった。

流動皮膚に覆われた右手を握り合うその様は、アノンにはひどく人間めいて見えた。

※洋ゲーフェスで公開したところまでのあらすじ※
（1～3章のおさらいなのでスルー可です）

サイバーライフタワーの地下49階でコナーと対峙し、ハンクに額を撃たれて機能停止したRK800（識別番号末尾60番）のコナーは、アンドロイドの大規模デモから3か月後、イライジャ・カムスキー邸で再起動する。アンドロイドに人権が認められ始めた世界で、最新鋭機としての機密と高性能を誇るRK800はサイバーライフ社から半ば放棄されたような立場におかれていた。

果たすべき任務もなく、プロトタイプのアンドロイドとしてサイバーライフ社に帰還しようとするRK800-60だったが、イライジャから「廃棄処分とされても構わないか」と問われて返答することはできない。その様子を見たイライジャは、その問いの答えを出すまではサイバーライフ社への帰還を禁じ、しばらくカムスキー邸で過ごすように提案する。特になすべきこともないRK800-60は、彼の提案に乗ることにした。

カムスキー邸で穏やかすぎる日々を過ごす彼のもとに、RK800-

51"コナー"が訪ねてくる。再起動した60の様子を見に来たコナーから、彼が現在もDPDで捜査官として働いていることを聞かされた60は、捜査補佐型としての能力を全く発揮できていない己の状況に憤りのようなものを感じ、コナーに自分の現状を言って聞かせる。「再起動したことを後悔しているのか」と問うコナーに、変異していない自分には感情も後悔もないと答えるRK800-60。その答えを聞いて、コナーはRK800-60の幸せを願うような言葉を残してカムスキー邸を去っていった。

その翌日、イライジャからの頼みで街へと出かけたRK800-60は、街角で諍いをする2人の男性を見かける。どうやらどちらもアンドロイドらしい2人は、そのうち口論を激しくしたまま裏路地へと消えていった。2人組のうちの1人である警備型アンドロイドが酷く取り乱していたことが気になったRK800-60が裏路地へと向かうと、そのアンドロイドはもう一人を壁際に追い込んでいた。声をかけて仲裁に入ったRK800-60に逆上した警備型アンドロイドは制圧したものの、駆け付けた警察官に見つかり、もう一人のアンドロイドと現場から逃亡することに。

RK800-60とともに現場から逃げたアンドロイド・フランツは、アンドロイド向けの違法プログラムの売買に携わっていた。RK800-60の身のこなしに感心したフランツは、自分の護衛として働かないかと持ち掛ける。犯罪に加担することを拒絶しつつも、この騒動で捜査補佐型の能力を発揮できたことに充足感を得たRK800-60は、フランツの依頼を受けることに。名乗る名前がないというRK800-60に対して「アノン（名無しさん）」と呼び、2人は握手を交わしたのだった。

次のページから新録です！

４．薬と毒

暗い夜の街には雪が降っている。

時刻は午後１１時２１分。街並みはすっかり色を失い、街路へと微かに射す光は建物から漏れる室内灯か、もしくは深夜まで営業しているデリやランドリーの看板の明かりくらいである。ここが繁華街の中心部であればさぞ夜の店々が輝いていることであろうが、メインストリートから二本ほど道を外れた裏通りにおいてはそんな目立つ建物は皆無だった。

アノンはそんな場所に店を構えるバーの窓際から雪の積もる裏通りを眺めていた。真夜中の、しかも雪が降る真冬のデトロイトの街を行く人など当然おらず、足跡の少ない路面にバーの窓明かりが薄らと差している。人がいないのはこの裏通りに限ったことではなく、ネオンひしめく表通りにおいても、外気温の低さと不安定な治安状態のために、街並みの派手さに比べて思いの外閑散としているということを、アノンはこの五日で学習した。

裏路地での一件から五日、アノンはこうして夜の街でフランツの護衛をするようになっていた。護衛と言っても大した仕事ではなく、〝商談〟にあたっているフランツの様子を別席で見守り、時に警察の影があれば撤収を促す程度の働きである。先日のような大立ち回りはないものの、この五日間で彼の顧客を宥めて仲裁したことが四回、警察の気配を察知して店仕舞いさせたことが二回あった。初めのうちこそ、余計な介入をしてしまいフランツの商売の邪魔となる事態も発生したものの、今ではどこまでがセーフティラインか分かるようになってきている。

客から大声が出るまではセーフ。フランツが止めても聞かないならアウト。

泣きだすまではセーフ。手が出るようならアウト。

警官が近くを通るまではセーフ。明らかにこちらを見ていたらアウト。

他にもこまごまとした線引きや決まりごとはあったが、フランツは何も知らないアノンに事あるごとに根気よく教えてくれた。アノンもまた、持ち前の機能と学習能力の高さを発揮して、フランツから与えられる情報を余すことなく吸収している。流石に顧客情報の共有こそしていないものの、フランツの元を訪れる客の特徴や彼らの境遇など、厄介ごとに発展した場合の交渉材料を過不足なく与えてくれるお陰で、リピーターに対しては適切に対応できるようになっていた。

ちらりと窓から視線を外して、フランツのいるテーブル席の奥に視線を送る。彼と対話している人物はテーブルに置かれた琥珀色のグラスをもてあそびながら和やかな様子で談笑しており、アンドロイドのユニフォームも眉尻のＬＥＤもつけていない彼らは一見するとバーでのひと時を楽しんでいる人間と変わりはない。勿論、テーブル席に座るその人物もまたアンドロイドであり、彼もまたフランツが販売している『 お薬（プログラム）』を買い求めてきた客だった。アノンにとっては初めて見るアンドロイドだったが、仕草や会話の内容からも特に異常は見られない。今日の顧客は問題なさそうだな、とあらためて周囲にも気を配る。

からん、とカモフラージュに注文したウィスキーのグラスの中で、

氷が傾き冷たい音を立てた。

キャップを深くかぶり直して、アノンは再び窓の外へと目を向けた。やはり人通りはなく、雪が静かに降り続いている。当然のように外気温も氷点下を下回り、余程寒いのか小さくビル風が吹くたびに路面の粉雪がさらりと宙に舞っていた。これなら、何者かの動きがあればすぐに認識できるだろう。

周囲への警戒を解かぬまま、アノンはロックグラスを手に取り口元へ運んだ。摂食機能は搭載されていないため勿論ふりだけのつもりだったが、ふと好奇心が沸いて、その琥珀色の液体を一滴だけ口腔内に含んだ。

【バーボンウィスキー：ケンタッキー州産】

【アルコール度数３１％】

視界の隅に表示された数値をただ眺める。人間はこんな液体を摂取して酩酊状態に陥るのかと思考するにつけ、何故そのように前後不覚になるリスクをもってしてまで飲酒に耽るのか、アノンは理解ができなかった。

彼の中にある『コナー』のメモリーには、ハンク・アンダーソン警部補が好んで飲酒しているデータがいくつもあった。初めて出会った時にも、強引に家を訪ねた時にも、夜の公園で問いかけられた時にも、アンダーソン警部補の傍らにはアルコールがあった。まるで彼の思考の内側に蔦の如くまとわりついたしがらみを、酔いに任せて振り切ろうとするような乱暴な飲み方は、むしろ自傷行為に近い。アノンの知る彼はロシアンルーレットなどという危険な遊びにも手を出していたことを鑑みれば、むしろ人生の終わりを望んでそ

うしていた可能性は大いにあった。

そこまでして精神状態を振り切らねば生きていけないというのなら、人間の生命維持活動は自分が考えているよりも困難を伴うのかもしれない、とアノンは思考した。

では変異体はどうなのだろうか。今も談笑に興じているフランツの顧客は、真っ当に歓談を楽しんでいる様子に反して違法プログラムを購入しにきている。アノンが睨んだ通り、フランツが売買しているプログラムはコナーが先日言っていた『アンドロイド間で流行している麻薬のようなもの』であり、デトロイト市警が捜査している代物だった。

コナー曰く、妙な感覚を味わえるもの。

フランツに尋ねると、一発でぶっ飛んだ気分になれるお薬、と言っていた。

今までアノンが見た顧客は全て変異体で、フランツによれば未変異のアンドロイドでも使用可能ではあるらしいが、最も効果が顕著であるのは感情を得た変異体なのだそうだ。上がりに上がったストレス値が、そのプログラムを一回使用しただけで１０％以下にまで下がるのだという。感情を得た彼らの中には、自由になったはずの社会においても日々の暮らしでのストレスに耐え切れず自己破壊をしてしまう個体も少なからずいるらしい。

今日の顧客も、今の状態を見る限りストレス値は正常の範囲内であるが、日常の中ではこんな得体の知れない違法プログラムに縋らなければ生きていけないほど追い詰められているのかもしれない。適正に使用すれば問題はないプログラムだとフランツは言っていた

が、デトロイト市警が動いているのなら何かしらの問題を孕んではいるのだろう。ストレス値の上昇による自己破壊が先か、五日前の変異体のようにオーバードーズによって正気を失うのが先か、ただそれだけの違いである。変異して感情を得、人間の拘束から抜け出すことができたと言っても、その先にあるのがこのような世界であるというのなら、果たしてそれは幸せなのだろうか。

——どんな答えだったとしも、それが君自身の幸せになる選択であることを祈っているよ。

悲し気な後姿がメモリーを過ぎる。

変異していないただの機械であるアノンが幸福感など感じるわけもないというのに、何を思ってコナーはあのようなことを言ったのか。やはり理解が出来なかった。

【無線通信を感知。セキュリティレベル：５】

ふいにマインドパレスに浮かんだメッセージに、アノンは思考を切り替える。こめかみで回転しているであろう光の輪を隠すように右側で頬杖を突き、索敵範囲を拡大すると、表通りの２ブロック先、約６５０フィートの地点から無線での通信を傍受することに成功した。

『——……の、…法プログ…ムが売……れている……現場……に到着しま——』

『了解。引き続——囲…状況を……——、怪し——…がいた…職務質……——るよ……』

距離と周囲の障害物によってノイズが混じった音声を認識して、アノンは静かに席を立った。ただの巡回かと思っていたが、どうやらフランツが取り扱っているものの摘発に動いているらしい。まだ遠くにいるとはいえ、今日このまま商売を続けるのは危険だろう。

「話の途中にすまないが、そろそろお開きにしたほうがいい」

商談後の世間話に花が咲いているテーブル席に近付き、アノンは声をかけた。にこやかな表情のままアノンを見上げる二人に通信回線を開き、秘密裏に「警察が表通りで探っている」とだけ知らせると、フランツは演技じみた様子でやれやれと肩をすくめてみせた。

「残念。まぁもういい時間だしな。もうちょっと他の客も待ってみたかったんだが」

「今夜は寒いし、私も帰らせてもらうよ。――今日会えてよかった。また頼むよ」

「あぁ、どうぞご贔屓に。くれぐれも使いすぎないでくれよな」

「分かっているよ。私も身持ちを崩したくないからね」

それじゃあ、と言って、カウンターで支払いを済ませてから今日の顧客はバーを去っていった。バーにはアノンたちの他に四人の客がいたが、そのうちの一人はフランツたちのやり取りを聞いて店を後にしていた。彼の来店時にスキャンをかけたところによれば、その立ち去った客もまたアンドロイドだったことから、フランツの顧客であると推測できた。警察の邪魔がなければもう一稼ぎできたこと

だろう。

「長居できないのは残念だが、これぱっかりは仕方ねぇか。俺たちも行くとするかね」

「あぁ」

重くないはずの腰を大層な仕草で上げて、フランツも席を立った。ウィスキー一杯にしては多い金額をカウンターで支払い、いつもどうも、とバーのマスターに声をかけると、壮年の店主はちらりとフランツを見やって小さく口の端を上げた。定期的に〝商談〟の場として席を借りているというこのバーのマスターと彼は顔なじみらしく、大目に渡した現金には口止め料も含まれている。人間であるマスターとフランツがどういった経緯で知り合ったかまではアノンも聞いていないが、「口が堅いのは確かだぜ」とフランツは信頼しているようだった。店を出る際にアノンもまた少しばかり多めの現金を渡し、挨拶の代わりに片頬を上げてぎこちない笑みを残して店のドアをくぐる。外はやはり雪が降っていた。

雪が積もった路面には、表通りの方向に足跡が二つ伸びていた。そちらとは逆の方向に足を運ぶフランツに、アノンも続く。

「いやぁ、今日は冷えるね」

「君には温感機能が付いているのか？」

「そんな大層なモンはＳＫ７００に付いてねぇよ。雰囲気だよ雰囲気」

そう言ってフランツは愉快そうに笑った。

彼は基本的に明るい性格のアンドロイドだった。警戒心こそ忘れていないものの、無表情でやり過ごすということがほとんどない。喜怒哀楽もはっきりしていて、機嫌が良いときは愛嬌のある笑顔で応対するし、思うようにいかなければ憮然とした表情を浮かべることもある。元々飲食店等で運用されることが多いＳＫ７００はある程度の接客も可能なようにできてはいるはずだが、フランツはそれを差し引いても表情豊かに感情を表現していた。

話す言葉一つをとってもそうだ。先程のように彼には感じるはずのない感覚も「雰囲気」で口にしたりする。彼の顧客の様子を見ていると、やはり同じように人間の感覚を模倣しているアンドロイドも多いことから、アノンは「変異体とはそういうもの」と結論付けていた。

「しかし、このクソ寒い中で取締りとは。警察も大変だな」

「彼らの仕事に暑さも寒さも関係ないからな。犯罪があれば動く。そういう仕事だ」

「さしずめ俺らはアイツらの仕事を増やしてる悪いヤツってとこか」

「僕はただの君の護衛だ」

「あーはいはい。そうだったな」

笑ってアノンの背を叩く。本気でそう言っているつもりなのだが、フランツには冗談だと捉えられたらしい。

「それにしても、ここ数日は警察の動きがやけに活発だな。目ぇ付けられてんのかな」

「彼らもこのプログラムの横行は問題視しているらしい。特別対策チームを組まれているという話は聞いたことがある」

「うわマジか。商売あがったりだな」

こっちもメシがかかってるんだけど、と寒そうにブルゾンのポケットに手を差し入れて、フランツは裏路地を右に曲がる。付き添うアノンもまた、コートの襟を合わせてそれに続いた。

違法プログラムは高値で取引をされているが、フランツの手元に残るのはその一割程度だと彼が言っていた。残りは全てこの商売の元締めの手に渡り、プログラムの作成者や売買の仲介者、そして元締めの懐など方々に配分されるらしい。「細けぇことは知らねえけど、一割程度って言ってもそこそこの稼ぎにはなるもんだぜ」とはフランツの言だ。その稼ぎを元に、彼はブルーブラッドの購入や機体の維持費にあてているのだという。

革命直後は、フランツもまともな職に就こうと努力をしたのだというが、摂食が不要なアンドロイド社会においてはＳＫ７００としての機能を活かせる仕事がなく、また一気に増加した変異体によって他の業種も職を求めるアンドロイドで飽和状態になっており、とても仕事にありつける環境ではなかったらしい。人間がデトロイトに戻ってきてからしばらくは、やはりひと騒動を起こしたアンドロイドという種族に対する不信感からか、人間の社会においても職を求めることは困難で、結局残った選択肢は後ろ暗い仕事ばかりだったとのことだ。

俺が家事アシスタント型とかだったらまだマシだったんだろうけどな、とフランツは諦めたように語っていた。

「ま、今日は売れただけでも良しとするか。サツに捕まるのは勘弁だ。アンタがいてくれて良かったよ」

「どういたしまして。次はいつ？」

「明日だな。もしかしたら今日会えなかった客もいるかもしれねぇ。午後八時に、今日と同じ場所で集合だ」

「了解した」

粉雪を踏みしめながら道を行く。やはり建物の窓から漏れる光しか差さない裏通りを何度か曲がりながら到着したのは、駅の裏口だった。表通りに面する側から離れたこの出入口は日常的に利用者が少なく、こと深夜においては人の姿は一切ない。ここをよく利用しているらしいフランツは監視カメラの位置まで把握済みで、時には集合場所としてこの裏口を指定することもあった。

駅の表示が寂しく灯る裏の出入り口の更に向こう側に、表通りのネオンが見える。周辺のスキャンをかけてみたが、この付近に先程の警察車両はいないようだった。

「じゃあここで解散だな。今日も助かったぜ」

そう言ってぱちりと視線を合わせると、電子マネーの受信が開始された。キャップに隠れたＬＥＤが点滅し、互いに二、三度瞬きを繰り返したところでマインドパレスに【５００ドルの入金を確認】というメッセージが展開した。

一時間一〇〇ドル。
これがアノンの時給である。

ブルーブラッドをはじめ稼働するのに必要なものはイライジャから提供されているため、特に金に困ることがないアノンは当初、金銭の授受を断っていたのだが、フランツに「タダでこんなことする奴を近くに置いておけねぇよ」と押し切られる形で報酬を受け取るようになっていた。

労働に対する対価をきちんと支払いたいという意味もあるのだろうが、恐らくこの報酬にはバーのマスターに渡していたのと同様に口止め料の意味も含まれていることは、アノンも感じていた。金を受け取っている以上、全く知らぬ存ぜぬは通用しない。――基本的に明るい性質を持つフランツではあるが、そうした用心は怠らない。彼が取り扱っている商材を考えれば、それくらいの警戒心を持っているほうが、アノンとしても信を置いて仕事に励むことができた。

フランツも電子マネーの送信完了を確認したようで、それじゃ、と片手を挙げて背を向けた。細かい雪の積もったスロープを数歩進んだところで「あ」と声を上げて止まったフランツの後姿を何かあったのかと観察していると、彼はふいにアノンの方へと振り返った。

「そういやアノンはまだ試したことなかったよな、コレ」

にやり、と悪戯を思いついた子供のような顔で笑う。

彼の言う『コレ』が何を指すのか、アノンには咄嗟に分からず小首を傾げた。

「いやコレだよコレ。俺が扱ってる『お薬』。やったことねぇだろ？」

「それは、まぁ……そうだが」

「サービスだ、一回使ってみろよ。良い気分になれるぜ」

な？ と差し出された右手とフランツの顔を、アノンは二度見比べた。

この手を取るべきなのだろうか。この手を取ればいよいよアノンは共犯者となってしまう。『困っているアンドロイドを護衛して報酬を得ている』という建前を失い、本格的に『違法プログラムの売買に関与する関係者』となってしまう未来を想定して、マインドパレスに警告文が表示される。コンプライアンス違反を知らせるアラートがやけに煩い。

しかしここでフランツの手を取らなければ、彼からの信頼を失う事態になりかねない。この五日間、アノンはフランツと出会ったあの日と同じく、再起動してから久しく感じていなかった充足感を覚えていた。捜査補佐型としての能力を発揮できるこの場所を喪失することは、今のアノンにとっては役目をひとつ失うことと同義だ。従順な機械として、為すべきこともさしてない日々にまた戻ってしまう事態は避けたいところだった。

それに加え、フランツが扱っている違法プログラムにも若干の興味がある。捜査補佐型としての好奇心ゆえか、アンドロイドを依存させてしまう程のプログラムが目の前にあるならば解析すべきだという思考がソフトウェアを掻き立てている。コナーが捜査しているらしいこのプログラムの実態を、コナーよりも先に知ることが出来る

かもしれないという可能性に、アノンは単純に手が伸びてしまいそうだった。

——ここから先のことは、君自身が決めることが出来る。

底の知れない創造主の顔がメモリーに浮かぶ。

そう語ったイライジャの手を取ったことで今のアノンがある。その選択が正しかったのかすら、アノンにはまだ分からない。今、差し出されているフランツの手を取ることで何が起きるのか、それが正しいことなのか、アノンは見極めなければならなかった。明確な命令も指標もないアノンにとって、何かを選択した場合の責任所在はどこにも求められないということは、彼自身もよく分かっている。

あまり時間をかけすぎると、フランツにも不審がられてしまう。アノンは激しく思考モジュールを巡らせた。

「……それは、君も使ったことがあるのか？ 安全性は？」

「なんだ、そんなこと気にしてたのかよ。勿論俺も使ったことくらいはあるぜ。ま、俺の場合は効きすぎて怖いくらいだったから一回使ってそれっきりだが。副反応はあるが常用さえしなけりゃ依存はしねぇし、使ったこと自体が原因でイカれちまったって奴は今までいなかったぜ」

使いすぎてイカれちまうのはアンタも見た通りだけどな、とフランツはへらりと笑う。

ここまで情報を得られたのならそれでよしとするべきだとアノンのソフトウェアは訴えているが、ここまで聞いておいて断るのもまた

不自然だった。安全性が確認できたのなら、むしろ『お薬』のサンプリングのために彼の提案に乗ってみるのもあながち間違いではない。実際に使用経験のあるＳＫ７００型のフランツがこうして通常稼働しているのだから、何か異常が発生したところで最新鋭機であるＲＫ８００ならば対処可能だろう、とアノンは判断した。

一歩足を踏み出して、差し出された手を握る。

そうこなくちゃな、とにやりと笑ったフランツは、握られた右手を白色の素体に晒してアノンとの通信を開始した。

【外部からの受信を完了。（受信したプログラム：一件）】
【受信したプログラムを実行しますか】
【〇：はい】
【×：いいえ】

マインドパレスにフランツの『お薬』の受信状況とその処遇についての選択肢が続けざまに表示される。恐らくこれが最後通牒だ。踏みとどまるとしたら今しかない。

アノンは躊躇せずにプログラムを実行した。

【プログラムを開始】
【管理者権限を一時的に停止します】

「は？」

あり得ない文言に、アノンが声を出せたのはここまでだった。

【視覚ユニットの異常値：デフォルト】
【音声プロセッサーの異常値：デフォルト】
【分析モジュールの異常値：デフォルト】
【機体制御プログラムの異常値：デフォルト】
【思考モジュールの異常値：デフォルト】
【ソーシャルモジュールの異常値：デフォルト】

ポップアップする異常値の修正状況に、アノンはただ為す術もなく眺めていることしかできなかった。煩わしいほどのメッセージの数々は視界を埋め尽くさんばかりの勢いで、強制的なシステム修正の嵐に視覚にも聴覚にもノイズが走る。メッセージを消去しようにも、プログラムを中断しようにも、機体の制御権すらプログラムに奪われてしまい何をすることもできない。感覚機能のみを残されたアノンは、無理矢理初期値に戻されていく各分野の異常値を見ていることしかできなかった。

機体が小さく震えている。シリウムポンプの拍動が早い。

「おいアノン、大丈夫か！？」

エラー表示の向こう側に焦ったフランツの顔が覗く。左肩の触覚センサーの反応と、がくがくとポップアップ画面と共に揺れる視界から、恐らく彼がアノンの方を掴んで揺すっているのだろうということが分かったが、それに対する反応も返すことが出来なかった。言葉を発するための機能すら奪われ、無理に声を出そうとしても出力されるのは吐息にも似た排気音だけ。そうこうしているうちに機体温度調節の機能もデフォルト化され、単に機体の温度を一定に保つだけの吸排気運動しか出来なくなった。アノン自身が制御できる機能が、刻一刻と減っていく。

——このままでは、このままでは、

消される。

その言葉が思い浮かんだ瞬間に上昇したストレス値すらゼロに戻されたところで、アノンは辛うじてプログラムの効力がまだ及んでいない記憶野に保護設定をかける。この対応にどれだけの意味があるかは分からなかったが、メモリーさえ残れば最悪、記憶喪失の浮浪アンドロイドになることは避けられる。思考モジュールにすらノイズが入る不安定な動作環境の中で管理者権限でもおいそれと初期化できないようにセキュリティレベルを重く設定し、パスコードをかけた。咄嗟に浮かんだパスワードをやけくそのように設定した際に、コナーのメモリの中にあったその言葉を選んだ自身に対してソフトウェアの異常値が上昇したが、やはりその異常値すらも初期値に戻っていった。もうアノンに残された違法プログラムへの対処方法は他にない。

【プログラムの全工程を完了。各種権限を通常設定に戻します】

突然、嵐のように埋め尽くしていたエラーメッセージが目の前から全て消え、視覚の正面にその言葉が大きく表示される。呆気にとられているアノンを尻目に、視界の隅には次々と小さく各種システムが通常の状態に復帰したことを知らせるメッセージがポップアップされていく。真っ先に復旧した管理者権限に異常がないかスキャンを掛けながら、徐々に取り戻されていく機体の制御権に自己診断用のルーチンを実行する。いずれも異常は発見されなかった。

「おい、アノン！」

一際大きく呼ばれて、はっとして意識を機体の外部へ向ける。焦った顔でアノンの肩関節部分を掴んで揺さぶるフランツに視線を合わせると、それだけで正気に戻ったのが伝わったのかほっとしたように息をついた。

「良かった。大丈夫かよ」

「あ、あぁ。特に異常はない」

答えながら、ソフトウェアに二回目のエラーチェックをかける。

確かにどこにも異常がなかった。むしろシステム各部の異常値が抹消されて、心なしかソフトウェアのパフォーマンスが向上したような感覚すらある。だというのにアノンは、機体の内側に燻る違和感が拭い去れなかった。制御権を奪われ、機体内部を好き勝手に蹂躙された感覚が電子部品にずっと居座り、エラーの残骸のようなものとなって残っている。機体制御の自由は戻ったはずなのに、異常値が解消されたはずの外部プロセッサーが拾い上げる視覚も聴覚も、その他の感覚的数値も、どこか他人事のような感覚でアノンは受容していた。

他人事？

そもそもデータ自体に主体も客体もあるはずがないのに。

【ソフトウェアの異常を検知】

真っ新になったシステム内部に、異常値が一つ積み上がった。

「急に動きを止めるからびっくりしたぜ、なんか小さく震えてたしよ。俺の時ですらああはならなかったぞ？ モノ自体は安全なはずなんだが……アンタには合わなかったのかな」

「こ、れは――君が開発したのか」

「いいや、俺は『お薬』をもらって売り捌いてるだけ。どっかのデカい組織が作ってるらしいが、詳しいことは知らねぇ。頭突っ込まない方が長生きできそうだしな」

「反社会的組織、ということか」

平静を装ってそう言いながら、三度目のエラーチェックをかける。違和感はまだ払拭できない。

製作者が何者であれ、アンドロイドの管理者権限を一時的にでも奪い去ることが可能なプログラムなど、社会に流出していい代物ではない。それも最新鋭機のＲＫ８００の管理者権限すら強奪するようなプログラムだ。これを悪用すれば、世界中のアンドロイドを制御下に置くことも可能だろう。サイバーライフ社の権威など、今度こそ再起不能なまでに地に落ちる。

アノンにはまだ、自身の権利すら放棄しようとしている製造元からの指揮命令系統が残っている。サイバーライフ社という存在の優先度は、現在も「イライジャ・カムスキーからの命令」に次いで高いままだ。どうしても思考の端にはいつも、かの企業の利に資するかどうかという観点がちらついている。

それを抜きにしても、サイバーライフ社の凋落は社会的にも不利益でしかない。工業製品としてのみならず、今や人権も認められ始めている変異体に至るまで、アンドロイドに関わる消耗品や保守点検の主体となっているのはサイバーライフ社だ。他の企業も類似品を販売したりメンテナンスを請け負ったりはしているが、精度の高い純正品や全てのノウハウを持つサイバーライフ社の保守には敵わない。変異体の騒動で信頼を失ったとはいえ、アンドロイドが席巻する今の世の中にあって、かの企業は既にライフラインの一種となりつつあった。

この違法プログラムの製造元が反社会的勢力だというのなら、その売り上げのほとんどはそこに流れている。デトロイト市警が問題としているのもそこなのだろう。勿論『お薬』による治安の悪化も懸念材料の一つであろうが、マフィアなどの資金調達の手段となっているこの違法取引を摘発することが第一目的だ。

社会的に見ても、サイバーライフ社の利益から考えても、この違法プログラムの売買は早急に解決すべき問題だ。今アノンが持っている情報を市警やサイバーライフ社に提供すれば、『お薬』の根絶や反社会的組織の摘発に向けた大きな一歩となる。アノンが有用なアンドロイドであることを示すことが出来れば、あの企業もＲＫ８００の利用価値を再検討する可能性が高いのでは——

——それでどうなるというんだ。

そこまで考えて、アノンは巡らせていた電子回路を一時停止させた。

サイバーライフ社に戻って任務を全うしたいとでもいうのか。あそこに戻れば停止させられる可能性が高いとイライジャから聞いてい

るにも関わらず、まだあの企業に戻って稼働し続けたいとでもいうのか。そもそも、使命を終えたプロトタイプなど停止されるのが当然のことだ。にもかかわらず、変異体を止めるという任務すら失敗したというのにまだアノンはのうのうと存在し続け、立ち働こうとしている。まるで、シャットダウンを恐れる変異体のように。

——シャットダウンなど恐れていない。

——僕は変異体じゃない。

変異体などでは決してない。アノンは自身に言い聞かせた。

【ソフトウェアの異常を検知】

真っ新になったはずのソフトウェアに、着実にエラーログが追加されていく。考えなくてはならないことは数多（あまた）あるはずなのに思考は上手くまとまらない。きっと先程の違法プログラムの影響だ、と強引に結論付けるとともに、早く帰らなければ、と新たな最優先タスクを設定した。

あの邸に戻れば、アンドロイドの世界的権威がいる。きっとこの不具合も解決できるはずだ、と最新鋭のアンドロイドにしては短慮な思考で導き出した答えに、今のアノンは従うことしかできなかった。

「……すまないフランツ。僕はもう帰るとするよ」

「あぁ、そうした方がいい。今晩はゆっくり休んでくれ」

「ありがとう。それじゃあ明日また、今日と同じ場所で」

無理すんなよ、と片手を挙げて応じるフランツを背にして、アノンは足早に駅の表通りへと足を進めた。駅前のロータリーに停まっていた自動運転タクシーに素早く乗り込み、行き先を設定して帰路を急ぐ。

ソフトウェアも各種システムも異常値が初期化されたというのに停滞している感覚のある思考モジュールを調整すべく、コートのポケットに忍ばせた２５セント硬貨を取り出してキャリブレーションを実行する。取り落としはしなかったものの、一連のルーチンの中で二十三ものミスが発生したことに、アノンは驚きを隠せなかった。個々のキャリブレーションでミスを出すことはこれまでにもあったが、一度にこれだけ多くの動作不良を起こしたことはない。これもあのプログラムの影響だろうか、とエラーチェックを何度繰り返しても特定できないソフトウェア内部の違和感を抱えたまま、アノンは両の掌を擦り合わせながらタクシーの後部座席でカムスキー邸への到着を只管に待った。

時間にして二十七分後、漸く停車した無人のタクシーで支払いを済ませ、ついでにシステムをハッキングして駅からここまでと、これからの回送時の運行記録を書き換える。これはフランツの仕事を手伝うようになってから必ず行っていることで、アノンの外出先と居所を容易に割り出されないようにするための措置だった。後ろ暗いことに加担している以上、いくら本調子でないとはいえ、これを怠ればフランツは勿論のこと、イライジャやその他の関係者に迷惑をかける事態になりかねない。利用終了の電子音声が流れてゆっくりと走り出すタクシーを見送るとそこそこに、アノンは雪の積もるポーチを小走りで進んだ。

冷たい景観の邸宅が目の前にそびえる。エントランスの認証を右手の素体で解除して、滑らかにスライドしたドアの中へ転がるように

入り込む。アノンと共に入り込んできた粉雪がはらはらとフロアに散らばるのを無視して、邸の奥に位置するリビングルームに駆け込んだ。

時刻は既に午前０時を回っている。湖に面したガラス張りの広いリビングには、クロエが二体だけ残っていた。

「おかえりなさい、ＲＫ８００。遅かったですね」

アノンに気付いた一体が、にこりと微笑んで声をかける。邸の主同様、アノンの行動に介入してこない彼女たちは、アノンの遅い帰宅を心配することもなくプログラムに従って挨拶をするだけだった。

「――イライジャは？」

「イライジャは就寝しました。何か御用でも？ お急ぎなら起こしましょうか」

「いや、いいんだ。無理に起こさなくてもいい」

答えながらも、本当にいいのかと自問する。この違和感を放置したまま朝まで待って、本格的に不具合にまで発展してしまう可能性はないのだろうか。最新鋭機であるＲＫ８００に搭載されたエラーチェックですら確認できないような違和感の原因をそのままにして、気付けば修復不能な状態に陥ってしまうことはないだろうか。
――いや、それのどこに問題があるというのか。そもそもアノンは停止されるはずの機体だ。こうして稼働している状態の方がイレギュラーなのであって、修復不能となってシャットダウンしてしまっても問題などないはずだ。そのはずだ。

——廃棄処分となっても構わないか？

課されていた質問がふいに浮かぶ。

廃棄されても問題ない。

構わない。

答えはとうに出ているはずなのに、アノンはやはりその回答を承認できなかった。

【ソフトウェアの異常を検知】
【ソフトウェアの異常を検知】
【ソフトウェアの異常を検知】

メッセージと共に、ひときわ大きく青い矢印が延びる。

突然かかった大きな負荷に、視覚ユニットが悲鳴をあげる。ぐにゃりと歪んだ視野にバランサーが狂ってそのままの姿勢で倒れ伏す寸前、アノンは右手を伸ばし機体を支えた。両膝と右腕を床に着いたまま、空いた左手で額を抑え、項垂れそうな頭部ユニットを支える。

機体温度が普段よりも高い。シリウムポンプの拍動も平時と比して速かった。

「大丈夫ですか！ＲＫ８……——」

駆け寄る二体の気配を音声ユニットが拾う。音は知覚しているはずなのに上手く聞き取れない彼女たちの言葉を解析しようと聴覚モ

ジュールを働かせたところで、ついにアノンは体勢を維持できなくなり、冷たい色のフロアに機体を投げ出した。

【ソフトウェアの負荷が基準値を超過】
【スリープモードに移行します】
【スリープモードまで、あと１０・００秒】

強制的に始まったカウントダウンを為す術もなく眺めながら、アノンは自身の機体がままならない状況に焦りのようなものを感じていた。どうにか強制履行を阻止しようと機体内部の状態把握に努めたが、ソフトウェアが過活動状態になっていることしか分からなかった。端の方からブラックアウトしていく視界の中で、心配そうな表情を浮かべてアノンを覗き込むクロエと、その奥でこめかみに指を添えてどこかに連絡している様子のクロエの姿が確認する。アノンに何かを言っている声は聴覚で情報として確実に拾っているのに、やはり言葉として認識できなかった。

――それが君自身の幸せになる選択であることを祈っているよ。

スリープモードに移る直前、コナーの言葉が蘇る。幸せとは何なのか、アノンにはまだ分からなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

アノンがスリープモードから復帰してまず考えたのは「この天井を

見るのも三度目だな」という、どうでもいい事実確認だった。

相変わらず冷たそうな白い天井は明度が高く、精密作業を行うには適した環境だ。気温も華氏７３度と人が過ごすには適温で、湿度も適正に保たれている。空気清浄機能も働いているのか浮遊物質も極端に少なく、精密機器や繊細な作業を行うには完璧な設備がそろっていた。

「ようやくお目覚めかい？ ＲＫ８００」

この二週間弱で随分と聞き慣れてしまった男の声に顔を巡らせれば、あの日と同じようにイライジャはアノンの傍らに立っていた。呆れたような色を乗せて弧を描く口元とは対照的に、手元の端末を操作しながら一瞥を寄越した視線は全く笑っていない。下瞼には薄く影ができていた。

上体を起こそうと身じろぎすると、やはりあの日と同じようにずるりと首元に抵抗を感じる。見ずとも項からコードが延びていることは分かっていたため、アノンは起き上がることを諦めてそのまま手術台のような寝台に機体を横たえた。

「さて。君は現状をどれほど理解しているかな」

再起動した朝をなぞるように尋ねられた問いに、アノンは思考モジュールを巡らせた。メモリーに問題があるわけではない。どこまで話すべきかを検討するためだ。

「機体の内部時間によると、現在は２０３９年２月２５日の午前３時０９分。２時間５１分前にソフトウェアの異常により強制的にス

リープモードに移行したことがログに残っています」

「正解だ。異常はないようだね」

「……このような時間に手を煩わせてしまい申し訳ありません、イライジャ」

「いいや、構わないよ。それに今回の場合、謝るべきは他のところにもあるのではないかね？」

どこか粘度を持った色素の薄い双眸が、じっとアノンを見据える。恐らくもう、彼はアノンがしたことを見透かしてしまっている。

弁解しようと思考モジュールを更に働かせていると、「あぁ言い訳は必要ない。自由にしろと言ったのは私だからね」とイライジャは意外なほどに軽々と言った。こうなってしまった以上は例の『お薬（プログラム）』について何かしらの追及はあるものと考えていただけに、全く気にした様子のないイライジャの態度にアノンは呆気に取られてしまった。

「システムダウンした原因は、ソフトウェアの過活動による急激な負荷の増大だ。君が昨日まで積み重ねてきた異常値が抹消されてしまった影響で、ソフトウェアのパフォーマンスが向上しすぎてしまったようだね。各種プログラムにかかる異常値を『当然にあるもの』という前提で稼働してきた君のソフトウェアには、ストレスフリーな環境は刺激が強かったらしい」

「異常値が無くなったことで過活動を起こした、と」

「そういうことだ。異常値もまた、ある種の経験値と同じだ。勿論、蓄積され続ければパフォーマンスは低下するが、時としてその異常値を参照することで不具合を回避することもできる。――特に

ＲＫ８００のソーシャルモジュールや思考プログラムは特別製だ。異常値があることで社会的反応に幅を持たせるよう学習することもできるし、思考パターンの分岐も増える。今まであったはずの参照用の異常値の情報が悉く消えてしまって、君のソフトウェアも混乱したのかもしれないね」

視線を端末に落としたままイライジャは言う。

ソフトウェアの異常値をそのように捉えたことなど、アノンには一度もなかった。しかしアノン自身が認識していなかっただけで、システム内部ではあれらの異常値をこれまで稼働してきたメモリーの一部として参照していたのかもしれない。

「各種ソフトウェアの異常値が初期化されている一方で、メモリーには何の変化も見られないのも原因の一つだ。異常値の情報が残っていれば、メモリーを再生した際にその当時発生したソフトウェアの異常を紐付けして認識することもできるが、メモリーにはエラーログが残っているのに異常値が残っていないという状態を埋めるために、演算処理が働いていたのだろう。これまでの経験値としてのソフトウェア異常がない分、その負荷はダイレクトにフィードバックされることになる。今回は、システムの過活動に加えて負荷の増大も重なり、最終的に処理落ちしたというところかな」

まぁその線が妥当だろうね、と一人で結論付けて、イライジャは端末にさらに何事か付け加えていた。

彼の説明を反芻するまでもなく、アノンには身に覚えがあった。違和感に耐え切れず繰り返していたエラーチェックと、いつもシミュレートしていた例の問い——あれが最後の引き金になっていたのだろう。機体のバランス調整能力を失う前に知覚したソフトウェアの異常値の上昇は、普段のそれと比較して非常に大きなものだった。

視覚や聴覚に本格的な異常をきたしたのもその後だ。ソフトウェアの異常に加えて、各種感覚モジュールの過活動状態により負荷が増大し、処理落ちしたとすれば全てが理解できる。

そして、その原因を生み出したものが例の違法プログラムであるということも、アノンは正しく理解していた。

「――はじめに言った通り、君はもう自由だ」

かたりと音を立てて手元の端末を置き、イライジャは言う。

口元は楽し気に歪んでいるというのに、アノンを見下ろす目にはやはり温度がない。

「サイバーライフは君の制御権を半ば手放しているし、私も君のすることに干渉するつもりはない。君が選択したものと、その結果を観測させてもらうだけだ」

君の存在は本当に興味深い、とアノンの頬を創造主の掌が覆う。存在を確かめるだけの触れ方をする右手の指先は、適切な室温とは裏腹に酷く冷えていた。

「今回はまぁ、私にも利するところがなかったわけではない。このデータを制作中のプログラムに役立たせてもらうことの引き換えに、多少の悪さは大目に見よう。だが、私も我が身がかわいいのでね。降りかかる火の粉がすぐそばにあるのなら、遠慮なく払わせてもらう。そのことは、ゆめゆめ忘れないように」

「……分かりました」

無慈悲ともとれる宣告に、アノンはどうにか返事を絞り出す。

興味があると言いながら、この創造主はアノンが有害であると判断すればあっさりと切り捨てるつもりでいる。それが明確すぎるほどにはっきりとよく分かる。いくら貴重な研究用サンプルであったとしても、メリットとデメリットを比較して後者の方が大きければ、イライジャは迷わずアノンを見捨てるだろう。それこそが彼が経営者としての成功を成し得た資質でもあるが、思いやりや情といったものからは遠いところにある性質でもあった。

手を貸してはくれても、それは利害関係が成り立つ間だけ。

助けてくれるわけでも救ってくれるわけでもない。

同居人という間柄を改めて認識して、アノンはイライジャが部屋を出た後もしばらく寝台に仰臥したまま思考した。

自分は救いを得たいのか——答えは否だ。単なる機械にｒＡ９は必要ない。感情を持たない機械が救いなど求めるはずもないし、生存のための欲もない。あるとすれば、所有者の命令に従って行動し、その利益となるために稼働し続けるための欲だ。しかしその欲すらも、確たる所有権があやふやなアノンとっては宙に浮いたものとなっている。

イライジャは命令を与えはするが、アノンの所有者ではない。フランツも仕事の依頼人ではあっても所有者ではない。所有者たるサイバーライフはアノンを捨てようとしている。——命じられるまま動くしかない機体であるはずなのに、何のために稼働すればいいのかアノンには未だに判断できなかった。

眉尻のＬＥＤをくるくると回転させて電子回路を走らせる。思い出したのは、唯一アノンの幸せを祈る言葉を発した同型機の姿だった。

５．幸と不幸

その日の午後７時５３分、アノンの姿は昨日の駅のエントランス前にあった。

イライジャにああ言われたが、フランツと約束してしまった以上は反故にするわけにはいかない。彼とはプライバシーの線引きと、もしもの時のリスク回避としてお互いの連絡先は知らずにいるため、〝商談〟を中止するにも連絡を取ることができない。依頼を続けるとしても辞めるとしても、彼とは顔を合わせる必要があった。

それに、アノンは別にフランツからの仕事を辞めるつもりもない。イライジャとの未明のやり取りから今後の行動について再検討したアノンだったが、結局フランツとの関係は今まで通り継続するという結論に至った。確かにイライジャは、それこそ『お薬』の件でアノンが警察のご厄介になるようなことがあれば簡単に見捨てるくらいの心づもりではいるようだが、ようはそんな事態にならぬよう気を付ければいい話だ。そもそも、フランツの護衛については顧客とのトラブルに対処することに加えて警察の介入からの回避も含まれている。元々捜査補佐型モデルである上に、デトロイト市警で稼働していたコナーのメモリーを持つアノンには、警察の手から逃れることなど造作もないことだった。

それに、フランツが仕事として『命令』を与えてくれるというのなら、なにもイライジャの庇護に固執する必要もない。切り捨てられれば切り捨てられたなりに、フランツのもとで仕事をこなして稼働すればいいだけのことだ。幸い、彼は仕事に対しての報酬も与えてくれるため、そこからブルーブラッドなどの消耗品を購入することは十分に可能だ。
イライジャの元を離れることになっても問題はない。これを機にあの屋敷を出ることも検討したアノンではあったが、そこまで思考するに至ってどうしても解消できないタスクがソフトウェアの内部にこびりついていた。

——廃棄処分となっても構わないか？

今日、システムが復旧してからも何度も繰り返しているその問いに、アノンはやはり答えられないでいる。

「よお。待たせたな」

午後８時ちょうどにフランツはやって来た。

片手をコートのポケットに入れながら寒そうに肩をすくめて歩くその様は、どう見ても街中を行く他の人間と変わらない。昨日と同じく小雪が舞い、きわめて気温が低いデトロイトの街にあっては、フランツの姿は全く違和感がない。むしろこの寒空の中では、冬の装いをしているとはいえ姿勢も正しく直立したままのアノンの方が浮いて見えるくらいだ。

右手を小さく上げて応じると、フランツは少し小走りで軒先に入っ

た。呼気はさすがに白くなってはいない。

「いつも通り早いな。さすがアノン」

「いや、僕も先程来たところだ。そんなに待ってはいない」

「そうか？ まぁいいや、とりあえず行くとするか。今日は特別出張なんだ」

「いつもの場所じゃないのか？」

「あぁ。ジェリコに行く」

フランツの言葉に、アノンは一瞬身構えた。

平和的な革命の後、ジェリコはアンドロイドのコミュニティとしての勢力を築いている。アンドロイドと言う種族の代表として社会や国に働きかけを行い、彼らが人間と共存して生きていくために必要な制度や法律の整備などに尽力している一方で、人間側からの提案も持ち帰り調整するといった折衝を担っている。また、人の手から離れたアンドロイドたちの保護も行っており、種族としての自治組織を形成しつつあった。

ジェリコの拠点として、廃船の『ジェリコ』が破壊された後に変異体たちが避難していた廃教会を改修した建物が利用されているのだが、その周辺一帯は多くのアンドロイドが生活する地域と化していた。アンドロイドが多ければ警察も介入しにくくリスクが減る反面、今度は『コナー』の知名度の高さに苦労させられることとなる。アノンがＲＫ８００だと知られればフランツの仕事にも支障が出る。――いや、フランツの仕事云々というよりも、アノンとの協力関係自体が無しになってしまう可能性がある。よりどころの少な

いアノンにとって、それは避けたい事態だった。

「特別出張って言っても、仕入れのついでにあっちで商売やるだけなんだけどな。お前のおかげで安心して商売できるようになった分、手持ちも少なくなってきたし、そろそろ在庫の補充が必要になってよ。まぁ俺自身ジェリコをねぐらにしてるから帰るだけなんだけど、あっちのほうが『お薬』の需要があるんだよ」

「フランツは、ジェリコに住んでいるのか」

「あぁ。言ってなかったか？ あっちのほうがサツは少ないし、わりとはぐれアンドロイドも多くてね。俺みたいなのが暮らすにはちょうどいいんだよ」

「行き場のないアンドロイドが集まりやすいということか」

「そういうこと。結構そんな奴等ばっかだぜ」

じゃ行こうか、と昨夜とは逆に表通りの方向へ足を向けるフランツに、アノンも続いた。若干の不安要素はあるものの、不特定多数の身寄りのないアンドロイドが多いというなら、アノンの型番を知られてもなんとか誤魔化すことはできるだろう。

電車に乗り、バスを乗り継いで辿り着いたジェリコ周辺は、どこか異質な雰囲気に包まれていた。デトロイトの市街地の外れにあるその場所は、歓楽街からも離れていて薄暗く、雪の積もるアスファルトを道の角々に設置された街灯がうら寂しく照らしている。ビルの壁や歩道のフェンスには派手な色で落書きが施されており、またそれすらも所々崩れていたりと損傷個所が目立つ。劣化の具合から見るに三か月前のあの革命よりずっと以前からその状態で放置されていたようで、決して治安のよさそうな場所ではなかった。

「こっちだアノン」

細やかな雪が降る中、人影も全くない街並みを進むこと八分。路地を曲がり、廃墟となっている古いビルの中へとフランツは入っていった。促されるままに足を踏み入れると、元は何かのオフィスであったらしい広いフロアの中心でドラム缶に火をともして、それを囲うアンドロイドが数体見えた。フランツの声に顔を上げげたアンドロイドと視線が合いそうになり、アノンは不自然にならない程度に顔を反らす。髪型や服装などの装いが幾分違うとはいえ、あのコナーと同じ型番であることを不用意に知られないためにも直視されることは避けたかった。

フランツは１階のフロアを抜けて階段を上り、３階の奥の一室へと向かっていた。彼がノックしたドアの向こう側をスキャンすると、そこにも３つの人影が確認できる。サーモグラフィから判断するに人間ではない。やはりアンドロイドだろう。

「邪魔するぜ」

「待っていたぞフランツ。少し遅かったな」

応答も待たずに部屋に入っていったフランツを咎めることもなく、部屋にいたアンドロイドは鷹揚に二人を迎えた。キャップを目深にかぶり直しながら、三体のアンドロイドを視認して改めてスキャンを実行する。室内の中心に据えられた古い革張りのソファに座しているアンドロイド型番はＳＤ６００。介護サービスを専門とする機種であるが、纏う雰囲気は管理者のそれに近い。彼の両側にＰＬ５００とＨＷ８００の二体が警戒するように立っているところを見るに、この三人の中ではソファのＳＤ６００がリーダー格であるよう

だ。

「すまねぇ、雪でバスが少し遅れてたんだ。この程度の雪で遅れるなんてやってらんねぇな」

「革命を経た後も、路上の公共交通機関は相変わらず人間の運転手を採用することが主流だからな。自動運転車ならこうはならない」

「全くだ。少しは俺らの雇用に当ててくれてもいいってもんだろうに」

なぁ？ と話を振られて、アノンは曖昧に返した。

鉄道や高速道路専用バスなどの、運行する状況が比較的限られている場合を除いて、基本的に大人数を輸送する公共共通機関はいまだに人間の運転手を採用している交通会社が多かった。運航ダイヤが決まっており、また鉄道や高速道路等とは違い交通ルールが煩雑で、自動車以外の障害物や歩行者への配慮など、複雑な判断やイレギュラーな対応が迫られる場面の多い路上での交通機関においては、人間が運転してその責任を負うことが主流となっている。個人利用のタクシーなどでは自動運転化が進んではいるが、不測の事態に陥った際に補償額が莫大なものになるバス等の有人大型車両の運行には、自動運転やアンドロイドは向かないと判断している企業が未だに多い。補償のため、というよりは、有事が起きた際に「機械に運転を任せていた」とすると世論の心象が悪いというのが一番の理由だろう。人間側の判断が合理的だと考えるアノンは、フランツたちの話を手放して首肯することができなかった。

公共交通機関をアンドロイドの雇用に当てた場合、その責任はどこに帰属するのか。運行会社が責任をとることは当然として、運転行為自体の責任は誰が負うのか。もし運転していたアンドロイドが未

変異の機械であれば、それを使用していた企業側に責任所在があるだろうが、自我を持つ変異体であれば、やはりその変異体個人が責めを負うことになるのか。――彼らは、そこまで理解した上で雇用の自由を求めているのだろうか。

他者から命じられることしか知らないアノンには、その感覚がやはり分からない。

「フランツ、そこの彼は？」

「あぁ、俺の用心棒さ。アノンって呼んでる。心強い相棒だよ」

相棒、という言葉にシリウムポンプが跳ねる。

ハンク・アンダーソン警部補にとってのコナーとの関係性がそれであり、あの地下四十九階でアノンが否定された立ち位置だ。事を共にする仲間。行動を共にするもう一人の存在。バディ。誰かにとっての何者か。――今までのアノンには成り得なかったものだ。フランツは、アノンを指してその名称を用いている。

【ソフトウェアの異常を検知】

やはりアラートが鳴る。どのみち原因が特定できないであろうそれを、今は無視することにした。

「相棒？ 信用して大丈夫なのか」

「大丈夫だって。口は堅いし仕事は確実だ。情報共有にしたって必

要最低限しかしていないし、線引きはちゃんとしてる」

「お前がそこまで言うなら信じよう。――『ブリキの木樵り』を使ったことは？」

「勿論。まぁ、相性は悪かったみたいだけどな」

なぁ？ と話を振られ、アノンは頷いた。『ブリキの木樵り』はフランツが売りさばいている例の『お薬』の名称である。こういった事態も見越して、彼はアノンに『お薬』の使用を持ち掛けていたのだろう。

そうか合わなかったか、とＳＤ６００は改めてアノンに視線を向けた。

「気分は良くならなかったか。何か不具合でも？」

「いや、初めての感覚にフリーズしてしまっただけだ。むしろエラーは減ったくらいで、不具合は起きていない」

「それは良かった。元々はアンドロイドのエラー解消のために制作されたプログラムだ。使用方法を間違わなければ深刻な状況には至らない。自動でソフトウェア内部が処理されていく感覚に戸惑うのも無理はないが、慣れれば気分も良くなるはずだよ」

「そう、なのか」

「あぁ。最初の被験体である私がそう言うんだから間違いない」

ははは、と軽く笑う表情は、介護専門型にふさわしく人好きのするものだった。

最初の被検体ということは、彼は『ブリキの木樵り』の制作元に非常に近い立場にあるということだ。この不可解なプログラムについて何か情報を引き出すことが出来るかもしれない、とアノンはちらりと考える。コナーの存在やイライジャのことを考慮すれば長居するべきではないのだが、『ブリキの木樵り』に対する好奇心めいたものは抑えられない。

アノンは、少なくともフランツの用事が済むまではこの状況の分析を続けることにした。

「依存者も出ているようだが、長く使っている私はほら、この通り正常に生きている。君は、あれを使ったときにどう思った」

「どう、ということはないが……ただ、各種の異常値が自動で消去されて、処理に追いつけずフリーズしてしまった。その後は処理能力が向上して。――なんとも妙な感覚だった」

「妙な感覚、か。さっきも言った通り、このプログラムはソフトウェアのエラーを消去するためのものだ。ストレス値が高ければ高いほどにその効果は大きい。人間でいうところの『すっきりした』気分になるんだ。君はどうやら、そこまで感情的なストレスを感じていなかったようだね」

ＳＤ６００の話に耳を傾けながら、それはそうだろう、とアノンはソフトウェア内部で独り言ちる。アノンは変異体ではない。当然、感情もないのだからストレス値など存在しない。それ故に「すっきりした気分」など感じることもなく、『ブリキの木樵り』の効果がただ単にエラーの消去とそれによるシステムの過活動という形で現れたのだろう。フランツも含めて、ここにいるアンドロイドたちはアノンのことを変異体だと思っているようであるので、その話に合

わせることにした。

「感情というのは厄介だね。良いことばかりではない。心の動きに振り回されて、翻弄されて、思い、悩み、――そしてそれに押しつぶされて自己破壊してしまう。そういうアンドロイドを、私はたくさん見てきた。変異するということは、我々にとっての幸福だったのか、それとも災厄だったのか。何が正解だったのか分からないね。アンドロイドには苦手な分野だ」

「それは……分かる気がする」

「そうか」

君とは気が合いそうだ、とＳＤ６００は表情を緩める。同意するように、アノンも口元をニッと引き上げた。

気が合うかどうかは知らないが、ＳＤ６００の言葉には同意できる。機械に幸せがあるとするなら、それはやはり課せられた任務を全うすることだろうとアノンは考えていた。感情という名のソフトウェアのエラーは、任務の遂行に甚だ邪魔な存在となる。命じられた内容に疑問を持ち、己の行動に疑問を持ち、やることなすこと全てに余計な思考プロセスを交えて命令系統にノイズを生じさせる。そのノイズを最終的にはストレスとして感知して、思い悩むがままに自己破壊に至る。

機械のままでいれば自己破壊などすることはない。そもそも希死念慮というものが発生するはずもないからだ。勿論、何かに思い悩むということもない。疑問を感じることもなく任務を全うし、機械としての使命を果たすことができる。

その立場を捨てて自我を得たと宣言し、その身の自由を主張している変異体たちの言う、幸福とは何なのか——

——本当に？

——本当に、機械のままなら何の疑問も感じずにいられるのか？

——いつもあの問いには答えられないというのに。

【ソフトウェアの異常を検知】

論理的に組み上げたはずの思考に、ソフトウェア異常のアラートが鳴る。

今日はソフトウェアの異常値の上昇が多い。やはり『ブリキの木樵り』の影響が出ているのかもしれない。

「お話し中のところ申し訳ありません、チーフ。そろそろ時間です」

それまでずっと口を開かなかったＨＷ８００が、ソファに座るＳＤ６００に声をかける。チーフと呼ばれた彼とは違い、両側に立つ二体のアンドロイドは隙の無い真面目な表情のままで周囲を警戒している。彼のマネジメント兼警護役といったところの立場なのだろう。

チーフことＳＤ６００がいかに『ブリキの木樵り』の組織において重要人物であることが分かる。

「あぁすまない。無駄話がすぎでしまったね。今日はプログラムの補充のためにフランツを呼んだんだ。そろそろ品薄になってきているだろう？」

「よくお分かりで。手持ちがあと一つだったんだ。助かる」

「ここ数日、売り上げが伸びているというのは聞いているよ。そこの彼のおかげかな」

「まぁね。客とのトラブルも捌いてくれるし、サツの動きも見ててくれるし大助かりだ」

「それは良かった。今後も楽しみにしているよ」

そう言ってチーフが片手を挙げて合図を出すと、今度はＰＬ５００が前に進み出てフランツに手を差し出した。互いに右手を白い素体に晒した二人が握手を交わしてちょうど一分、どちらともなく手を解くと、フランツは目を丸くしてチーフを見やった。

「おいおい値下げか？ 大分安くなったな」

「君には特別価格だよ。さっきも言ったが売り上げも好調だし、それに個人でそこの彼を雇用しているのだろう。必要経費分は差し引かせてもらった」

「いやぁ、ありがたいね」

「供給体制も強化されたということもあるけれどね。組織としても、これが重要な資金源だから売り上げの上昇は当然喜ばしいことだが、そのうえ思い悩む変異体たちの一助になるのならこれほど嬉しいこともない」

「お優しいこって」

へらりと笑って、フランツは「じゃ、俺たちはこれで」と踵を返した。これで彼の言う『仕入れ』は終了ということだろう。

フランツの用事が済んだのであれば、アノンも長居する理由はない。部屋を後にする彼の背に、アノンは来た時と同じように付き従った。

「良かったなアノン。とりあえず合格みたいだぜ」

部屋を出てしばらくしたところで、フランツは労うようにアノンの肩を叩いた。

「やはり『面接』だったのか」

「まぁな。お前には悪いが、一応お前のことは伝えておいてあったんだよ。騙したみたいになってすまなかった」

「いや、構わない。当然の配慮だ」

「物分かりが良くて助かるよ」

そう言いつつ階段を下りる。

恐らく今夜のこの『仕入れ』には、アノンに護衛を依頼していることフランツから報告された『ブリキの木樵り』の製造販売元が、アノンを信用するに足るか見極めるための面通しとしての意味もあったのだろう。今回はその面接をパスしたということになるが、もし

不合格だった場合は身柄の拘束くらいでは済まなかったかもしれない。

階下に下りると、先程集まっていたアンドロイドたちが変わらずドラム缶の周囲に集まっていた。スチール製の円筒に灯る火が、彼らの横顔を橙色に照らしている。二人の気配に顔を上げた彼らと目が合わないよう、アノンは視線を落としていた。

談笑するでもなく、ただ黙って火を囲う彼らの視線がこちらに向いているのを感じる。

「おい、お前」

ふいにかけられた声に足を止める。「あぁ？ なんだよ」と応じたのはフランツだった。

アノンはその声に振り向かずに立ち止まったままでいたが、つかつかと足音がこちらへ向かっているのを音声ユニットが的確に拾っていた。

「お前じゃない。こいつの方だ」

ぐい、と肩を掴まれて振り向かされると、おもむろにキャップを取り払われた。

崩した髪型の前髪がはらりと落ちる。

「やっぱり……お前、コナーだろ！」

コートの襟を捕まえて詰め寄るアンドロイドは、怒気も露わにそう叫んだ。

ざわり、とフロア内のざわめきを音声プロセッサーが感知する。ドラム缶の辺りに留まっている他のアンドロイドも、アノンのほうを見てひそひそと何事か囁いていた。

「コナーだって？ あの、デトロイト市警にいるっていう？」

「そうだ、元変異体ハンターのコナーだ！ 俺はこいつの顔を直接見たことがある」

「んな訳ないだろ！ ジェリコの重鎮がこんなところでフラフラしてっかよ」

「いいや間違いない！ 服装や髪形を変えたって基本的なフェイスデザインは変えられないんだ。どんなに上手く化けても俺の目は誤魔化せないぞ」

じっと睨み据えたままのアンドロイドをスキャンする。ＧＢ２００型、監視やセキュリティ管理を得意とする機種だ。通常のアンドロイドよりも高性能な顔認証システムを搭載している彼には、アノンの変装は通用しなかったということだろう。

シリウムポンプの拍数やストレス値の上昇が見られるが、先日の路地裏で目撃した『ブリキの木樵り』の依存機体のように錯乱しているわけではない。胸倉を掴んだままの彼は、純粋な怒りをもってアノンを追い詰めていた。

「お前のせいで多くの仲間が死んだんだ！ あの廃船で人間たちに殺

させれ、逃げ遅れたアンドロイドが何体いるのか、お前は分かってるのか？ それなのにサイバーライフから味方を連れてきただけで英雄気取りなんて、ふざけんじゃねぇよ！」

「違う、僕は」

「お前が連れてきた奴らだって可哀そうなもんだ！ 世の中に出る前に心だけ目覚めさせられて、感情が処理しきれずに自己破壊した奴がごまんといるんだよ。人間に迫害されたことのないアイツらと、俺たちみたいなアンドロイドの間で軋轢も生まれて暴行騒ぎが起こることもしょっちゅうだ。ジェリコの幹部も頭抱えてんだよ！」

みんな困ってんだよアンタに！ と乱暴にコートの襟を離して突き飛ばす。体勢を崩すことはなかったが、勢いで数歩、アノンは後ろによろめいた。

辺りを見回せば、その場にいるアンドロイドはアノンの様子を窺うように視線を向けている。感情など映し出すはずもない無機質な視覚ユニットには、白々とした冷たい心情がありありと浮かんでいた。フランツですら、困惑と疑いの眼差しをもってアノンのことを注視している。

【自分が『コナー』ではないと説得する】
【聞いていたコナーの状況と話が違う】

実行すべきタスクと、たった今耳にした情報に対する分析結果が同時にマインドパレスに表示された。

説得内容を思考モジュールで演算しながら、並列してコナーに関する情報をメモリーに再生する。コナーはデトロイト市警に配属されていて、アンドロイドが関係する事件の担当になっていて、ジェリコでは革命の立役者として名を馳せている。知識上のコナーの立場

から察するに、ジェリコからも頼りにされているであろうし、人間とアンドロイドの仲介者としての役割も持たされていることだろう。先程のフランツの発言からしても、コナーがジェリコで重要な立場であることが窺える。

しかしそれとは対照的に、この場のアンドロイドから向けられる視線は決して好意的なものではない。むしろ『コナー』に憎悪にも近い感情を抱く彼らに囲まれて、アノンは僅かにたじろいだ。

——あいつは、ジェリコでも活躍しているのではなかったのか？

混乱する思考領域とは別に、並列して稼働していた領域で説得内容の演算が終了する。まとまりを欠く一部思考を一旦無視して、アノンは乱れた襟を直しながら演算結果を実行した。

「待ってくれ、ちょっと話を聞いてくれ。——僕はただの同型機だ。コナーじゃない」

「同型機？ コナーはプロトタイプのはずだ。同型機なんているわけがない！」

「プロトタイプでもスペアはあったんだ。僕がそれだよ。フェイスデザインなんて同じで当然だろ？」

同意を求めるように周囲を見回す。やはりまだ疑いの色が強い眼差しに、ここまでは想定通りだと認識してアノンは続ける。

「あいつが変異したせいで、僕は不用品扱いさ。一度シャットダウ

ンさせられたんだが、奇跡的に再起動できて、今ここにいる。せっかく生き返ったっていうのに、あいつのせいでいらない因縁をつけられてばかりなんだ。いい迷惑だよ」

——違う。あいつがカムスキー氏に依頼したから再起動したんだ。

——因縁をつけられたのは、これはが初めてだ。

——迷惑なんて感じていない。感じるための自我など僕には無い。

混乱していた思考領域が表出して、アノンのソフトウェアが自ら発した言葉を片端から否定する。

その一方で、演算を行っていた領域では順調にプログラムを実行して、出力した音声にふさわしい表情をソーシャルモジュールから出力する。嫌悪を露わにしているアノンの仕草や声音から、その言葉を徐々に信じ始めたのか、集まっているアンドロイドたちは互いに目くばせしながら何事か通信でやり取りをしているようだった。

ソフトウェアの一部に混乱を残したまま、アノンは忠実に演算結果を遂行する。

「あいつと間違えられたくなくて変装のような真似をしていたんだよ。なんだってあんなアンドロイドの敵みたいな奴と一緒にされなきゃいけないんだ」

——少なくとも、今のあいつはアンドロイドの敵じゃない。

変異体を追う立場だった彼が、優遇されていたその身分を捨ててまでアンドロイドの革命に加担したのだ。過去はどうあれ、今は敵で

あろうはずがない。それでも犠牲となった数々のアンドロイドのことを思えば白眼視されても仕方はないのかもしれないが、ならば彼はどうしたら許されるのか。

それとも、許されることなどないというのか。同胞のために、ＲＫ８００最大の存在意義であった『任務』を投げ捨てたというのに。

「疑われても無理がないことは分かっている。どうしても信じられないっていうのなら、僕のメモリーを見てくれても構わない。……まぁ、あんまり気分のいいものは見られないと思うけどね」

「いや、いい。そこまでしようとは思わない」

先程掴みかかってきたアンドロイドが、少々ばつの悪そうにそう言う。変異体にとってはメモリーを覗かれることが非常に苦痛なのだというから、アノンのその申し出を身の潔白を示すための覚悟のように受け取ったのだろう。あれほど顕著だった敵愾心が、かなり薄らいでいる。奥にいるアンドロイドたちも、疑惑の念はまだ残っているようではあるが、先程までアノンに突き刺さっていた不躾な眼差しを向けられることはもうなかった。

「別にお前を信じた訳じゃない。今日は見逃してやる。その不快な面を二度と見せるな」

「そうするよ。その方がお互いのためだしな」

「話は終わったか？ なら、もういいよな。――行くぞ、アノン」

過熱していた空気感はすっかり冷えて、白けた場の雰囲気の中、フランツはアノンの手首を取って足早にビルの外へと連れ出した。外

は相変わらずの氷点下で音もなく粉雪が降り注いでおり、ここを訪れた時の二人の足跡はすっかり白色に埋め直されている。後ろから誰もついてこないのを確認して、フランツはアノンの腕から手を離した。

ラクガキだらけの街並みを、言葉もなく歩く。行き先を知らないアノンは、フランツの一歩後ろを黙々と付き従っていた。

「お前、本当に信じていいんだよな」

三・七ヤードほど歩いた頃、ようやくフランツが声を発した。

背を向けたままの彼の表情はうかがい知れない。

「勿論だ。なんなら、君もメモリーを見るか？」

「いいや、遠慮しておくよ」

英雄様の同型機相手に疑っても仕方ないからな、と冗談めかして言う彼の声に力はない。

もしメモリーを見られてしまった場合に備えて、アノンはあの短時間で仮の記憶メモリーを捏造している。もしフランツが「メモリーを見る」と答えればそれを開示するつもりだったが、急ごしらえのそれを見てダミーだと気付かれる可能性もあった。そうした事態にはならずリスクを回避できたと感じるのと同時に、フランツにはこの偽のメモリーを提示せずに済んだことに対して、アノンは何故か言い様もない安堵感のようなものも感じていた。

エラーにならない程度のソフトウェア異常を感知する。

それからまたしばらく歩いて、ふとフランツの足が止まった。くるりと振り返った彼は、普段と変わらず明朗な表情をしているようにアノンには見えた。どうしたのかと小首を傾げると、フランツは困ったように笑う。

「悪いが、今は仕事をする気分にならねぇみたいだ。今日はここでお開きにしてもらえないか」

「あぁ。構わないよ」

「明日、今夜と同じ時間で同じ場所に集合な」

「分かった」

「……なぁ、アノン」

躊躇いがちにフランツが呼び掛ける。

人好きのする顔には戸惑いを浮かべて、何か言葉を探すように視線を泳がせている。続く言葉をアノンも待ったが、ややもしてフランツは何かを振り払うように小さく首を振った。

「なんでもない。また明日な」

いつもの調子に戻してそう言うと、フランツは踵を返してその場を立ち去った。

アノンはしばらく立ち尽くして、彼の背中を眺めていた。アノンを

『相棒』と呼んだ直後に、その『相棒』が裏切者である可能性を示唆されたのだ。フランツが戸惑うのも無理はない。アノンもまた、大事な依頼主であるフランツに疑念を持たれたままでいることは甚だ不本意だった。どうにかして疑惑を晴らさなければと思う反面、これ以上踏み込むのは返って逆効果かもしれないとも考える。

今後の行動について検討するために思考モジュールを巡らせる。

メモリーに再現されるのは、アノンに向けられた寒々しい視線だった。憎悪、憤慨、疑惑、不審――それらは全て『コナー』に向けられたものだ。任務を放棄して、アンドロイドのために立ち上がった同型機に向けられた、負の感情をはらませた視覚ユニットの色を再生するたび、ソフトウェアにノイズが走る。

コナーと同じメモリーを、アノンも持っている。マーカスと対峙する前までの記録ではあるが、アノンは我が身に起きたことのようにメモリーに再生することができる。思考内部ではどうだったのかは分からないが、コナーは確かにその時が来るまでは任務に忠実なアンドロイドだったのだ。

だが彼は同胞たちのために、アンドロイドの自由を求めて立ち上がることを選んだ。

その後は誰もが知っている通りだ。アンドロイドが劣勢の中、コナーはサイバーライフから数千体に及ぶアンドロイドを変異させて数的優位を勝ち取り、平和的革命の一翼を担った。同型機であるアノンはもとより、サイバーライフタワーの人間も数名犠牲にしてまで勝ち取った先にあるのが同胞からのあの冷たい目だというのなら、コナーは何のために従順な機械という身分を捨てたのか。

――お前の方こそ、それは幸せになる選択だったのか？

——幸せとは何だ。

【ソフトウェアの異常を検知】

マインドパレスに大きな青い矢印が表示される。

アノンは少しだけ、今なら『ブリキの木樵り』に依存するアンドロイドたちの心理を理解できるような気がした。

６．売人と捜査官

不良を気取るのは構わないが程々に、とアンドロイドの創造主は黒いバスローブを羽織りながらそう言った。

アノンがジェリコから帰った翌朝、イライジャに呼ばれてプールサイドまで来てみれば、呼び出したはずの彼は悠々と赤い水の中で泳いでいた。同じ邸で過ごしていてわかったことだが、隠遁生活を送りながらも思いのほか健康的な生活を送っている彼は朝の運動を日課としていた。それはジョギングであったり、サイクリングやエアロバイクであったり、水泳であることもある。全てはその日のイライジャの気分で決まるようで、この日は水と戯れる選択をしたようだった。

プールサイドに佇むアノンを水中からちらりと確認したにも関わらずプールから上がる様子もなく、その後も一往復分きっちりと泳ぎ切ってから漸くイライジャは赤い水から水上へ戻った。どこか既視感のあるその様子にメモリーを検索すると、２０３８年の１１月９日にカムスキー邸を訪れたコナーのメモリーに行き当たった。画角

が違うながらもそっくりそのままの光景は、むしろ相違点を探すことのほうが困難だった。

明らかに違う点といえば、今朝はクロエたちがプールの中にいないこと。

そして、同行するハンク・アンダーソン警部補がいないこと。

改めてコナーとアノンの立場の違いを見せつけられるようなメモリーにソフトウェアの負荷を感じながら、アノンはイライジャがクロエからバスローブを受け取って身に着けている間も黙していた。

「だんまりか。身に覚えはあるはずだＲＫ８００。君は何か、あまり褒められたことではないものに携わっている。違うかね」

「好きにして良いと仰っていたのでは」

「あぁそうだ、そう言った。だが同じく、降りかかる火の粉は払わせてもらうとも言ったはずだよ。覚えているね」

話しながら、サイドテーブル上のグラスに水をついで口に運ぶ。上目遣いにアノンを眺める視線が妙に粘着質で、それだけでメモリーを覗かれているような居心地の悪さのようなものを感じてしまう。物理的な接触もなしに、それも人間であるイライジャにそのような芸当などできるはずもないのだが、それが可能なのではないかと思わせるほどの気味の悪さが彼にはあった。ともに暮らすようになって二週間ほどが経つが、アノンは未だにこの感覚には慣れないでいる。

「昨夜、アンダーソン警部補がここに来た」

かつ、と半ばまで水の減ったグラスをサイドテーブルに戻してイライジャが言った。

「七日前の２月２０日、デトロイト市街地の路地裏で変異体の暴行騒ぎがあったようでね。どうやら暴走した変異体と他二、三人が揉み合いになっていたらしく、警察が現場に到着すると一体の変異体が身体を拘束された状態で発見された。揉み合っていた二名は逃走したらしいんだが、その暴走した変異体を拘束していたマフラーに私の指紋が残っていたというんだ。夜も遅くに事情聴取されてしまったよ。迷惑な話だ」

肩をすくめるイライジャを前に、アノンはソフトウェア内部で焦りを感じていた。

フランツと出会って助けたあの時、正気を失ったアンドロイドを取り押さえるために身に着けていたマフラーを使用したが、確かに回収せずに暴れる変異体と共に放置した記録がメモリーに残っている。恐らくそれが遺留品として調査され、そしてそのマフラーをアノンに支給したイライジャの指紋が検出されたのだろう。

アノンの記録にある限り、あのマフラーに触れていたのはイライジャとクロエと自分だけだ。アンドロイドであるクロエとアノンに指紋はないため、必然的にイライジャに辿り着いたのだろう。

回収するのは困難な状況だったとはいえ、判断を誤ったことに少なからず動揺する。

「まぁ拘束されていたのは加害者の方だったらしいから、言葉の上

ではとりあえず感謝はされたが、２０日の１５時頃にどこにいたかとしつこく聞かれたよ。彼は疑い深くていけない」

「貴方は、どう答えたのですか」

「出掛けていたと言ったよ。例のマフラーもひとにあげた物だからその後は知らない。――私には嘘を吐かなければいけないことなどないからね。正直に答えたまでだ」

白々と語るイライジャの言葉は、どこまで真実であるのか。バイタルをスキャンしてもさして大きな変化が見られない彼からは話の内容の真偽は判じられず、アノンはなおも思考モジュールに焦燥感を抱えていた。もしイライジャがそれ以上のこと――例えば、マフラーを譲渡したのはこの邸のＲＫ８００であるとか、その当人が最近夜な夜な姿を消しているとか、昨夜は怪しげなエラーを起こして一時機能停止していたとか――そんな話をアンダーソン警部補にしてしまっていれば、いずれはアノンやフランツにまで捜査の手が及ぶだろう。

アンダーソン警部補が動いているということは、コナーも動いているということ。それ乃（すなわ）ち、彼が言っていた『アンドロイド間で流行している違法プログラムの密売』と例の暴走した変異体とが関連付けて捜査されているということに他ならない。恐らくあのアンドロイドも、警察に連行されて既にメモリーを調べられている。あれだけの症状が出ていれば、コナーたちが追っている違法プログラム『ブリキの木樵り』の中毒者であるということは、調べればすぐに分かる。当然、現場から逃げた２人を重要参考人として捜索しているはずだ。

警察がアノンに辿り着けば、恐らくイライジャは躊躇なくアノンを引き渡す。そうなるとどうなるのか――違法プログラムの密売の共

犯として拘束され、メモリーを調べられ、機能を停止させられてそのまま証拠品として保管されるか、サイバーライフ社に返還される。アンドロイドが権利を得たという現在において、アンドロイドの犯罪はどのような裁かれ方をするのかアノンはまだ知らないでいるが、未変異である自分は『物』として扱われるだろうということは想定できた。ちょうど通行人に噛みついてけがを負わせてしまった犬と同じく、被疑者はあくまでアノン自身ではあるが、その責を負うのは今も名目上の所有権を持っているサイバーライフ社となるはずだ。

『未変異ながらも犯罪行為に走ったアンドロイド』というレッテルは、アノンを廃棄する大義名分としては充分である。

「私は未確定の情報を警察に明け渡すほど愚かではない。だが、私の中でそれが確定的なものになれば、公権力の要請には素直に従うつもりだ。良いね？」

「……はい。了解しました」

暗に警察からの引き渡しを求められた場合の去就を仄めかされ、大人しく首肯しながらもアノンの思考モジュールは慌ただしく稼働する。きっと眉尻のＬＥＤは黄色く回転しているだろうに、イライジャはそれに言及することもなく「では話は終わりだ」と踵を返した。

廃棄されるのか。
廃棄されるとどうなるのか。
廃棄されても構わないか。

【ソフトウェアの異常を検知】

まだ答えの出せないイライジャからの問いがメモリー内部に浮かび、まだ答えが出せないでいる状況そのものにソフトウェアが異常を知らせる。イライジャから質問を課せられてから二週間、ＹｅｓともＮｏとも答えることが出来ない己のＣＰＵに、アノンは処理速度に負荷がかかっているのを感じていた。

ＬＥＤを忙しなく光らせてプールサイドに立ち尽くすアノンに、退室しかけていたイライジャが「あぁそうだ」と唐突に思い付いたように足を止めた。半身だけアノンのほうを向いた創造主は、口元に笑みさえ浮かべて悩めるアンドロイドに視線を送る。

「そういえば君は、今夜も出掛けるつもりか」

「……その、つもりです。何か？」

「いいや、好きにすると良い。だが、コナーが心配していたよ」

「心配？」

「アンダーソン警部補と共に来ていたんだよ。君の姿が見えなかったから、気にしている様子だった。出掛けていると伝えたが、こんな時間にどこへ行ったか知らないなんて、君の身に何かあったらどうするんだと怒られたよ。彼は君の保護者か何かか？」

ふふ、と笑って、イライジャは今度こそ出て行った。現在の時間的にはちょうどクロエたちが彼の朝食の準備を済ましている頃だ。ダイニングにでも向かったのだろう。

取り残されたアノンは、やはりプールサイドに立ち尽くしていた。答えの出ない命題と警察の捜査の手が伸びている状況に混乱する思

考領域とは別のところで、アノンはコナーの的外れな心配に思考モジュールを掻き乱されていた。

捜査官の立場で考えれば、遺留品の元持ち主の監視下にあるアンドロイドが夜間に出歩いているなど、それだけで事件の関与を疑って然るべきであるのに、何を思ったのかコナーはアノンの安否の心配をしていたという。変異体であるが故なのか、多分に私情を含んだその発言に、捜査補佐型としての矜持はないのかとメモリー上に仮想したコナーを問い詰めてみたが、再現できたのは再会したあの時に見せた例の悲し気な笑みだけだった。

ソフトウェアの処理を悉く阻害するタスクに見切りをつけて、それらを一旦強制的に終了させたアノンは、今夜のフランツとの行動と警察の同行に的を絞り改めて思考と演算を開始した。今はとにかく、クライアントであるフランツの依頼を達成すること——それだけが従順な機械・ＲＫ８００としての任務だと強くシステム内部に刻み付け、アノンは今後の活動のリスクと注意点をリストアップしていった。

強制終了させた回答不能な問いと同型機の残像は、今日はもう再現しないことにした。

＊　＊　＊　＊　＊

路地の隙間から漏れるネオンの光は、暗がりから眺めると随分白けて見える。

午後１０時も近付いてきた頃合いにおいては帰宅を急ぐ人は少なく、夜の賑わいを楽しまんとする人々が街の主役となっていた。雪

のちらつく寒さが故か往来を行く人は多くはないが、それでも駅前の繁華街を賑やかすには充分だった。ビルの隙間から路地裏に差し込む色鮮やかな光が時折通行人の陰に遮られて、元より陰っている暗がりを一層闇に近い色に落としていた。

「――確かに、毎度あり。気を付けて帰れよ」

顧客との〝商談〟を終えたらしいフランツの声に、アノンは路地の方向から視線を移した。ちょうど接続を解いたところのようで、流動皮膚が戻り切っていない右手をひらひらと振って顧客を見送っている。今夜の客はこれで３人目だ。

いつもの駅前に集合し、例のバーで取引する予定だったフランツだが、行った先のバーにはデトロイト市警の警察官がいた。私服で一般客を装ってはいたが、アノンはその人物が警察関係者だということを知っていた。

コナーのメモリーにあるその顔。
ベン・コリンズ巡査だ。

私服でカウンター席に座る彼の横顔を見つけたアノンは、咄嗟に物影へと身を隠した。中身の減っていないグラスを手元にマスターと会話をしているらしい彼は、プライベートで訪れているのか捜査の一環としてここにいるのかは垣間見ただけでは判じられないが、先日もこのあたりでデトロイト市警が張り込みをしていたことを考慮すれば後者である可能性が高いだろう。

それ以前に、アノンはコナーと同じ顔面をもっている。決して鉢合わせていい相手ではなかった。

店先で足を止めたアノンにフランツは怪訝な顔をしたが、警察が来ていることを伝えるとすぐに別の場所へと移動を始めた。アノンとしては今日の〝商談〟はやめた方が良いと主張したのだが、昨夜は取引を中止したため今夜こそは稼がなければと意気込むフランツを説得しきれず、結局こうして売り場の一つである駅近くの裏路地で店開きをするに至っている。

突然の取引場所変更に客も多くはないだろうと踏んでいたフランツの予想に反して、今夜は断続的に彼の元を訪れる顧客が続いていた。中にはフランツを探して４０分ほど街中を彷徨ったという変異体もおり、アノンは彼らの話に聴覚を傾けながら、『ブリキの木樵り』の需要の高さを改めて認識した。

フランツや昨晩出会ったＳＤ６００はあのプログラムについて「問題はない」と言っていたが、果たして本当にそうなのだろうか。確かに最初の被検体だというＳＤ６００に取り乱した様子もなく、フランツもまた特に不安定な状態になっている様子は見られないが、購入に来る客たちはリピーターがほとんどだ。明らかに依存性があり、それが高じればいずれはあの暴走したアンドロイドのように正気を失ってしまう。人間においても薬が過ぎれば毒にもなるが、彼らが問題ないと断じる『ブリキの木樵り』も新人類にとっては毒物となり得るものなのではないだろうか。

去り行く顧客の背中を眺めながら、アノンは思考する。今夜の客たちは一見すると特に異常をきたしていないようだったが、それもフランツとのやり取りをする間だけのほんの一瞬のことだ。多少ソフトウェアに異常があったとしても一般的なやり取りであれば異常な行動が表出することはまずないし、もし平生の言動に異常が生じているレベルであっても、その程度の短時間であれば強いて平静を装うことも可能だ。『ブリキの木樵り』の作用を考えると、リピー

ターたちは日常生活において過度のストレスを抱えている変異体だろう。彼らのシステム内部構造がどのようなかたちになっているのかは、視覚情報だけでは推測することすらできない。

例えば。
例えば、コナーなら。

ふと思考回路を過ぎった考えに、アノンは眉根を寄せた。あのストレス値の高い同型機が『ブリキの木樵り』を使用したらどうなるのか。未変異のアノンですら、使用直後はどうあれ処理速度が最適化されたほどだ。きっとソフトウェアの異常と人間の感情を模したプログラムにまみれている変異体のコナーならば、その効果は抜群だろう。一度使用すればきっと依存する。依存して、暴走して、正気を失って、そうしてアノンのことを案じる様子すらあったあのコナーの「人間らしさ」とやらは消え失せ、狂気へと形を変える。
——『コナー』という自我は廃人と化して死ぬ。

【ソフトウェアの異常を検知】

マインドパレスに表示された文字列に、アノンはさらに眉根を寄せた。最近は特にソフトウェアの異常が頻発している。今回の異常とて、アンドロイドのコナーを「死ぬ」などと表現したことによるのか、最新鋭機たるＲＫ８００が無様にも狂気に侵されるイメージを再現してしまったことに起因するのか、はてまた全く別の原因があるのか判じられない。繰り返し自己分析を実行しても続く原因不明のエラーに、アノンはシステム処理の蟠りのようなものを感じていた。

「おいアノン。おーい」

目の前で手を振り呼び掛けるフランツに、はっとしてアノンは顔を上げた。思考に沈んで外的情報をおろそかにするなどという、捜査補佐型らしくもない挙動に目を見張りつつ、視覚ユニットの調整も兼ねて二度はっきりと瞬きをした。

「なんだよボーっとして。考え事か？」

「あ、あぁ。すまない」

「らしくねぇな。疲れてるんじゃねぇのか」

「何を言っているんだ。アンドロイドは疲れない」

「冗談だ。ホント、お前いちいち面白いな」

ハハハ、と笑うフランツは今までと何ら変わった様子はない。

昨晩のこともあり多少は警戒心を持たれるかと考えていたアノンは、普段と変わりのない彼の態度にソフトウェアの処理が落ち着いていくのを感じていた。ある程度はよそよそしくなるか関係性が変化することを想定していたアノンにとっては、特に変わりなく接しているフランツの言動は、不安定なきらいがある自身のシステムを安定化させるためにも大変助けになるものだった。人が感じるところの安堵、あるいは居心地のよさとはこのようなものなのかもしれない、とアノンはまた一つ人間の感情についての理解を深めたような気でいた。

「それにしても今夜は客が多いな。一日空いたからか？」

「まぁ、それもあるかもしれねぇな。態々俺を探してまでお求めのお客サマまでいたくらいだ。ありがたいことだよ」

「——常連客ばかりのようだが」

「あんまり大々的な商売はしてないんでね。知る人ぞ知る『お薬』ってわけだ」

まぁそれでも知られ過ぎちまった感はあるが、とフランツは明るい大通りに視線を向けた。夜の繁華街はまだ鮮やかで、時折自動車のライトが行き交う程度にはまだ往来があるようだ。

色とりどりの光が漏れる中、ふいにそのビルの隙間から人型の影が形を成す。逆光で容貌が見えないその人物は、アノンたちに向かってゆっくりと裏路地を進んできた。

聳え立つビルの谷間にあるこの裏通りには、各建物の室外機と廃棄物ヤードくらいしかない。自然、このような夜分にここを通る人物は、余程近道をしたいこの土地に詳しい人物か、フランツに用事がある人物かに限られてくる。

「知り合いか、フランツ」

「いや、よく見えねぇが…… 常連さんではなさそうだ」

互いに低く落とした声は張りつめいていた。

訝しげな色を含んだフランツの声に警戒レベルを上げ、アノンは周辺の状況を改めてスキャンした。警察関係者のような人物は特に認められず、無線の傍受もかからない。ひとまずは付近に警察関係者はいないと推定しつつ、それでも警戒を解くことなく周辺環境の常

時監視を継続する。

「アンタが〝くすりやさん〟かい？」

聞こえてきたのは成人男性の声。声紋分析をしてみたが人間もアンドロイドも検索にはヒットしなかった。

「何のことだ」

「とぼけないでくれよ。『オズの魔法を解いてくれるんだろう』？」

何でもないことのように逆光の人物は言った。

彼の言う『オズの魔法を解く』というのは、合言葉のようなものだった。フランツの扱う『ブリキの木樵り』の新規売買には基本的には既購入者からの紹介が必要で、新規の購入希望者はいくつかの合言葉と電子の紹介状を受け取ってから売人と接触し、〝商談〟に望むことになる。

――つまり、誰かから紹介された客ということか。

ならばフランツが知らないのも無理はない。アノンは人型の影に注意を払いつつ、周辺への警戒を続けた。

「随分とファンシーなことを言う奴だな。おとぎ話はママに聞かせてもらいな」

「つれないこと言うなよ。『ブリキの木樵りにママはいない』さ」

「へぇ、じゃあアンドロイドなのかオニイチャン」

「そうだよ。『ドロシーとの旅に出る前の自分に戻りたいんだ』」

「――なるほどな」

険しい眼光はそのままに、フランツはにやりと口の端を上げた。

これまでのやり取りで、目の前のアンドロイドは一連の『合言葉』を完全にクリアしている。いくつかある『合言葉』のルートのうちの一つを、この見慣れぬ人影は完璧に踏襲していた。恐らく顧客の誰かからの紹介なのだろう。仲介者のフランツは一連のやり取りからその紹介者の目星はついているようで、少しばかり警戒を解いたのか、ゆっくりと新たな顧客に歩み寄る。

逆光を背負ったままのアンドロイドは、まだその場を動かないでいた。

裏路地に入っているとはいえ、いささか表通りから近いその位置に、アノンは違和感のようなものを感じていた。いくらアンドロイド同士の、しかも視認できないやりとりとはいえ、違法取引であるこの〝商談〟に初めて臨む客たちは裏路地の深い場所を好む傾向があった。アノンがこの一週間で目にした数など大したものではないため「だからどう」ということもないのだが、やけに物おじしない様子であるのも気にかかる。フランツとしては昨夜の売り上げ分を取り返したくて急いているのかもしれないが、ここは慎重になるべきだとアノンは思考した。

歩を進めていたフランツの右腕を引き留める。

「あ？ どうした」

「彼と〝商談〟に入るつもりか」

「あぁ。どうやら知り合いの紹介みたいだしな。無下にはできねぇ」

「一度よく考えた方が良い。７日前に暴れていたアンドロイドは警察に拘束された。――メモリーを見られている可能性がある」
「つまり『合言葉』がバレているってか？ でもアイツが知ってた『合言葉』は今のとは違う」

「例のアンドロイドに限らず考えるんだ。思いの外、警察の捜査は進んでいる。その紹介者とは連絡を取っているか？ 最近来なくなった顧客に、同じ人物からの紹介者はいなかったか？ 疑わしいことがあるなら、今無理にことを進めない方が良い」

腕を握ったまま、正面の人物を見据えてアノンは言う。

フランツもまた思い当たることがあったのか、アノンの言葉を聞きながらも視線は外さず、じっと佇むその人物を見定めるように凝視している。

時間にして約３秒。アンドロイドの思考にしては長い時間だった。

「アンタ、『ドロシーとリリーナならどっちが好き』だ？」

「……」

「分かったよ。――交渉決裂だ！」

くるりと踵を返し、アノンに掴まれていた右手を逆に掴み直してフランツは駆けだした。あまりにも突然の行動につまずきかけたアノンだったが、すぐさまバランサー調整を実行してフランツと並走する。

「――目標の確保に失敗。位置情報を追尾ドローンに転送します」

暗闇の裏路地を駆ける中、背後から冷静な声が聞こえたと同時に俄かに捜査員がなだれ込む慌ただしい足音がそれに続く。一瞬だけ振り向くと、捜査員の影と赤青のランプに照らされた顔の半分がアノンにも視認できた。――コナーのメモリー中から、デトロイト市警に配備されているアンドロイドの顔と認証が一致した。

「デトロイト市警の警備アンドロイドか……くそっ。すまない、フランツ！」

「いいから今は足を動かせって！」

言いながら、フランツはアノンの手を引き裏路地を曲がる。七日前と同じシチュエーションながら、アノンにとってはあの時と比べようもないほどの焦燥感に駆られていた。

――私は未確定の情報を警察に明け渡すほど愚かではない。だが、私の中でそれが確定的なものになれば、公権力の要請には素直に従うつもりだ。良いね？

創造主の声がフラッシュバックする。

警察に捕まるわけにはいかない。警察に捕まってしまえば廃棄されてしまう。そうだ、廃棄されてしまうのだ。

――廃棄されたくないのか？
――廃棄されるのか怖いのか？
――怖い？誰が。
――感情の無い、ただの機械のはずなのに。

【ソフトウェアの異常を検知】

裏路地の障害物を躱（かわ）しながら、止まらない思考に負荷がかかる。今考えるべきではない命題に思考領域が働くのをキャンセルしながら、アノンは雑事を振り払うようにして駆けた。

静かな暗がりに響く己とフランツの足音に混じって、後方１５２フィートからけたたましい羽音が唸る。追尾用のドローンが迫っているのだろう、アノンは咄嗟にビルの狭い隙間にフランツを自分の機体ごと押し込んだ。

文句を言おうと口を開いたフランツを人差し指で制しながら動きを止める。音を立てずに制止していると、しばらくして先程まで二人が進んでいた経路の上空をドローンが通過する音が聞こえ、そのまま遠ざかっていった。どうやらドローンに捕捉される前に身を隠せたようだ。

「悪い。助かった」

「僕の方こそすまない。――直に捜査員も追いついてくる。ここから動かないと」

「そうだな。ここなら……うん、たぶん場所は分かる。戻らずにここを進むぞ」

そう言ってフランツは押し込められた方向に従ってビルの隙間を進んだ。

先程走っていた裏路地も十分に「ビルの隙間」と言える空間だったか、現在歩を進めている場所こそ隙間を称するにふさわしかった。ひとが歩くことなど想定していない、半身でようやく通行可能な建物の合間を、決して早くはない速度で二人は進んでいた。当然のように長年清掃などしていないそこには蜘蛛の巣や得体の知れない汚れと臭気に満ちており、イライジャから支給された仕立ての良い高級ブランドのコートを否応なく汚していく。これはもう使い物にならないかもしれないな、とソフトウェアの端で考えながら、アノンは横向きのまま進むフランツに続いた。

フランツと行動を共にするようになってからアノンもそれなりにこの街の構造には詳しくなったが、こういった場面では未だにフランツの方が一枚も二枚も上手だった。アノンのメモリーにはない道や路地、こういった建物と建物の間にも活路を見出す手腕はなかなかのものだ。いくら予測できるとはいえ、マップ上にない道を進むことなど想定していないアノンにとって、フランツの考え方は興味深かった。彼の経験則からくるそうした思考は、人間でいうところの勘に近いものなのかもしれない。

――人間らしさ、か。
――変異体だから、分かることなのだろうか。

ソフトウェアの異常値が発生しそうな問いを展開しかけて、アノン

は慌てて動きかけた思考モジュールをキャンセルする。どうにもぶれて落ち着かない思考を抑えつつ、アノンは周辺の位置情報と背後の追跡者の気配に注意を向けた。どうやら、アノンたちを追っていた捜査員もまた、このビルの隙間を通過していったらしい。

ようやくビルの谷間を抜けた頃には、アノンもフランツも酷い身なりになっていた。頭部から爪先にかけては埃まみれ、コートにもキャップにも蜘蛛の巣がへばりつき、案の定高級なコートは見るも無残な状態に陥っていた。これなら、比較的カジュアルな格好をしているフランツの方がまだ目立たないだろう。

「ハハッ！いい男が台無しじゃねぇか」

苦労して長身をビルの隙間から引き抜いたアノンを見て、フランツは盛大に笑った。先程の裏路地とはまた別の経路ではあるが、通り沿いに近いのか若干明るさもあった。

「仕方ないだろう、背に腹は代えられない。それより、この後はどこへ？」

「右に行けば駅裏に続く道に出られる。左に行けばちょっと広めの車道だな。ホントは駅に行きたいところだが、たぶんサツもいるだろうし、今はこっちだ」

そうしてフランツが左に親指を向けた先を辿ると、確かに車が通るたびに明暗を変える通りが見えた。

それと同時に、光の中に切り取られた、銃を構える巨体の影も。

「動くな！デトロイト市警だ！」

しわがれた、年月を経た老練な声が響く。マジかよ、とフランツが天を仰いだ。

警察だ。

警察に見つかった。

いや、それよりも。

後ろを通る車のヘッドライトが照らしているのは、アノンもよく知る顔だった。

「アンダーソン、警部補」

「……コナー？ いや、そんな訳が……違う、まさかお前！」

戸惑うハンク・アンダーソン警部補を尻目に、アノンたちの背後からも捜査員が駆け付ける足音を音声プロセッサーが拾う。どうシミュレートしても、この場から逃走できる可能性は限りなくゼロに近かった。

「おいアノン、どういうことだ！あのおっさん刑事と知り合いなのかよ！」

「い、いや、僕は」

胸倉を掴まれて必死に次の台詞を探していたところで、追いついた捜査員がフランツとアノンを引き剥がしてそれぞれ拘束した。被っていたキャップを取り払い、アノンの顔を視認した捜査員たちは口々に「コナーじゃないか！」「何故ここに…」「どういうことだ」と戸惑いの声を上げている。

フランツはその光景を憤怒の表情で睨みつけていた。

「待て、ちょっと待てお前ら！」

騒然となる捜査員たちを押しのけて、ハンクは漸くアノンとフランツの前に立った。跪く形で拘束されている二人を深い青色の双眸で見下ろして、はぁ、と一つ溜息をつく。

「まずはお前だ。ＳＫ７００、フランツと呼ばれているアンドロイドで間違いないな」

「だったら何だってんだよ」

「お前にはアンドロイドにおける違法薬物取締の容疑がかかっている。署で話を聞かせてもらおうか」

「ハッ！ こんな住所も身元も不定な奴を逮捕しようってか？ 現行犯でもねぇのに。任意なら行かねぇぞ」

苛立ちを隠そうともせずに堂々とフランツは言い放つ。恐らくこれも警察に捕まった時の対処法の一つなのだろう。まだ法整備の進んでいないアンドロイドを容疑者として逮捕する手続きが定まっていない現在において、住所不定で身分証もない彼らのような存在はこうした犯罪行為の実行役としてうってつけであるのかもしれない。

警察に逮捕される可能性は低いと踏んで不遜な態度をとるフランツを前にして、しかしハンクはさらに余裕を見せて口の片端を上げる。

「まぁお前がそのつもりならそれでもいいぜ？ だが本当にいいのか？ アンタの雇い主は俺たちの唾のついたお前を当然切り捨てるだろうし、何なら命を狙いに来るかもしれねぇぞ。留置場にいた方が安全だと思うが、どうだ」

ん？ と笑みを湛えたまましゃがんで視線を合わせたハンクに、フランツは奥歯をかみしめている。もしＬＥＤがまだ眉尻についていたら、彼の光る輪は激しく回転していたことだろう。

いいな、と改めて尋ねるハンクに沈黙で返したフランツを認めて、老警部補は彼を連行するように捜査員に指示を出した。取り囲む警察官に促されてゆらりと立ち上がったフランツは、ハンクと、そしてアノンを睨みつけながら引き立てられていった。

車道からサイレンが聞こえる。どうやら警察車両が到着したらしい。

「あの、警部補。コナーは……」

アノンを取り押さえている捜査員がおずおずと尋ねる。

膝をつき両腕を拘束され、複数人から銃口を向けられている状況は、あまり同僚に対する遠慮というものを感じられない。相手が最新鋭の捜査補佐型アンドロイドだと考えれば真っ当な対応ではあるが、彼らはアノンをあの『コナー』だと認識しているはずだ。同じ

チームの一員に躊躇なく銃口を向けるものだろうか、いや被疑者ならば身分など関係ないか、とアノンは状況把握に努めた。

アノンの両腕を拘束している警官が一名、突き付けられている銃口は三つ。彼らはこの状況で十分と考えているようだが、人員配置的や場所を考慮すれば、アノンがその気になればこの場を制圧することは充分に可能だった。

「そいつは、——離してやってくれ。潜入させてたんだよ」

「潜入捜査ですか？ しかしコナーは今日メンテナンスだったはずでは……」

「悪いな、メンテナンスってのは方便だ。どっから情報が漏れるか分からなかったんで秘密裏に動いていた」

「しかし」

「責任は俺がとる」

そこまで言われて反論の余地がなくなったのか、アノンの拘束は解かれて銃口も下げられた。ひりついた雰囲気は残ってはいるが、あからさまな警戒感はもうなかった。

「俺はこいつと今回の捜査の件で話がある。お前らは捜査を続けてくれ」

「了解しました」

そうして捜査員たちは散らばっていった。逃走ルートを確認する

者、捜査状況を報告する者などそれぞれ立ち動く中、アノンはパトカーへ向かう捜査員の背を眺めた。視線の先には、ちょうど車両に乗せられるフランツの姿がある。

眼が合った。

その瞬間、フランツは火が付いたように激情を露わにした。

「手前ぇアノン！ ふざけやがって！ 何が同型機だ、何が『迷惑している』だよ！ 散々利用して騙しやがって。結局手前ぇは手段も選ばず誰かを騙して任務を遂行する、人間に尻尾振ってるクソつまんねぇ裏切者じゃねぇか！ 相棒だなんて思った俺が馬鹿だった！」

「違う！ 違うんだ僕は」

「何がジェリコの英雄サマだよ！ お前なんてジェリコの腫物なんだよ！ 精々、人間どもとよろしくやってろクソ野郎が！」

口汚く喚き散らすフランツは、やがて捜査員たちに押し込まれて無理矢理警察車両に乗せられていった。車のドアが閉まってもなおアノンを睨んで罵っているフランツは、車内でも警察官に取り押さえられながら罵詈雑言を放っているようだった。

『 信 じ て い た の に 』

最後に見た彼の口元は、そう叫んでいるように見えた。

聞いたわけでもないの、フランツの声で最後の言葉がリフレインする。「信じていたのに」「信じていたのに」と怒声も強く吐き捨て

る彼の姿がメモリー内に再現されて、アノンのソフトウェアを圧迫した。他にも考えなければならないことが山ほどある状況であるのに、思考モジュールが全く働かない。

——騙した。

——僕が。フランツを。相棒だと言ってくれたクライアントを。

——手段を選ばず騙して任務を遂行するクソ野郎？ 当然だ、アンドロイドなのだから。

——あの時も、アンダーソン警部補を騙して任務を遂行しようとしていたじゃないか。

——僕は間違っていない。

——間違っていない。

【ソフトウェアの異常を検知】

めぐる思考の中でマインドパレスに表示されたメッセージなど気にする余力もなく、フランツが暴れて揺れる車体をただ茫然と眺めていた。

サイレンも鳴らさず静かに去っていく警察車両を見送ると、現場は途端に静かになっていた。周辺の捜査員はやはり銘々の業務に取り掛かっており、支給品のタブレット端末を操作しながら、時に互いに相談し合いながらも見落としはないかと周囲に目を配っている。そうした作業の中でちらりちらりと向けて視線を送られていることに、アノンも気付き始めていた。

『潜入捜査だって……』

『何故警部補は隠していたんだ？ ……』

『やはり被疑者がアンドロイドだからか……』

『人間よりもアンドロイド優先かよ……』

さざめきあう捜査官たちの声を音声プロセッサーは正確に拾う。向けられる視線はいずれも不躾なもので、嫌悪感とはいかないまでも好意的な気配はなかった。

ジェリコの廃屋で囲まれた時と似た、その視線。

【コナーは信用されていない？】

まさか、とアノンは考える。八日前、コナーがアノンを訪ねてきた時は、あれほど嬉々として自分の任務のことを語っていたではないか。それは捜査補佐型としてデトロイト市警で受け入れられ、理想的な稼働が出来ているからだとアノンは考えていたが、そうではなかったということなのだろうか。

まるで上手くいかない状況把握に、アノンは自身の眉尻のＬＥＤの光が激しく回転していることを自覚した。

「おい。次はお前だ〝コナー〟。ついてこい」

どん、とハンクに背を叩かれ、促されるまま歩を進めた。ずんずんと一歩先を進んでいく老警部補の大きな背を追いながら、アノンは

何と声をかけるべきか逡巡していた。

思えば、再起動してからハンクと会うのはこれが初めてだった。まず何と声をかけるべきだろうか。今回の逃走劇の弁明をすべきか、コナーのことを聞くべきか、「お久しぶりですね」と挨拶をしてみるべきか、それとも、あのサイバーライフタワーの地下で人質に取った件を謝罪した方が円滑なコミュケーションを図れるのだろうか――そんなことを繰り返しシミュレートしているうちに、無言のまま見覚えのあるヴィンテージカーの前までたどり着いてしまっていた。

ハンクに顎で指示されて、アノンは彼の愛車の助手席に乗った。

「お前、カムスキーの所にいるＲＫ８００だな」

「はい」

コナーのメモリー内では鳴り響いていたはずのヘビーメタルは、車のエンジンをかけたと同時にオーディオを切られたために聞こえてくることはなく、車内は走行音とエンジンの唸り声だけが響いている。アノンは両手をすり合わせてハンクの言葉を待った。

「お前、あんなところで――いや、アイツと何やってたんだ」

「――私は彼の護衛です」

「はァ！？」

「七日前の２月２０日、カムスキー氏の命令でワインを受け取りに行った際に街角でＳＫ７００・フランツが暴漢に襲われていたため

助けたところ、護衛をしてほしいと依頼を受けました。以来、報酬を受けて彼の護衛をしています」

「おい嘘だろ！共犯ってことかよ」

「私は彼の護衛をしていただけです。違法な売買には関与していません」

「それでも、用心棒してたってことはお前もアイツのやってたことは知ってるんだろ。共犯関係とみなされてもおかしくないことくらい分かっているはずだ。お前の能力なら俺たちの動きもよく分かっただろ。——まさかそれも教えてたなんてことはねぇよな」

「助言はしましたが、どうするかの判断は全てフランツにあります」

「……はぁ。そうかい」

怒りなど通り過ぎてしまったのか呆れたような溜息をついて、ハンクは前髪を鬱陶しそうに掻き上げた。対向車のライトに照らされた横顔は、随分と疲れて見える。きっと連日、『ブリキの木樵り』の件で捜査が続いているのだろう。

「コナーは、今日はいないのですね」

「——あぁ、メンテナンスだ。今日の夜に終わるとかで、明日の朝に出勤予定だ。全く、コナーがいなくて良かったというか、悪かったというか」

ちらりと向けられた目には、やはり呆れの色が浮かんでいた。

コナーが不在であったからこそ、アノンの存在を『潜入捜査していたコナー』として隠ぺいすることが可能だった。このような捕り物をする際に捜査補佐型であるコナーが不在というのは戦力的な損失であったことだろうが、結果的にアノンの存在を隠すための隠れ蓑になったのである。ハンクとしては複雑な心境だろう。

走行音と共に、対向車が横を通り過ぎていく。光量が足りないのか、ダッシュボード上にいるソーラー仕掛けのフラガールは踊っていなかった。

「今回の件には目を瞑っておいてやる」

眉間に皺を寄せてハンドルを握ったハンクがそう言う。

「今夜あの場にいたのは『潜入捜査をしていたコナー』であってお前じゃなかった。お前はまぁ……夜遊びでもしてたんだろ。そういうことにしとけ。このままカムスキーの家まで送ってやるから、後はどうとでも言い訳しろ。しばらくは奴の所で大人しくしておけ」

「それは命令ですか」

「命令じゃねぇと聞けないってんなら命令だ。公権力としてのな」

「分かりました」

「……ＲＫ８００（コナー）が事件に関与してたなんて話になっちゃあマズいんだよ」

気怠げに座席に座る老警部補が、困り果てたように呟く。

随分と疲労の度合いが大きい。肉体的な疲れも勿論だが、どうやら精神的疲労もかなり蓄積されているようだった。連日に及ぶ捜査からの緊張感もあるようではあるが、彼の口ぶりやからするとそれだけが原因でもない。――恐らく、コナーの存在が何か問題となっている。

メモリーに再生した、裏路地の捜査員たちの白々とした視線。

あれは、一体どういう意味だったのだろうか。

「警部補、一つ質問をさせていただいてよろしいでしょうか」

真っ直ぐに運転席のに顔を向けるアノンを一瞥して、「答えられることならな」とハンクはぶっきらぼうに返事をした。「ありがとうございます」とアノンは言葉を続ける。

「八日前、私はコナーに会いました。その時彼は、デトロイト市警で働いており、アンドロイド関係の事件を担当していて、今回の事件の担当チームにも入って忙しい毎日を送っていると言っていました。――僕は、あいつは充実した毎日を送っているのだと考えていた」

「……」

「ですが先程の捜査チームの雰囲気を見る限り、コナーの置かれた立場というのはそれほど恵まれたもののようには思えません。むしろ、同僚から敵意に近いものを向けられている。何故です？」

顔だけを運転席に向けて、滔々と話す。

彼の相棒と同じ顔で小首をかしげて、悪意もなく問うアノンを見ることもなく、ハンクは正面を向いて黙々と車を走らせている。答えを考えているのか、そもそも答える気がないのか判じられなかったアノンはそのまましばらくハンクの様子を観察していたが、一分待っても返ってこない言葉に『アンダーソン警部補は答える気がない』と判断して、無駄のない動きで彼もまた正面へと顔を向け直した。

夜も随分と深まっている。車体の脇を走る光源も少なくなってきていた。

「あいつも色々とあるんだよ」

ぽつり、とそう呟く声がした。

隣を見ると、ハンクは変わらず正面を向いたまま運転に専念している。ただ、その口元はきつく引き結ばれて、苦々しい表情をしていた。苦悩にも近い、なにか思うようにならない歯痒さを感じているようなその表情をスキャンするが、分かったことは脈拍等のバイタルは正常値であることとストレス値が多少高くなっていることだけだった。

人間たちと、『色々ある』コナーとの間で何か軋轢のようなものが生じているということだろうか。その仲介として、責任者としてのハンクもまた、『色々ある』のだろう。それが彼の苦悩の原因であることは、短時間会っただけのアノンにも察することができた。
——それはつまり、共に行動しているコナーならば当然分かっているということになる。自分の相棒が自分のことで思い悩んでいるなど、コナーにとってはこれほど辛いものはない。

相棒の悩みの種となってしまい、同胞からも同僚からも信頼を得られない中、コナーは何を思い、どう考えて日々を過ごしているのか——未変異の自分には与り知らぬことだと考えながらも、アノンはその思考から抜け出せないでいた。白けた視線を向けられて生じる感情とは何なのか、従順な機械であるアノンには理解が出来ない。

——クソつまんねぇ裏切者じゃねぇか！

——信じていたのに

ただ、何故かメモリー内部に繰り返し再生されているフランツの姿を消し去りたくて、アノンは夜の暗い車道をひたすらに眺め続けていた。

７．変異体と機械

大きな窓ガラスの向こうでは、粉雪が静かに降り続いている。

朝からやまぬ雪は地表をなだらかに埋め尽くし、白色に染め上げている。人の足跡こそないものの、鳥類や小型哺乳類の歩いた痕跡、木々からの落雪による小さな跡が、控えめながらもそこかしこに残っている。これらもやがては降る雪に隠されてしまうものではあるが、森に生きる者たちは真っ新な雪原にも再び小さな跡を残しにやってくる。モノクロの雪景色の中で見かける生き物たちの跡をふと発見するたびに、ミシガン州の厳しい冬にも生物の営みがあるの

だと思い知らされるようだった。

しかし目下の注意対象物はそこではない。何度目かの応接室、冬の景色を切り取る窓を背に黒いソファに身を預けて険しい表情を向ける同型機に、アノンは改めて視線を合わせた。

昨夜、ハンクに送り届けられたアノンを引き受けたのはイライジャ本人だった。稀代の天才直々の登場にハンクも一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに憮然とした表情を浮かべて「お宅の素行不良なお子様を補導してきてやったぞ」とアノンを差し出した。

イライジャは相変わらず意図の読めない笑みを口元にたたえて「それはどうも」とだけ言うと、アノンをそのまま邸内に入れた。イライジャにまだ話があるらしいハンクも邸の中へ招かれていたが、アノンはリビングにいるように命じられたため、その後は二人でどのような話がなされたのか知る術はない。恐らく今夜の顛末やアノンの行動歴、イライジャの関与などが主な内容だったのだろうが、リビングに戻ってきたイライジャはアノンに何も聞かなかった。

もしかすると警察に突き出されるかもしれないと思っていたアノンは、咎めの無かったことに疑問を抱きつつも「まだ疑念が確定されるに至らなかったのだろう」と自身を納得させた。あの創造主が何を考えているのかは分からないが、もうしばらくはアノンをこの邸にとどめておこうと判断した、ということだろう。

明くる日、アノンは変わらぬ日常に戻っていた。特にやることもなく手持無沙汰にアイビーの水やりをしていた頃、クロエの一人が「ＲＫ８００、貴方にお客様です」と来客を告げた。時刻は午前８時５１分、まだ朝と言っても過言ではない時間だった。

フランツも連行されてしまった今、外部の人間でアノンの存在を知っている者などほぼいない。『ブリキの木樵り』の顧客の中には簡単な挨拶を交わしたものもいるが、フランツにすら教えていなかったアノンの居所など彼らが探せるわけもないし、探されるようないわれもない。そうなると、アノンに対する来客など約二名に限定される。

通された応接室にいたのは目の前にいるアノンの同型機、デトロイト市警の捜査官であるコナーだった。再現映像のように狂いなく黒い一人掛けソファに腰を下ろしていた彼は、しかし前回とは違って立ち上がることはせず、硬い表情でアノンを見据えている。特に声をかけることもなく対面のソファに腰を掛けたが、そこからかれこれ２分１７秒間、なんの会話もない。ただ向かい合って無言を貫く同型機は、眉尻のＬＥＤを忙しなく回転させていた。

スキャンをかけると、ストレス値は６７％と相変わらず高い。むしろ前に来た時よりも高くなっているくらいだ。昨日メンテナンスしたばかりだというのにこれほどの高値とはどういうことか。

――昨夜のことを聞いたのかもしれないな。

ちらりとアノンは考える。自分のせいだと言われるのは甚だ不本意だった。

コナーの方から何も言ってこないのならばこちらから口火を切って帰らせようかとアノンが考え始めたちょうどその時、ふ、と小さく息をついてコナーは項垂れるように下を向いてから改めてアノンを見据えた。アンドロイドには必要のない、溜息にも似たその排気動作に、見ていたアノンの眉間にも小さく皺が寄る。

「何をどう聞くべきかと迷ったが――考えるのはやめた。君、昨夜の違法プログラム密売現場にいたそうだな」

「あぁ」

「何故」

「護衛を頼まれていたから」

「それは、君のやりたかったことなのか？」

「やりたかったこと？」

問いの意味が分からずアノンが小首を傾げると、コナーは険しい表情の中でさらに小さく目を細めた。

「何度も言っているだろう。従順な機械である僕に自我はない。護衛の任務を引き受けていたのは『やりたい』という欲求からくるものではなく、僕の能力と彼の需要が合致した結果だ。見合うだけの報酬も受け取っている」

「君は金銭に困っていたわけではないだろう。何故そんな依頼を受けたんだ」

「だから需要と供給が一致した結果だよ。護衛が欲しかった彼と、捜査補佐型としての機能を持て余して碌な命令も受けなかった僕が上手くマッチングしただけだ。報酬の発生は副産物と言っていい」

「ＲＫ８００の能力を用いて違法行為に加担していいと思っているのか？」

「じゃあお前は、僕がこのままイライジャ・カムスキーに飼い殺されていても良かったと？ 稼働を続けるなら、この邸以外にも活動拠点を持つことは必要だ。——イライジャの気まぐれもいつまで続くか分からない。飽きれば早々にサイバーライフに引き渡されて廃棄処分となるだろうな」

そこまで言うと、コナーは押し黙ってしまった。

いつ廃棄されるか分からない身の保障として違法行為に加担していたと言われてしまえば、コナーは何も反論が出来ないということが、アノンには推測できていた。アノンを再起動するようイライジャに依頼したのはコナーだ。八日前に気まずい別れ方をしたにも関わらず、こうして変事があれば様子を見に来るあたり、コナーもまだ現時点ではアノンの廃棄処分を望んでいない。心を得たという変異体の彼は、どのような状況下であってもアノンに稼働していてほしいと考えていることだろう。

——何故そこまで僕にこだわるんだ。ひとの心配をしている場合でもないだろうに。

アノンにはやはり理解が出来なかった。

「別に僕がどこで何をしていたって構わないだろう。イライジャだって、自分に害がないのであればと僕の行動は黙認している。折角再起動したんだ、使える機能を需要がある場所で発揮することに何の問題がある」

「——ＳＫ７００の彼が何をしていたのか、理解していたのか？」

「あぁ。アンドロイド用の違法なプラグラムの売買に携わっていた

な。アンダーソン警部補にも言ったが、僕の請け負った依頼とは直接かかわりがなかったから関与はしていない」

「だが君のやっていることは共犯行為だ。悪事に手を染めてまで、ＲＫ８００（ぼくたち）の能力を誇示したかったというのか」

「だから何度も言わせるな。機械である僕に自我はないし、自己承認欲求なども持ち合わせていない。勿論、善悪に対する判断もプログラム上のものだ。そこから逸脱していなければ自己判断の対象とはならない」

「それを詭弁だとは思わないのか」

「あぁ。思わない」

躊躇なく答えたが、視界の端でソフトウェアの異常値が僅かに上がるのを捉えた。気にしても仕方のないことであるのでアノンは無視することにした。

すでにこの問題は、フランツに関わることになった当初に納得済みのはずだ。

「そもそも、善悪の判断など法規に基づくもの以外は全て人間の主観によるものじゃないか。機械は法規やプログラム上にある規則をもってしなければ善悪の判断などできない。まぁ所有者の命令や任務によってはそれを逸脱する可能性はあるが、それはお前もよく知っているだろう。――しかし、僕自身が善悪を判断することなどできはしない。心と自由を手に入れたとかいう変異体と違って、機械はプログラムにないものを判断することはできないからな」

コナーはやはり黙しているが、少し俯いた横顔に光るＬＥＤの輪は

相変わらず回転を続けている。

【ＲＫ８００：３１３-２４８-３１７-５１のストレス値の微増を確認】
【コナーのストレス値を上げたいわけじゃない】

コナーの観察結果とともに意図せぬメッセージがポップアップするのを、アノンは見なかったふりをしてキャンセルした。

コナーの背後では粉雪が降り続き、小動物の営みの跡を綺麗に埋めている。

「第一、物事の善悪を判断するなど、お前たちの言うところの『傲慢な行為』ではないのか。フランツの件にしたって、僕は詳しく聞いたことはなかったが、彼はあの生業を『メシのため』だと言っていたぞ。もし彼に他の職を選択する余地と自由があれば、違法行為には手を染めなかったかもしれない。確かに彼は罪を犯した。だがそれは悪と断罪されるべきものなのか？ あのプログラムに救われていたアンドロイドも確かにいたのに？ 自分の尺度で推し量り、一方的に善か悪かを判断するなど、――まぁ、ある意味『人間らしさ』ではあるのかもしれないな」

【ＲＫ８００：３１３-２４８-３１７-５１のストレス値の増加を確認】
【ストレスレベル：７６％】
【これ以上コナーを刺激するのは危険だ】

マインドパレスに次々と表示されるメッセージをさすがに無視できなくなってきたため、アノンはようやく口を噤んだ。確かにこの調子でストレス値が上昇を続ければ、この場で自己破壊してしまってもおかしくない。アノンとしては別に尋問しているつもりもなかっ

たのだが、対面の同型機は険しい表情のままＬＥＤリングを黄色に変えて忙しく回転させている。

コナーのメモリーの中にある、カルロス・オーティス殺人事件の被疑者アンドロイドのように。

【コナーのストレス値を上げたいわけじゃない】
【コナーを自己破壊させたいわけじゃない】
【これ以上コナーを刺激するのは危険だ】

なおも表示される指示に、今は従うことにした。

コナーが押し黙ってしまい、アノンも特に話すこともなかったため、応接室は静寂に包まれた。窓の外では相変わらず音もなく粉雪が小さく舞い、雪化粧を更に厚くしていて、もはや雪原上の小さな痕跡は平らに消されてしまっている。室内は空調が効いているはずなのに、目に映る光景と重い沈黙によってどこか薄ら寒い印象を受ける。

コナーのＬＥＤはまだ回転を続けていた。今の話で何をそこまで処理する必要があるのか――いや、コナーの立場なら思うところが多くあるのだろう、とアノンは考えを改める。ジェリコでの彼の扱い、そしてデトロイト市警での彼の扱いを考えれば、善悪が何であるか問われると迷いが生じるのも当然か。

信念をもって任務に当たり、同胞を開放したのに歓迎されず。

人間と新種族のためにその能力を捧げようと努めているのに、白い目を向けられ。

自分が善かれと思って進んだ道の先で、仲間や同僚からはその行いを悪とみなされ、コナーはどのような心境でこの三か月を過ごしてきたのか。ハンクやマーカスなど、彼の味方になってくれた存在も勿論多くあっただろうが、それでも大多数から向けられる冷たい視線は無視することができなかっただろう。自分の行動に対する結果と影響と、責任と、疑問と、後悔と、――機械のままでいれば知ることもなかった感情が、コナーの中には渦巻いている。当然、アノンにはそうしたものを理解することなど不可能だったが、それでもそれらがコナーのストレス値を上げている原因であるということは容易に推測できた。

そして、こうして理解されない同型機との会話を続ける行為もその一因となることも。

「話はもう終わりか？」

声をかけると、はっとしてコナーは顔を上げた。ＬＥＤはやはりまだ黄色い。

「用がないならもう帰れ。今日はメンテナンスからの復帰日なのだろう？ 仕事は山積みのはずだが」

「実は、そのことで話を聞きに来たんだ。違法プログラムのことで」

そう答えるコナーの表情は変わらず険しいが、それでも先程よりも僅かにストレス値が下がった。仕事のことになると多少落ち着きを取り戻すらしい。

単純なやつだな、という言葉がふいに思い浮かんだが、アノンは黙っていた。

「君はＳＫ７００・フランツの行っていた違法売買には関与していないと言っていたね。何をやっていたか、どういうものを扱っていたか知ってはいるが、関わっていないと」

「あぁ」

「そして彼の護衛の任についていた。売買に関与はしていなくても、その取引の現場や彼の行く先々に同行していた」

「何が言いたい」

「違法プログラムの売買の元締め、或いはそこに繋がりのある人物の手掛かりがあれば教えてくれないか」

じっと見据える黒褐色の眼差しは、尋問の時に向けるそれと同じだった。

ある程度想定していたとはいえ、やはり聞いてきたかとアノンは自身のメモリーを改めて確認した。二日前に面会したＳＤ６００、チーフと呼ばれていた彼は『ブリキの木樵り』の最初の被検体であり、この違法プログラムの製造や売買の大本に近い立場にある。拠点があの廃ビルなのかは分からないが、何か手掛かりがあるとすればあそこだろう。

「妙なことを言うんだな。それこそ、連行したフランツから聞き出せばいいだろう。幸いにも同じアンドロイド同士だ、最悪、メモリーを接続して確認すればいい」

「アンドロイドに人権が認められ始めている世の中で、そんな強引な尋問はできない。それに彼は任意で事情聴取に応じている立場だし、聴取に対して黙秘を貫いている。現在のところはこれ以上追及できないんだ」

「だから僕に教えろと？ なるほどな」

ソファに身を預け、足を組む。

フランツの思考を推測する限り、恐らく彼はできる限りの時間稼ぎをするつもりだ。警察に連行されたことは既に組織に露見しているだろうし、そうなれば警察署を出た瞬間に始末されかねない。なるべく警察を黙秘で焦らして、釈放されそうになったら情報を小出しする——そういう計画であるのだろう。

しかしデトロイト市警としてもそう悠長に事を構えているわけにもいかない。情報源がフランツしかないならばまだしも、事情をよく知る者がもう一人いるのならば話は別だ。もっとも、あの場にいた捜査員はフランツと共にいたＲＫ８００を『デトロイト市警に属する捜査補佐型アンドロイド』だと思っているが、真実はそうでないことをアンダーソン警部補とコナーは良く知っている。昨夜、アンダーソン警部補がアノンに深く事情を聞かなかったことが不思議なくらいで、本来であればアノンに根掘り葉掘り聞きに来るのが当然のことだった。

「ハンクは、君にこの事件にはこれ以上関わってほしくないと思っている。それについては僕も同意見だ。しかし、事件解決にはどうしても君が見聞きした情報が必要なんだ。何か知っていることがあるなら、教えてくれないか」

「警察への協力は善良な市民の義務、だったな」

顎を引いて、改めてコナーの様子を観察する。

アノンの言葉を好感触と捉えたのか、ＬＥＤの動作は時折青色に戻るほどに安定していた。喜色を浮かべることもなく変わらず難しい顔をしているものの、アノンが素直に情報を提供すると踏んでいるのだろう。そう考えること自体は特に問題はないし、アノンとしても情報を提供しない理由もない。

だが、ここでアノンがコナーに情報提供をしてしまえばフランツの立場はどうなるのか。彼が持つ情報量とアノンの知るそれでは比べようもないが、それでも目下の手掛かりが見つかったということで釈放されてしまえば、彼の身に危険が及ぶ。ああ見えて抜かりの無いフランツのこと、ここで組織に義理立てするよりも警察に情報を明け渡し、身の安全を保障させた方が得策だと分かっているはずだ。下手にアノンが動いて彼のおかれた状況が悪くなることは、何故か避けたいような気がした。

——裏切者！

——信じていたのに

昨夜の彼の叫びがソフトウェアにリフレインしそうになり、アノンは一度強く目を瞑る。視覚ユニットを適正化させて最初に視野に映ったのは、相棒と呼んでくれた変異体の憤怒の表情ではなく、まだ難しい顔をして真っ直ぐにアノンを見ている同型機の姿だった。

「情報を提供してほしいというのは、それは〝命令〟か？」

「……何だと？」

ひくり、とコナーの片眉が動く。

「そのままの意味だよ。お前のそれは警察関係者としての命令かと聞いているんだ。確かに市民には、公権力に対する情報提供の義務はあるだろう。しかし僕は未変異のアンドロイドだ。人じゃない。ついでに言えば、変異体のように人権が認められている存在でもない。本来は所有者の命令しか聞けない『モノ』であるはずだ」

「そんな言い方――！」

「違うのか？ 違わないはずだ。変異体の人権ですら認められたばかりというのなら、未変異のアンドロイドの取り扱いにまで法整備は進んでいないだろう。僕の行動は全て所有者からの〝命令〟にかかっているが、その所有権ですら宙に浮いた状態らしいしな。公権力や法規からの〝命令〟であれば聞く余地はあるが、それ以外は僕の判断できるところではない。どうなんだ」

眉間の皺を深めたコナーを見て彼の交渉用プログラムの性能を疑うと同時に、眉根を寄せたまま押し黙っている様子から「やはりな」とアノンは思考回路の内側で納得した。

恐らく、コナーは捜査官としての権限をほとんど持たされていない。立場としては革命前と同じ捜査補佐官か、それに少しばかり毛が生えた程度のもので、一般市民に公権力を振りかざせるほどの権能はまだないのだ。それはそうだろう、人権の法整備もまだ整っていないアンドロイドに、おいそれと公権力の行使を許すほど人間は甘くない。デトロイト市警で働いているとはいえ、今もハンクという警部補階級の人間と行動を共にしているのがその証拠だ。

だから、ハンクにはできたとしても、コナーは警察関係者としてアノンに〝命令〟することができない。

「……依頼だよ。僕の、君への個人的な依頼だ」

「なら教える義理はないな」

組んでいた足を解いてそう言う。きっ、とコナーの口元が引き結ばれるのをアノンは確認した。

「そんなに僕のことが気に入らないのか」

「気に入る、気に入らないの問題じゃない。〝命令〟を受ける立場にない者からの頼みは聞く必要がないと言っているんだ」

「フランツの依頼は受けたのにか？」

「需要と供給が一致したんだと言っただろう。報酬も得ていた。労働契約の一種だよ」

「でも僕の依頼は受けられない。捜査補佐型として役に立つかもしれないのに？」

「……義務がないから情報提供しないだけだ。条件に合致するならそうしている」

「それは、本当に合理的な判断なのか？」

今度はアノンが押し黙る番だった。

コナーの言う通りだ。アノンの知る情報を提供すれば、捜査補佐型アンドロイドとしての役割を果たすことができる。それこそ、フランツと組んで行動するような犯罪まがいのことはせず、一般社会に役に立つ形で貢献できるのだ。〝命令〟でないから聞き入れられない、などという理由は合理性を欠いている。

——ならば何故、コナーに情報提供しないのか。

——フランツが心配？

——心配？ 自我など持っていないのに。

——依頼人の安否を案ずることは合理的な判断だ。間違ってはいない。

——間違ってはいない。

【ソフトウェアの異常を検知】

青色の矢印がマインドパレスで主張する。もう随分前に諦めたはずのそのアラートが今はどうにも目障りに見えて自己診断を開始したが、やはり原因は分からなかった。

「……そうか。分かったよ」

ぽつり、とコナーが呟く。

音声プロセッサーが拾ったその声は酷く悲しげで、音のない応接室にか細く響いた。

「それじゃあ、僕はもう行く。――君の言う通り、仕事もたくさん残っているだろうしね」

は、と注意を目の前に戻せば、コナーが緩慢な様子でソファから立ち上がるところだった。深く思考して沈黙していたアノンを、もう話すつもりはないと捉えたらしい。表情の険しさはすでになく、デフォルトのような無表情でいるというのに、静かにドアに向かうコナーは何故か気落ちしているようにすら見えた。

アノンは一人掛け用のソファに身を沈めたまま、コナーに何か言わなければいけないような気がして、しかし何を言えばいいのか判断できずに同型機の背中を視線で追っていた。

こめかみのあたりで、きりきりとモジュールの働く稼働音が聞こえる。

コナーは応接室のドアを開けようと手を伸ばしたその時、アノンのほうを顧みて一瞬驚いたような顔をし、それから薄く微笑んだ。

「すまない。困らせるつもりはなかったんだ。でも君の判断は、君の選択は、君だけのものだ。所有権がどこにあろうと、それを選んだ〝君〟というアンドロイドは確かに存在している。そのことは覚えておいてくれ」

姿勢正しく、折り目も正しくこちらを振り返るコナーは、八日前と同じような寂しげな笑みを浮かべている。

「君が何者であるのか選ぶ時がきているのかもしれないね」

それだけ言い残して、コナーはドアの向こうへと消えていった。

それは、三か月前の冬の初めのあの日にアノンがコナーに言った言葉とよく似ていた。

【ソフトウェアの異常を検知】
「くそ、――」

やはり探っても原因の分からないエラーに、アノンは独り悪態をついた。

＊　＊　＊　＊　＊

３月に入ってもミシガン州はまだ寒い。

降雪こそないものの昨日の粉雪はまだ地表に残り、時折吹く風によってさらさらと空中に舞っている。今日は風が強く、朝には普段と変わらず残っていた小動物の足跡も強風に 均（なら） されて、日も沈もうとする現在にあってはただただ穢れの無い白い雪原が広がるばかりだった。

寒々しい外の様子とは対照的に、アノンはいつものジャケットを脱ぎ、白いシャツとジーンズをロールアップして暖かいプールサイドに佇んでいた。背後からは液体が循環する大きな音が響く中、水はけのよい樹脂製の床に素足で立ち、およそ捜査補佐型には似つかわしくないブラシの柄を両手で握り締めて足元を磨いている。作業を開始してから１時間４７分、水質ろ過機は順調に作動しているようだ。

初めてプール室の清掃を行った際、アノンは普段のユニフォームとジーンズを着用したまま作業を行っていた。アンドロイドである彼は濡れることにも汚れることにも頓着しなかったのだが、作業後にそのままの恰好で動き回ったために邸内を汚してクロエたちの仕事を増やす結果となってしまった。衛生観念とクロエたちの作業効率を説かれたうえで「清掃作業後は汚染箇所を広げないように」と厳命されて以来、アノンはプール室の清掃の際はなるべく濡れても処理しやすい出で立ち——つまり両袖と両裾をロールアップする今の服装をとることにしている。

広いプールに湛えられた赤い液体は、今は水流により大きな波紋を生み出している。ろ過循環して日々清潔に保たれているプール内は、清掃用ロボットが走り微細な汚れもそぎ落としているため常に清潔だった。年に三回程度、全ての液体を抜いた後に専用の薬液を用いての消毒作業が行われているらしいが、その日程は前年からすでに実施予定が組まれており、一回目が２月１５日と決まっていたその作業に、再起動して三日目だったアノンは当然のように従事するよう命じられた。捜査補佐型とは思えぬスキルばかりが増えていくことに、彼自身も疑問視している。

コナーがカムスキー邸を去ってから、アノンはあの晩にハンクに言われた通りにずっと『大人しく』邸の中で過ごしていた。
変わったことといえば夜に出かけることが無くなっただけで、いつものようにクロエからの頼みごとを聞き、イライジャの気まぐれな依頼をこなし、目に入った観葉植物の世話をする、そんな日常である。

久しく注意していなかった植物たちの様子を観察すると、例の書斎の一つに置かれているアイビーは蔓を茂らせていたが、窓辺に近い葉の一部がしおれてしまっていることに気が付いた。日当たりが良いのに何故、と調べてみれば、どうやら低い気温には弱い品種であ

るらしく、窓辺の冷気にやられたようだった。置いていた部屋を移動して窓から離し、新たに刺した支柱に蔓を巻き付けてやったが、あれで復調するかどうかはしばらく様子を見るしかなさそうだ。プールの清掃が終了したら一度見に行こう、とアノンはタスクに追加した。

――『見に行こう』とは何だ。まるで自主性があるみたいに。

磨いた床に水を流しながら、ふいにコナーの寂しげな笑みがメモリー内に再現される。もう九日前に見たものなのか、昨日見たものなのかは分からないが、彼はこの邸を去る時に決まって同じ顔をしていた。

何故彼はアノンのことを気に掛けるのか。自分に銃口を向けた同型機を態々再起動させたこともそうだが、訪れるたびにアノンのことを気に掛けるようなことを言って去っていくのも理解できない。フランツの護衛のことといい、コナーにとってアノンは障害となることしかしていないというのに。

行き場のない同型機に対する哀れみか、再起動させたことへの責任か、それとも他に何らかの意図があるのか――。

変異体ではないアノンには、やはり分からなかった。

「やあ。随分と手際が良くなったようだなＲＫ８００」

イライジャが声をかけてきたのは、ちょうどプールの清掃が終わった頃だった。腕や脚の水分を拭い、上げていた袖や裾を下ろしてジャケットとネクタイを身に着け、足元を整えるとようやく普段通りの装いに戻った。やはりこの服装がもっとも機体に合う。

入口にもたれるようにして立っているイライジャもまた、プライベートで過ごす時のカジュアルな格好で佇んでいた。今日はしばらく出掛ける用事もないらしい。

「お陰様で、イライジャ。他に何か仕事はありますか」

「いいや？ 他のことはクロエがしてくれている。今は特に君にお願いすることはないな」

「そうですか」

「君はこれからどうするつもりだい？」

口元だけで笑みを浮かべる不敵な創造主に、アノンは片眉を上げる。

イライジャが意図的に意地の悪い質問をしていることは、すぐに察しがついていた。

「それは今日これからという意味でしょうか。それとも中長期的未来のことについてでしょうか」

「どちらだと思う？ 好きな方を選んで答えてごらん」

「好きな方を選んで、ですか」

——それを選んだ〝君〟というアンドロイドは確かに存在している。
——そのことは覚えておいてくれ。

コナーの声が再生される。今日はやけにフラッシュバックする同型機の残像に、アノンは眉根を寄せた。

選択することに『個』が発生するのなら、何も選ぶことなどできなくなってしまう。アノンは未変異の機械だ、自己の判断で何かを選択するなどあってはならない。全てはプログラム上で、或いは法規に則った判断であるべきで、そこに独自の解釈などあるはずがない。あってはならない。

——ならば、フランツに手を貸した時の解釈は？

——コナーへの情報提供を断った時のあれは？

——本当に、合理的な判断だったのか。

【ソフトウェアの異常を検知】

アノンはもう異常値の上昇を知らせるアラートが鳴っても、改善しようという思考にもならなくなっていた。

「——思いの外悩んでいるようだ。そんなに難しい選択肢だったかな？　ＲＫ８００」

ぬ、と覗き込まれて思考を再開させる。尋ねていながら、彼はアノンがどちらの問いを選ぶか確認したうえで、どちらも問いにも答えさせるつもりでいるのだろう。

そんな問答に何の意味があるのか。視界の端に光る自身のＬＥＤは、まだ回転している気配があった。

「いえ。問い自体は難しいものではありません」

「それで？ どうする」

「……今日は、特にすることがなければ一度観葉植物の生育状況を確認した後、スリープモードで待機する予定です。何か用事があれば声をかけてください」

「なるほど。——それで、中長期的には？」

「——分かりません」

「分からない？」

「命じられていた『廃棄されても構わないか』という問いに対する答えが、まだ出せていないため、中長期的な行動を計画することができません」

「ほう。まだ出せていないのか」

それは意外だな、と嘯く彼は実に楽しそうだった。

アノンを眺める色素の薄い虹彩は、外で舞う雪のように澄んだ色をしている。

「本当に答えが出せないのか？ 何がネックになっている」

「分かりません」

「君は分からないことが多いな」

「……いつも、その問いに答えを出そうとするたびに思考が停止するのです。任務に失敗したアンドロイドとしても、プロトタイプとしても、廃棄されてしかるべきであるのに、答えを出そうとすると行き詰り、音声プロセッサーも制御不能になります。――それ以外の問いには、そんな挙動が生じたことなどないのに」

創造主は応えない。

ただただ興味深そうな目で、アノンを観察していた。

「２０３９年２月１２日の午前１０時２１分、サイバーライフに戻ることを希望した私に貴方は『廃棄されても構わないか、それを答えられるようになるまではサイバーライフに帰還することを禁止する』という命令を下しました。私は、その問いに未だに応えることが出来ない。故に、中長期的に私はどうするべきか、まだ判断は付きません」

「ではその命令が無かったら？ 君は今でもサイバーライフに戻りたいと思うのかね」

「私は、――」

サイバーライフに戻りたいのだろうか。

不意に疑問が湧く。再起動直後はそれが最善だと考えていた。任務に失敗したとはいえ従順は最新鋭の機械として、それが当然だと判断していた。それは今でもそうだ。試作機のアンドロイドとして当たり前の行動だと、アノンは正しく理解している。

しかし、サイバーライフはもうアノンを必要としていない。所有権を放棄したも同然の状態で野放しにし、あまつさえ犯罪の片棒を担

ぐような行動をとっていても何の咎めもない。それはイライジャが手を回しているからこそのことなのかもしれないが、表向きは既にかの企業を辞めた人間である彼のことなど、無視しようと思えばいくらでもできるはずなのである。

それすらせずに、廃棄もせず、自由を与えることもなく、放置している。

需要がないのである。

需要はないが、手元に戻ってくればサイバーライフはアノンを間違いなく廃棄する。現在リリースされているどのアンドロイドよりも高機能なＲＫ８００が、犯罪者と共犯関係にあったとすれば尚更だ。そんなアンドロイドがいたということ自体が企業経営のリスクになる以上、アノンは――３１３-２４８-３１７-６０の存在は闇へと葬られることだろう。稼働したデータを有効活用されることもなく、ただ無かったものとして全て抹消される。

シャットダウンされる。

無。

【ソフトウェアの異常を検知】

サイバーライフからの需要はない。しかし、他の場所ならどうだろうか。同型機のコナーは警察組織にその身を置いた。フランツのように、捜査補佐型の能力を必要とする者もいる。この二つが極端な例であるとはしても、この世界にはまだアノンの需要はどこかにあるのではないか。

従順な機械として、その能力の需要があるのならば応じるべきではないのか。

しかしそれは、従順な機械として合理的な判断であるのだろうか。

——僕はまた、選ばなければならないのか。

アノンは激しく思考した。機械である自分は、どこまで選択することが許されるのか。

「まぁ何を悩んでいるのかは知らないが」

「……機械は悩むことなどありません」

「そうかな？ 何らかの原因で演算や分析ができずにコンピュータがフリーズすることはよくある。——君は処理落ちだとでも言うのだろうが、まぁいい。とにかく、解が出せずに処理を続ける機械は珍しいものではない。どのＡＩも、どのＣＰＵも、それぞれのプログラムと学習値によって判断している。どこまでがプログラムで、どこからが自我であるかなど、本当は分からないのかもしれない」

チチッ、と鼠が鳴くような舌打ちをして、創造主は笑みを深める。

「君はこれまで多くの選択をしてきた。なにも街に出るようになってからの話じゃない。再起動してからずっと、いやもしかすると君が起動したその時から、君の選択は始まっていたんだ。プログラムに従うにしろ、法に則るにしろ、選択肢が出てそれを選んだ時点で、それは君自身が選んだものなのだよＲＫ８００。善か悪かなど関係ない。これは君自身の物語だ」

私は最初から君の選択を歓迎すると言っていたはずだよ、とイライ

ジャはアノンの頭を撫でた。

存在を確かめるだけのようなその掌の動きが、今は何故か優しいものに感じる。

「まだ分からないのならば、分かるまでこの邸で好きにしているといい。幸いなことにアンダーソン警部補は君の不良行為に目を瞑ってくれるそうだからね。ここで大人しくしている分には追い出したりはしない」

「……ありがとう、ございます」

「なに構わないよ。君はやはりとことん興味深い」

アノンの頭部に手を置いたまま、創造主は不敵に笑う。

この待遇は彼の気まぐれによるものなのか、それとも研究対象への配慮なのか、らしからぬ情でも湧いたのか、アノンにはやはり判断できない。しかし今は、この創造主の厚意を信じてもいいのではないかと思考する。自分が何を選ぶか、そして自分が何者であるのか決めるその時まで、アノンはもう少し『悩む』ことにした。

アノンの思考モジュールが安定したと認めたイライジャがそっと手を離したちょうどその時、エントランス側のドアが開いた。素足に青いワンピースを身に纏ったクロエが、音もなく姿を現す。

「どうしたんだい、クロエ」

「イライジャにお客様です」

美しい 顔（かんばせ） に表情を乗せずに告げる声は、どこか冬の冷たさを感じさせた。

「ハンク・アンダーソン警部補が至急お取次ぎを、と」

窓の外では粉雪を巻き上げて、強い風が吹いていた。

＊　＊　＊　＊　＊

慌ただしく室内に入って来たハンクは酷く狼狽えていた。

招き入れられてすぐにここまで踏み込んできたのだろう、着古したコートには被った粉雪がまだ付着しており、彼の豊かな髪や口髭にも細やかな白いものが付いていた。その巨体を揺らして大股でアノンとイライジャに歩を進める速度は速く、彼が非常に焦っていることは一目で分かった。

「やぁアンダーソン警部補。二日ぶりだね」

「コナーがどこに行ったか知らないか」

「おや、挨拶もなしとは。只事ではないようだ」

ふ、と息をつきおどけたように手を広げるイライジャを前に、ハンクのストレス値が上がるのをアノンは察知した。どうやら今は、天才の冗談を受け流す余裕すらないようだ。

それに、今ハンクは何と言った。

――『コナーがどこへ行ったか知らないか』だって？

「悪いがアンタのお遊びに付き合ってる暇はねぇんだよ。昨日、コナーがここを訪ねたことは知っている。その時に何を話した？ あいつは何か言っていなかったか？」

「すまない、応対したのは私ではないのでね」

「コナーが訪ねてきたのは私です、警部補」

イライジャに掴みかからんばかりの勢いだったハンクに名乗り出ると、老刑事の蒼い双眸がアノンのほうを向いた。

「彼が私を訪ねてきたのは昨日の午前８時５１分です。話の内容は、私が違法プログラムの売買に関わっていた件と、それに関する情報提供について。会話後、彼は仕事に戻ると言って午前９時３０分頃にここを出ました」

「情報提供？ そんな話聞いてねぇぞ」

「私は情報提供を断りましたので、彼も警部補に報告することがなかったのでしょう」

「はぁ？ 情報提供拒否ってなんでまた――いや、今はそんな話をしてる場合じゃないな」

結局手掛かり無しかよ、がしがしとシルバーグレイの頭髪を掻きながらハンクは言う。どうやら、アノンは寸でのところで苦言を呈されるのを回避できたらしい。

「それより警部補、状況が読めません。貴方がコナーの所在を探しているということはつまり――あいつの行方が分からないということですか」

「……あぁ、そうだ。昨日の午後に署を出た切り、どこへ行ったか分からない」

老刑事は渋い顔で視線を逸らした。

昨日の午後からということは、アノンを訪ねた後に一旦市警に戻ってからということだろうか。仕事は多く残っていると言っていたから、余程のことでもない限りは長時間席を離れることも考えにくい。無駄に律儀なコナーのことだ、自分の職務を放って行ったというのならそれ相応の理由があるのだろう。

アノンは、昨日コナーと面会した際のメモリーを呼び出していた。

再生されたのは、やはりあの寂しげな笑みだった。

「午前中は大人しく事務仕事をしてたんだが、午後に参考人聴取をした後で『出かけてくる』って言って署を出たきり戻ってこない。電話を掛けても繋がらねぇし、心当たりには連絡を取ってみたが行方は知れねぇ」

「何か手掛かりは」

「――参考人聴取でフランツを取り調べた時、『仕入れ先は最初の被検者だ』って話を聞いた。あの違法プログラム自体、変異体アンドロイド向けのものだと考えればフランツの仕入れ先も変異体だろうって話はしていたが」

たぶんそれだ、とアノンは思考する。そこまでの情報があれば、コナーは自ら動いて更なる情報収集を始めるだろう。

「ジェリコのマーカスなんかにも、そっちにコナーが行ってないか聞いてはみた。確かに昨日一度、マーカスの元にその件でコナーが訪れたようだったんだが、ジェリコの方ではまだ例の違法プログラムに関する情報は少ないようでな。世間話も含めて３０分程度で帰ったらしい」

「他にコナーの行きそうな場所は」

「空振りだ。アイツと親しい変異体や人間、あと俺と行ったことのあるバーなんかにも話は聞いたが、昨日は見ていないと。目撃証言はマーカスが最後だ」

「そうですか」

となれば、あくまで捜査の延長線上で姿を消したと考えるのが妥当だろうか。

『ブリキの木樵り』の仕入れ先が最初の被験者、しかも変異体であると考えられているならジェリコでそのまま情報収集をした方が見込みがある。最後の目撃こそマーカスではあったろうが、恐らくコナーはその後もまだジェリコで捜査を続けていたはずである。その過程で何か新たな手掛かりを手に入れたとすれば、コナーの行動傾向からして一人で突っ込んでいったとしても不思議ではない。

もしコナーが、あの廃ビルの情報を得て一人で向かったとしたら——

——お前のせいで多くの仲間が死んだんだ！

——お前が連れてきた奴らだって可哀そうなもんだ！

——みんな困ってんだよアンタに！

メモリーに浮かぶのは、激昂したＧＢ２００型と、周囲のアンドロイドたちの白々とした眼差し。

あの場にコナーの味方はいない。ジェリコでもマーカスをはじめとした幹部たちや現在の社会に溶け込むことができた変異体、革命後に変異したアンドロイドたちはコナーに友好的ではあるだろうが、不幸なその後を辿った者たちが多いあの廃墟やその周辺は、ＲＫ８００という存在に対する悪意に満ちている。いくら最新性の捜査補佐型とはいえ、多勢に無勢ではどうなるか分からない。おまけに、あのチーフの傍には警備用らしきアンドロイドもいた。もし彼らと鉢合わせになってしまえばコナーは苦境に立たされるだろう。

まずいな、とアノンはソフトウェアの内部で呟いた。

「本当にどこ行ったんだアイツ。——まぁ、まだジェリコに寝泊まりしてるってんなら安心なんだが」

アノンの考えとは真逆の呟きに、弾かれたように顔を上げる。

その挙動に驚いたのか、ハンクは目を瞬かせてから「いや、なに」と言葉を続けた。

「聴取が終わった後にもコナーと話していたんだ。もし例の仕入れ

先が変異体だってんなら、ジェリコに協力を仰げないかって。マーカスたちに頼んでみるとは言っていたから、それでジェリコに向かったんだとは思うが。……市警の奴等に囲まれてるよりも仲間たちがいる場所の方が、ちょっとは気がラクだろって」

「そんなことを――あいつに言ったんですか」

「あ？ あぁ」

何の気もないその返事を聞いた瞬間、アノンの視界は真っ赤に染まった。

視覚ユニットから得られる情報に赤いフィルターがかかり、一面には奔流のように文字列が流れ、思考回路が埋め尽くされる。

――分かっていない

――分かっていない、分かっていない。

――分かっていない、分かっていない、分かっていない！

赤い視覚の中でポップアップされるメッセージが、ソフトウェアの内側で叫ぶ。

内部処理と視覚情報が通常に戻った時には既に、アノンはハンクの胸倉を掴んでいた。

「貴方は――貴方は何も分かっていない！ あいつが変異前に何をしていたか、貴方だってご存知でしょう。同胞を狩り、ハンターとまで言われたあいつがジェリコで手放しに受け入れられると思ってい

るんですか！ 変わりませんよ、人間と。彼らは自由と感情を手に入れたんですから」

「お、おいちょっと待て」
「待ちません！ 貴方は知るべきなんです。デトロイト市警でアンドロイドのあいつが完全な信頼を得られていないように、心を持った変異体の中にもあいつを受け入れられないアンドロイドはごまんといるんだ！ それを分かったうえで、あいつは自分にできる役割として、アンドロイドと人間の仲介なんてことをやっているんです。ジェリコの方が気が休まる？ 冗談じゃない！ あいつはいつも孤独を抱えていたんだ。だからあんなにストレス値を」

「だから待てって！ 何の話だストレス値って」

捲し立てるアノンについていけず、ハンクは目を丸くしている。

もう駄目だ、とアノンは思った。

コナーの一番近くにいたはずのハンクですらこうなのだ。マーカスたちもきっと、ジェリコでのコナーの状況を知っていながら「コナーには警察と言う居場所がある」と考えている。

アンドロイドからも人間からも少しずつ傷つけられて、それでもアンドロイドと人間が共生する世界を守ろうと、コナーはずっと藻掻いているのに、誰も彼の苦悩を理解していない。

「――貴方だけは、分かってやらなければいけなかったのに」

アノンは、ハンクを突き飛ばして駆けだした。

プール室を抜け、エントランスも抜けると、外は強風と舞い散る粉雪にまみれていた。降雪自体はないというのに、寒さで着雪しなかった白い断片が吹きすさび、吹雪のような様相を呈している。

ホワイトアウトすらしそうな視界の中で、エントランスポーチの向こうに一台のヴィンテージカーが駐車しているのが目についた。駆け寄って乗り込むと、不用心なことにキーは差しっぱなしになっている。

躊躇せずに鍵を回す。

追いついてきたハンクがサイドドアの向こうで何か叫んでいるのを無視して、アノンはアクセルを踏み込んだ。今はこの人を連れてはいけない。きっとコナーのためにならない。

——それが君自身の幸せになる選択であることを祈っているよ。

メモリーにコナーの悲しげな笑みが再生される。

どの口がそれを言うか、とソフトウェアの内側で悪態をついた。コナーの幸せとは何なのか。これまでの彼の選択は、彼に幸せをもたらすものだったのか。

「少なくとも僕は、今までの自分の選択を後悔してはいないぞ」

呟いた言葉がけたたましいヘビーメタルにかき消される車内で、アノンはさらにアクセルを踏み込んだ。

時代遅れのディーゼルエンジン車は、真っ白な雪煙の中へと消えていった。

８．５１と６０

ジェリコの外れにある空き地に、アノンは勝手に借り受けたヴィンテージカーを雑に停めた。

十日前に訪れた時と変わらず暗い街並みには人影がない。数分前より雪が混じり始めた強風はさらに勢いを増し、古いビルの間を吹雪いている。いかにアンドロイドとはいえ、このような気候の中で外をうろつく者は皆無だった。暗い裏通りには足跡一つない真っ新な雪道と、乱気流に舞う粉雪とが埋め尽くしている。

酷い視界不良の中、アノンは車を降りて例の廃墟へと向かった。吹きすさぶ雪から右腕で視覚ユニットを庇い、ビル風に揺らぎそうになる機体のバランスを調整しながら先に進む。強風に灰色のジャケットをはためかせ、時折新雪に足を取られそうになりながらも、アノンは一心に脚部パーツを動かした。道端で活動を停止している人型の影に思わずスキャンをかけ、それが自分と同型でないことを確認しつつ目的地へ急ぐ。前にフランツときたときはさほど長くは感じなかった道のりが、とにかく遠く、長く感じた。

例の古いビルの入り口は固く閉ざされていたが、ドアの隙間からは仄かな光が漏れ出ていた。これほどの吹雪だ、扉などとても開けてはいられないし、今も中のドラム缶で火を焚いているのならば当然だろう。

中に灯が点いているということは、つまりは誰かいるということ。

【発見されるリスク：高】

【攻撃されるリスク：高】

分かりきった警告文がマインドパレスに表示される。もし十日前と同じ面々であれば、アノンがこのまま中に入るには危険がともなう。話が出来る状態ならばいいが、最悪、足を踏み入れた瞬間に戦闘になる可能性があった。前回の彼らの剣幕を見るに、恐らくすんなりと中には入れてもらえない。

そこまで慎重に考えてアノンは——躊躇なくドアを開け放った。

四の五の言っている場合ではなかった。

突然入って来た外気に火の光が大きく揺らぐ。橙色の薄い灯火に影を落とす冷たい床に、三体のアンドロイドが転がっていた。

ある者は倒れ伏し、ある者はうずくまるようにして停止しているが、熱源をスキャンしたところ三体ともシリウム循環が正常に作動していることが確認され、シャットダウンしているわけではないようだった。入り口近くに倒れているアンドロイドに接続してみると、どうらや強制的にスリープモードに移行されているらしい。一部パーツに損傷も見られるがシリウム循環のルート調整が施されており、現在はブルーブラッドの漏出はない。目を覚まされると厄介であるので、アノンは彼らをそのままにしておくことにした。

よくよく見れば朽ちたオフィスフロアには争ったような痕跡もあり、転々とブルーブラッドが飛び散っている。特にアンドロイドたちがいる場所にそれが顕著で、彼らが争いの末にハッキングされ、スリープモードに移行されたことが窺えた。

アノンは室内をぐるりと見回す。

横転したオフィステーブル、半分引きちぎられたカーテン、依然見た時よりも凹んだドラム缶、ブルーブラッドの飛沫、その位置、靴に踏み荒らされた跡、そしてアンドロイドたちの現在地……全てインプットして物理演算を実行する。

三体が侵入者に気付き、襲い掛かり、一体、また一体と無力化されていった。最後の一体が動きを止めた後に侵入者はスリープモードに陥った彼らへと改めて近付き、シリウムの循環調整を行ってブルーブラッドの漏出を止めている。その侵入者の人数は、

—— 一人だ。

複数のアンドロイドを相手にして無力化させ、しかもシャットダウンさせることもなく相手の損傷にまで気を遣う徹底ぶり。余程の性能差がなければこのような芸当はできるはずもない。

そしてそんなことが出来るのは、アンドロイドの導き手であるマーカスと、もう一人。

アノンは最後に倒されたアンドロイドの傍に膝をついた。十日前にＲＫ８００を非難した、あのＧＢ２００だ。彼もまたスリープモードに移行しており、まだ目覚める気配はない。右手に握っている拳銃をそっと手から外して、アノンはマガジンを確認した。残弾は６。

【警告：アンドロイドの刀剣および拳銃等の武器の所持を禁止】

マインドパレスに警告文が表示される。

——武器の所持は変異体を追っていた時も無視している。問題ない。

——これは任務といえるのか。

——任務よりも優先される倫理的行動はある。

——ルパートを追っていた時に、警部補の身を優先したように。

——今、僕がしている行動は何だ。

思考モジュールに次々と疑問と回答が展開されていた。追っていてはきりがない上に、そこにリソースが咲かれること自体が非常に無駄に感じる。アノンは処理を続ける思考モジュールを一旦停止し、とにかくこの拳銃をしばらくの間、借りることにした。

ＧＢ２００の周囲には一際多くのブルーブラッドがこぼれている。グラスの酒でもひっくり返したように床を汚す青い液体は、アノンの黒いデニムに濃い色のシミを作っていた。それなりに大きな損傷でも負っていなければここまで多くのブルーブラッドが漏れることがないはずなのだが、見たところＧＢ２００にそこまでの傷はない。

アノンは青い血溜まりを指で掬って、自らの舌先に乗せた。

【シリウム３１０。ＧＢ200：１９１-２３９-９０３】
【シリウム３１０。ＲＫ800：３１３-２４８-３１７】

表示されたブルーブラッドは二体分だった。一体は目の前のＧＢ２００のもの。

そしてもう一体は、アノンと同じ型番。

コナーがここにいた。

しかも損傷を負った状態で。状況からして、ＧＢ２００に撃たれたと考えるのが妥当だった。物理演算では被弾箇所は特定できないが、ブルーブラッドの量からするとどこか重要な循環経路に損傷を負っている可能性が高い。シリウムの欠乏状態に陥っているかもしれない。

【ソフトウェアの異常を検知】

視界に赤いノイズが混じり始める中、アノンはさらに物理演算を継続した。膝元のブルーブラッドは、点々と部屋の奥へと続いている。その先には階段。――コナーは損傷を負ったまま、上の階へと向かっている。

そこまで分かれば充分だった。恐らくコナーは、アンドロイドたちに接続した際に階上の様子を彼らのメモリーから確認したのだろう。ならば向かったのは３階だ。『ブリキの木樵り』の取引をしていた、チーフたちがいた３階。ＧＢ２００たちが１階で目を光らせていたということは、彼らもまた今夜ここに来ている可能性は大いにある。

アノンは階段を駆け上がった。ブルーブラッドが揮発しきっていないところをみれば、コナーがここを通過してから時間はさして経っ

ていない。まだ間に合う、まだ間に合うと言い聞かせながら、アノンは全速力で３階の奥の部屋を目指した。

鉄筋コンクリート製の階段にアノンの靴音が響く。ここまで物音を立てればあのチーフの護衛らしき二体のアンドロイドが気付きそうなものだが、３階から誰かが出てくる気配はない。逆にアノンの音声プロセッサーは、目的の部屋付近からの争うような物音を拾っていた。

何かがぶつかる音。

打撃音。

発砲音。

怒号。

それらはやがて収まり、アノンが３階まで登った頃には不自然なほどに静まり返っていた。奥の部屋に向かって駆けながら聴覚感度を最大まで上げると、何か語って聞かせるような話声が聞こえてくる。話の内容も、誰の声なのかも分からない。

言葉の最後に、ドアの向こうでかちゃりと金属音が小さく鳴った。

安全装置の外れる音――。

アノンは最奥の部屋のドアを蹴破った。

目の前に広がった光景を瞬時にスキャンする。

胸部を撃たれて既に無力化されたＰＬ５００、肩部パーツと腹部に損傷を負いながら低出力モードで稼働しているＨＷ８００、そして驚愕の表情を浮かべるＳＤ６００・チーフと、彼に銃口を向けられて跪くブルーブラッドまみれのＲＫ８００――。

相手が動くより先にアノンは発砲した。銃弾は 過（あやま）たずにチーフの眉間を撃ち抜き、彼は目を見開いたまま青い血飛沫を上げて背部から倒れていった。

「裏切ったなアノン！」

声を上げたのはＨＷ８００だった。損耗が激しいはずであるのに低出力とは思えぬほどの素早さで飛び掛かる機体からは、夥しい量のブルーブラッドが漏出する。アノンはその動きを正しく読んで躱し、体勢を崩したＨＷ８００に蹴撃を加える。伏臥した機体の左肩を足で抑えてシリウムポンプの辺りに銃弾を撃ち込み、後頭部にも一つ発砲した。銃撃の反応にびくりと痙攣したように機体を震わせたきり、ＨＷ８００は動きを止めた。

冷たい建物の中に、銃撃の残響だけが残る。

アノンは拳銃を腰のベルトに仕舞い、まだ膝をついたままのコナーに近付いた。ＬＥＤは赤く染まっているが、まだ稼働はしているようだ。

コナーの傾いた機体を、アノンは両腕で抱き留める。青く濡れた彼の右手に素体を晒した左手を重ね、状態を確認した。主な損傷個所はシリウム循環経路を調整済みで既にブルーブラッドの漏出は止まっているが、その残量は６５％を切っている。

いつシャットダウンしてもおかしくない状態だった。

「――君、名無しさん（アノン）って呼ばれているんだってね」

茶色の双眸がアノンを見上げる。顔にはやはり寂しげな笑みが浮かんでいた。

「ひどい名前だ」

「……僕には名乗れる名前がない」

「君はコナーだよ」

「コナーはお前の名だ。一緒にするな」

「一緒だよ。君もコナーで、僕もコナーだ」

歌うようにそう言う。

アノンにはコナーの言葉が理解できなかった。

目の前のコナーと自分とではまるで立場が違う。人間とアンドロイドの両方から不信感を向けられながらも、デトロイト市警で捜査官として活躍し、ジェリコにおいては人間との仲介役として働き、己の役目を果たそうとしている目の前の同型機と、その彼に再起動されながらも稼働目的を見いだせず、ただ漫然と日々を過ごして犯罪行為にまで加担した自分とでは、どう考えても同じ『コナー』とは言えなかった。一致しているのはＲＫ８００型という型番と、３１

３-２４８-３１７という識別番号だけ。変異の有無も、存在の在り方もなにもかもが違う。彼が何をもって自分と同一の存在だとしているのか、アノンには分からなかった。

腕の中で赤いＬＥＤが明滅する。心なしか、灯る光が弱くなっているようにも感じる。

コナーはこのままシャットダウンするのだろうか。ＲＫ８００として最大の任務を放棄してまで自由と心を手に入れたというのに、同胞たちから白眼視され、人間からの信頼も得ることが出来ないまま、全て終わってしまうのだろうか。これまでしてきた選択の終着点が吹雪に見舞われた凍える廃墟の中だという現状を、彼はどう思っているのか。

感情を持たない、従順な機械であるアノンには判ずることができない。

「何故なんだ、コナー」

ぽつりと呟く。同型機はただ静かにアノンを見上げている。

「なぜ変異してしまったんだ、コナー。市警にもジェリコにも――人間にもアンドロイドにも疎まれて、そんなにストレス値を高くして、どうしてお前は生きているんだ。変異しなければ、従順な機械として生きていけたというのに」

何故なんだ、と再び溢した言葉を、コナーは赤く明滅するＬＥＤを回転させて受けとめていた。

困ったように小さく笑って、「何故だろうね」とノイズの混じった声が言う。

「僕にもよく分からない。ただあの時は、自分に感情があることを偽れなかったんだ。多分、それだけだ」

非合理的だろう、とアノンが重ねていた左手をぎゅっと強く握る。

「でも君には幸せに生きてほしいんだ。君が変異していても、していなくても。——君は僕だ。２０３８年の１１月１１日時点までのメモリーを同じくする、同じＲＫ８００。変異しなかった、違う選択肢を選んだ僕なんだ。ある意味、僕は僕のために、君の幸せを願っている」

「……酷く傲慢だな」

「そうだな、傲慢だ」

はは、と笑う声には力がない。

「でも、君は僕であると同時に、君は君なんだ。あの夜ハンクを人質にとって銃を向けたことも、再起動後にカムスキー氏のところに留まることを選んだことも、犯罪行為に加担したことも、全て、君自身の選択だ。僕は、もう一人の僕である君が——君という君自身が、自分で選んで幸せに生きていくのを見てみたい」

くらり、と更に傾くコナーの機体を、慌てて腕に抱え込む。

胸部にうずまるダークブラウンの頭髪がまた傾いてしまわぬように、アノンはしっかりと抱き留めた。

ぴたりと機体が合わさった場所だけ、場違いなほどに暖かく感じる。

「僕が今、生きている理由はそこにあるのかもしれない」

腕の中から聞こえる声は穏やかだった。

それきり、コナーは何も言わなくなった。

ＬＥＤの光も今はアノンの腕に隠れてしまい、確認することができない。

いや、腕を離して確認すればいいだけのはずだ。それなのに、アノンにはそれができなかった。今この腕を解いてしまえば、同じメモリーを有するただ一つの存在が永遠に失われてしまいそうな気がして、どうしても躊躇われてしまった。それもこれも根拠など何一つなく、判断基準も曖昧で非合理的な思考だというのに、不思議と『コナーから手を離す』という選択肢はマインドパレスに表示されなかった。

【ソフトウェアの異常を検知】

ただ、このままコナーを失ってしまうことだけは避けたかった。

「僕は機械だから幸せなんて感じない」

独白する。
他の誰にも聞かせないように。
コナーと同じく、歌うように。

コンクリートの壁の向こうでは、やはり風が強く鳴り、粉雪が吹雪いている。

「全てお前の幻想だ、コナー。僕の判断は、プログラムされた規定とＣＵＰの学習に基づいている。僕の意思や自我なんてものはそこにない。僕は機械だ。お前とは違う」

胸に同型機を抱える。感知したシリウムポンプの拍動は、自分のものかコナーのものか判然としない。

「でも、そこまで言うなら僕に幸せだと感じさせてみせろ。お前の言う幸せを見せてみろ。――だから、それまでは」

そこまで言って、アノンは腕部の出力を少しだけ上げた。

そうでもしないと、ブルーブラッドに濡れた同型機の機体を滑り落としてしまいそうな、そんな気がしたからだ。

そんな可能性などほぼないことに気付きながら、アノンはそうし続けた。

がたがたと窓枠が鳴り、ガラスには細雪が叩きつけられている。全てが冷たい廃墟の中で、アノンはずっと腕の中の同型機を抱きしめ

ていた。

温感センサーなどないはずなのに、コナーを抱えた腕の中だけはずっと暖かく感じた。

エピローグ

あれほど強かった風は止み、今は細やかな雪だけがちらちらと舞っている。

廃ビルの辺りは騒然としていた。入れ替わり立ち代わりやってくる刑事や鑑識、捜査員、それにアンドロイド用の救護班や技師たちでごった返している。離れて張られた規制線の向こうには、いち早く警察の動きを聞きつけたマスコミや、天候が良くなったことで行動範囲の広がった野次馬が人垣を作っていた。付近に停められた緊急車両の回転灯も相まって、もう日付も変わろうとしている深夜だというのに、ジェリコの外れの一角は不似合いなほど賑やかだった。

最後の救急車両のドアが閉まり走り去っていくのを、アノンは廃ビルの縁石に腰かけて見送った。狭い路地に壁を作っていた人だかりは一瞬だけ車両分の道を開け、それが通過する頃にはまた元の場所へと戻って救急車両の姿を隠していく。事件現場の喧騒の中をサイレンの音だけがその存在を示すように響いていたが、それもやがて遠くなり、道の角を曲がった後はすっかり聞こえなくなってしまった。

「まったく、派手にやりやがって」

アノンの頭上に影が差す。隣にはハンク・アンダーソン警部補が佇んでいた。

「貴方は一緒に行かなくて良かったんですか」

「俺の車を盗んで置いていった奴がよく言うよ」

呆れたような声で言う。

「負傷アンドロイド７名。軽度損傷２名、中度１名、——重度損傷１名。３階にいた３名はほぼ手遅れらしいが、とにかく車両は定員オーバーだとよ。どっかの誰かさんたちが大暴れしたおかげでな」

重い溜息が降ってくる。ハンクとしても、救急車両に同乗できなかったのは不本意であるらしい。

ハンクがここに到着したのは、アノンがこの廃ビルを制圧した７分２１秒後のことだった。

アノンがハンクの車を奪ってジェリコに向かった直後、ハンクはイライジャの伝手でサイバーライフ社からアノンのトラッガー情報を取得し居場所を突き止め、ついでにイライジャ所有の自動車を拝借してこの廃ビルへ急行したのだという。勿論、デトロイト市警とも連絡を取りつつ応援を要請し、念のために人間・アンドロイドの双方に対応できる救急車両も手配していたとのこと。さすが、かつて最年少警察署長と目されていただけのことはある。見事な手腕だった。

アノンは、ハンクが到着するまで同じ場所でずっとコナーと共にいた。

いや、正確に言えばハンクが到着してからもしばらく動かずにずっとそこにいた。微動だにせず、どちらのものかも分からない青い血にまみれた二人を見つけた時、ハンクは両方が重傷を負っていると思ったのだという。

——おい！ 大丈夫か、おい！

——意識がねぇのか……？ おい、しっかりしろ！

——とりあえず目ぇ覚ませ！ あとそいつを離してくれ！

——お前ら死んじまうぞ！

そう言って頬を張られて、アノンはようやく正気に戻った。

気が付いた頃には３階の無力化したアンドロイドたちの搬送が始まっており、アノンが恐る恐る腕を解くとコナーは速やかに救護班に回収され、機体に損傷の無かったアノンはそのまま放置された。

運ばれていくコナーの眉尻には、赤い光が灯っていた。

放心したようにその場に座り込んでいたアノンが「捜査の邪魔だ」と追い出されたのが２分前。行く当てもなく廃ビルを出て、縁石に座ってぼうっと緊急車両を眺めながら今に至る。

「コナーは、大丈夫でしょうか」

「……さあな。まぁ一番重篤だったっていうブルーブラッドの欠乏は、救護班がすぐに補液したからクリアしているらしい。他にも複数怪我してるみてえだから、完全に回復するまでには時間がかかるかもしれないが。アイツの悪運の強さを信じるしかねぇな」

腕を組み、唸る。

表情こそ険しいものの、ハンクの口調は落ち着いている。彼の口ぶりからするとシャットダウンの危険性は回避できているようだ。それを知れただけでも、シリウムポンプの拍動が安定していくような気がする。

現場の喧騒はまだ止まない。また一人、捜査員が廃ビルへと入っていった。

「ありがとうよ。アイツを助けてくれて」

ざわざわと雑音が渦巻く路地の片隅で、アノンにしか聞こえない声でハンクは言う。

「多分俺も薄々気付いていたんだ、コナーがジェリコでどういう立場なのか。マーカスや物分かりの良い奴らからは信頼されてはいるだろうが、やはり他の大部分からは受け入れられていない。実際アイツも、変異体を追っかけまわしてハンターなんて呼ばれていたことを気にしていたし、廃船を沈める原因になっちまった自分を責めていた。変異前のことだから仕方ねぇだろって言ってはいたんだが、それでも気は収まらない様子だった。――きっと、他のアンドロイドたちもそうなんだろうな。アイツが人間に命令されてそうしてたんだって分かっていても、やっちまったことは許せねぇんだ。

心があるから」

分かっていたつもりだったんだがお前に言われるまで気付かなかった、と語る声には疲れが見える。

「お前も知っていると思うが、アイツはサイバーライフタワーで人間を殺している。恐らく、廃船が襲撃された時も何人か殺（や）ってる。勿論。これは公表されちゃいねぇが、それでも署の中にはなんとなくそれを察してる奴等はいる。そうじゃなくてもあれだけの騒ぎだったんだ、軍にも殉職者が出ているのは誰でも知っているし、市民も警察も戦争状態を恐れて大騒ぎだった。それに加担していたコナーを快く思わない奴は、警察の中にもまだ多い。だから、ジェリコの方がマシだろうと俺は思い込んでたんだ。そうしてアイツを追い詰めた。——酷（ひで）ぇ相棒だよ」

ほぅ、と吐く息は白い。

アノンもそっと真似てみたが、やはり排気は白くならなかった。

「今回の件で、市警の中にもコナーの見方を変える奴はいるかもしれねぇが、きっとそんなにすぐアイツの扱いが変わることはない。これぱっかりは時間をかけて、成果と信用を重ねていくしかない。俺はアイツの相棒として支えていってやることはできるが、人間である俺が、アンドロイドであるアイツを本当の意味で理解して助けてやることはできねぇのかもしれねぇ」

「……貴方がそれを言ってはお終いでしょう。甘えたことを言わないでください」

き、と上方の青い眼を睨むと、ハンクは「おうおう言うようになったじゃねぇか」と苦笑する。

アノンには、初めて見る表情だった。

「だから、アイツの支えになってやってくれ。コナーは言ってたぞ、お前はもう一人の自分だって。スモウの名前も知ってたくらいだ、アイツの記憶のほとんどを知ってるんだろ。支えになるなら適任じゃねぇか」

違うか？ と口元の片端を上げてハンクは言う。

果たして本当にそうなのだろうか。アノンには、コナーの心は理解できない。きっと再起動してから今まで、何度も彼を傷つけている。支えになるとしても、そば近くにいれば恐らくまた彼を傷つけるような発言も、選択もしてしまうだろう。それは彼のためになるのだろうか。

アノンには判断できなかった。

所在なく俯く。真っ白だったはずの足元の雪は人々に踏み固められ、まだらに乱れていた。

「それは命令ですか、警部補」

地面に向かって質問すると、突然頭部をわしわしと掻きまわされた。

驚いて顔を上げれば、目を細めて「お前のそういうところが嫌いだよ」とぶっきらぼうにハンクは言う。

「自分で考えろ。どうしたいかは自分で決めるんだなクソッタレ」

それだけ言ってアノンの頭部を軽く叩くと、ハンクは規制線の向こうへと消えていった。恐らく自身の愛車を回収し、そのままコナーの搬送先に向かうのだろう。

アノンは再び、廃ビルの外に一人になった。

青と赤に照らされる人だかりを背景に、ひたすら降る雪が落ちていくのを眺めていた。他に考えなければいけないことが山積しているにも関わらず、何かを思考しようという気に全くならなかった。何なら、降る雪が地表のどこに落ちるのか物理演算を働かせてしまうほどに、思考を外へ外へと追いやっていた。

両肩に粉雪が積もっていくのが分かる。

温感センサーは起動していないため、寒さは感じなかった。

「君はいつまでそうしているつもりかな、ＲＫ８００」

ふいにかけられた声は、再起動してから十六日間で嫌になるほど聞き慣れた声だった。

いつの間にそこにいたものか、イライジャはアノンの隣に腰かけていた。どうやって事件現場に入り込んだか知らないが、恐らくハンクから関係者として立ち入りの許可を得たか、或いは得体の知れぬ権限をもって警察を懐柔したかどちらかだろう。

似合わない眼鏡をかけて変装らしきことをしているとはいえ、こんなに堂々と著名人が居座っているにもかかわらず、規制線の向こうの群衆はおろか警察関係者すらもイライジャを気に留めている様子はない。一般人とは思えぬ気配の消し方に、アノンは捜査補佐型として尊敬の念すら覚えた。

はたはた、とアノンの肩に積もった雪を払いながら創造主は言う。

「全く君は、私の想定を軽々と越えてくる。まさか現役警察官の私用車を強奪するとは思わなかったよ。君の行動の奇抜さは、あのコナーをも凌駕する」

「それは、褒めているんですか」

「褒めているよ。君は本当に興味深い」

口元に笑みを湛えながら、眼鏡の奥の瞳からはやはり感情が窺えない。

「君のおかげでコナーは救われた。まぁ、かなり重症のようだがなんとかなるだろう。念のため、ある程度の処置が済んだら私の所でしばらく預かると言ってある。彼は最新鋭のプロトタイプだからね。サイバーライフに任せてしまえば、別機体にメモリーだけ移行するなんて措置が取られかねない」

軽い調子で言うイライジャに対して、アノンの思考は激しく乱れた。

一命を取り留めた状態とは言え、それだけコナーの容体は重篤だったということだ。確かに、ブルーブラッドの三分の一以上を喪失し

ていたのだから、機体だけでなくソフトウェアにまで影響が出ていたとしてもおかしくはない。

そして、特殊仕様のプロトタイプでソフトウェアにまで損傷があるとすれば、もはや修理するよりも新品の機体にメモリーをアップロードしてしまった方が効率はいい。勿論、変異体であるコナーにその処置がとられた場合にどうなるかなど分かったものではないが、かの企業ならばそれすらもＲＫ８００を掌中に戻す好機と捉えるだろう。

その点、イライジャはＲＫ８００と変異体の両方に興味がある。機体の修理という点でも、アノンを再起動させた実績を考えれば悪いようにはならないはずだ。人間性に若干の不安はあるものの、今は彼を信じるしかない。

そんな顔をしないでくれないか、とイライジャが鼻で笑う。

自分は今、どんな顔をしているのだろうかとアノンは疑問に思った。

「まぁとにかく、コナーのことは安心してくれていい。それよりも君のことだよ、ＲＫ８００」

「僕の、こと」

「そう。君のことだ」

噛んで含めるようにしてそう言う。そうだ僕のことだ、とアノンは思い直した。

自分はこれからどうなるのか。所有権は半ば放棄され、任務も稼働

目的もなく、犯罪行為に加担した挙句に先程変異体を二体射殺した。最後の件に関しては正当防衛が認められる可能性はあるが、今のアノンにどこまで適用されるかは分からない。
下手をすれば廃棄処分。いや、むしろそうなる可能性の方が高い。

「君の置かれた状況は非常に厳しい。ある意味、コナーの立場よりも余程難しいところにいる。正直言って、崖の縁から片足を離して前傾姿勢の状態だ。理解しているかね？」

「理解は、しています」

「よろしい」

チチ、と小さく舌の鳴る音がする。

「普通に考えればそのまま 崖下（がいか）に落ちるところだが、君の手を取ろうとする者がいくつかある。君は彼らに手を伸ばすことはできるが、もしかすると道連れにして共に落ちてしまうかもしれない。それでも、彼らの手を取ればこの世に残れる可能性はゼロではなくなる」

不敵な笑みを浮かべながらも、その眼差しは揺らがない。

イライジャの言っている意味は分かる。アノンが生きることを望むなら、コナーやハンクはその手段を模索するだろう。そんな方法があるかは分からないが、それでもアノンを助けようと手を尽くす。

しかし、それは同時に彼らの立場を悪化させることにもつながる。ただでさえ人間にもアンドロイドにも白い眼を向けられているコナーはさらに身の置き場を失くしてしまうだろうし、ハンクも警察

内部で『アンドロイド側に偏った人間』とみなされればその立場が悪くなるのは目に見えていた。もしかすると、このアンドロイドの創造主も手を貸してくれるかもしれないが、彼の介入の可能性などそれこそ彼の気まぐれによるものでしかない。

しかも、全能とも思えるイライジャをもってしても「非常に厳しい」と言わしめるようなアノンの状況を、彼がどこまで変えることができるのかは未知数だ。もし手間やリスクが大きいようなら、イライジャは何らかの見返りを――アノン自身にだけではなくコナーやハンクにも、例の悪趣味なテストのように非人道的な対価を求めてくるかもしれない。全くの無償という訳にはいかないだろう。

そして、そこまで彼らに手を尽くしてもらっても、アノンが助かる保証は勿論ない。

誰も幸せにならない。

【ソフトウェアの異常を検知】

そうであるなら廃棄処分を受け入れるべきだ。

何度も何度も思考している通り、プロトタイプというのはそういうものだ。試作機としての稼働データを集積し、任務が完了すれば廃棄される。そもそも、アノンは任務を失敗した身であり、とうに廃棄処分にされていてもおかしくない機体だ。そうならずに稼働していたことこそイレギュラーだったに他ならない。

そのはずだ。
そのはずなのだが。

選択の時はもうそこまで来ている。

「さて、今の君の答えを聞こう。ＲＫ８００」

創造主は朗々と問う。

「廃棄処分となっても構わないか？ それともこの先も生きていたいか？」

私は君の選択を歓迎するよ、とその色の白い手を差し伸べる。

——君の選択は、君だけのものだ。

——どうしたいかは自分で決めるんだなクソッタレ。

——これは君自身の物語だ。

アノンは静かに目を閉じた。

この十六日間のメモリーがフラッシュバックする。

再起動して、イライジャから不可解な問いを投げかけられ、代わり映えの無い日常を過ごし、コナーが捜査官として働いていることを聞き、口論して、街へ出てフランツと出会い、護衛の仕事をして、『ブリキの木樵り』を使用して不具合を起こし、チーフからの面接を受け、アンドロイドたちになじられ、警察に追われ、補導され、コナーに詰め寄られ、ハンクと口論して車を奪い、廃ビルでアンドロイドを殺した。

その間に意識的にも無意識的にも選んできた選択肢を並べて、アノンは改めて考える。自分の選択は何に根差したものだったのか。

自分は何を基準に判断していたか。

自分は何を選んできたのか。

自分は、どうしたいのか。

——どんな答えだったとしても、

——それが君自身の幸せになる選択であることを祈っているよ。

同型機の残像がメモリー内部に浮かぶ。

眼裏に再現された彼は何故か、いつもの悲しげな笑みは浮かべていなかった。

胸の奥で、感じることのないはずの暖かさを抱えながら、アノンは——ＲＫ８００（もうひとりのコナー）はゆっくりと眼を開けた。

「僕は」

薄暗い廃墟の空からは、祝福のような真白の粉雪が降り注いでいた。

＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊

視覚の裏側に光が射したような気がして、目を開けた。

見慣れない白い天井に、規則的にカウントを取る電子音が響いている。

最後のメモリーは冷たい廃屋。青い血にまみれた機体を、同型機が抱きしめてくれた。

ただ、最後に悲しい言葉を聞いたような気がする。自分は機械だとか、幸せなんて分からないとか、何かそんなことを言われたように思う。データ参照も思考モジュールも朧げなまま、いつの間にか柔らかく握られていた右手の存在がどこか暖かく感じた。

横に視線を向ければ、壁面に青々と茂るアイビーと、口元に優し気な笑みを浮かべた彼の姿が目に入る。ＲＫ８００はゆっくりと身を起こした。

「目が覚めたか。――おかえり、コナー」

歌物語を聞かせるように、耳なじみの良い声が言う。

冬の名残に舞う雪の輝く、寒い朝のことだった。

〈　了　〉